

## 第4章 まとめ

### 第1節 検出遺構について

#### 1 沢検出遺構のまとめ

沢の自然流路内から検出された遺構は、第1号木組遺構、木道、樹皮範囲・杭跡1、板敷遺構、杭跡2、導水状遺構、クリ果皮片集中範囲である。以下にその概要を述べる。

#### (1) 遺構の形態・機能について

構築された場所やそこから想定される機能には以下のようなものがある。

- A類 第1号木組遺構- 自然流路内に木材による枠を設け、水を貯めるもの。この上流側にも板材により段差を設けている。
- B類 導水状遺構- 木材や杭を配置することにより水の流れを変化させるもの。
- C類 杭跡1・2- 流路の壁に沿って打ち込まれたもの。
- D1類 木道- 対岸をつなぐ通り道。
- D2類 板敷遺構- 足場や作業場的なもの。対岸をつなぐ通り道の可能性あり。
- E類 樹皮範囲- 平面的な広がりをもつもの。
- F類 クリ果皮片集中範囲- 剥き終わったクリ果皮を廃棄した場所。

A類 水を堰き止めて流路側縁に木材を配して枠を作ることから考え合わせれば、水を貯めて使用する、あるいは一時期に一定量を確保するという意図がみられる。第1号木組遺構の導水部は、貯水部に入る水(水量・水流速度)の調整にあると考えられる。これは、丘陵から段丘崖までの距離が短いという地形のため、この流路の傾斜角度が大きく、砂や泥を巻き込みながら水が流れていると想定され、この水の流れる速度を調整するために板材による段差を設けた可能性が考えられる。このような主体的機能のほかに、水流の調整が行われることで一時的に水の流れが遮断され、水の溜まる場所として利用された可能性がある。現に、容器状の用途不明加工材(図16)や敲き具や作業台?の可能性のある板材が導水部付近で確認されている。

B類 本流と支流の合流部分の手前、支流側で検出されている。検出された大型丸木材が原位置を留めていない可能性もあるが、ここでは、検出位置に基づいて検討する。支流側の水の流れを大型丸木材で抑えることにより、支流側の水の流れをできるだけ一定にするような配慮がみられる。板材を2枚組み合わせ様状になった遺物の検出状況は、本流の水の流れにこの板材を配することにより水の流れを分岐させる働きがあると想定される。本流の流れに直交して打ち込まれた杭列は、やや間隔が開いた状態であることから、水の流れを止めるほどの施設ではなく、上流から流れてくる枝・葉などのようなごみ類を下流側に流さないための施設の可能性が考えられる。本来は杭に枝などを組み合わせたしがらみ状遺構であった可能性が想定される。

C類 自然流路内の南北斜面際に沿って打ち込まれている杭跡で、杭跡1・2とも、導水状遺構や樹皮範囲などの遺構に近接して検出されており、これらの遺構に補足的役割を持つ可能性がある。杭に使用される材は、割材や板材、転用杭などの断面規模が小さいものが使用され、D層まで打ち込まれていることが確認されている。杭跡は、土留としての機能が考えられるほか、検出されていないがD層が斜面際に沿った道であった可能性も考えられる。

D類 沢の流れに直交して検出された大型の板材や割材で、杭によって固定されている木道(D1類)と、固定されていない板敷遺構(D2類)に分かれる。木道に使用された木材には3つの特徴がある。

1 位置が固定される。2 南北の斜面对岸同士をつなぐ規模を有する。3 構成材は平坦面を持つ。これに対して板敷遺構に使用されている板材は、1 位置が固定されない。2 木道として対岸まで到達しない。3 足場として不安定な形状である。などの特徴がある。板敷遺構の設置された面はⅢB層中であり、水の流れはⅢA層～ⅢB層の層理面までほとんど見られないことから、作業場・足場・木道等、様々な可能性が考えられる。

E類 河床面で、樹皮の広がり確認されたのはAN57の範囲のみである。第2章で第1号木組遺構の底板と同様の役割を、前段階で使用された木組遺構の作り替えの可能性について言及した。樹皮を敷いた木組遺構は他遺跡でも確認されており、本遺跡でもその可能性を考えることはできる。しかし、第1号木組遺構からの水の供給に関連性があることを考慮すれば、むしろ木組遺構と一体となって何かしらの場として利用された空間であった可能性の方が高いように思われる。

F類 ⅢB層中にはクリ果皮片がもともと多く含まれていたが、とくにクリ果皮片が集中する範囲は、継続的に(あるいは一時期に多量に)その場所が廃棄場になった可能性を示す。

## (2) 検出層位別にみた遺構の新旧関係と時期

層位別にみた遺構の検出は以下のとおりである。

ⅢC層検出 第1号木組遺構、木道、樹皮範囲・杭跡1、杭跡2、導水状遺構

ⅢB層検出 板敷遺構、クリ果皮集中範囲

### ⅢC層検出遺構の関連性

ⅢC層検出遺構は上流側から、導水状遺構・杭跡2、第1号木組遺構、木道、樹皮範囲・杭跡1の順である。これらは同じ層位の検出であるが、厳密に言えば、検出地点等や検出面のレベルが各々異なり、これらの同時期性についての検証も必要かと思われる。

水の流れ	上流	B	→	A	→	E	下流
		·		↑		·	
足場?		C		D1		C	

遺構の機能・構造上の分類からみると、各々の遺構がそれぞれの地点で役割を果たし、自然流路内で一体となって機能していた可能性が考えられる。先に述べたように、導水状遺構で水の流れの方向を操作し、第1号木組遺構導水部で水量・水流調整が行われて貯水部内で水のプールが行われ、一定量以上溜まることにより排水部から排水される。排水された水は土留部や木道により土の流入を極力

遅れており、きれいな水のまま樹皮範囲へと注がれる。なお、樹皮範囲より下側には遺構は構築されず、土器の捨て場になっていた可能性が高い。構築時期は、木組遺構出土遺物、ⅢC層出土遺物、放射性炭素年代から、円筒下層b式期と思われる。

### ⅢB層出土遺構の関連性

ⅢB層検出遺構は、板敷遺構、クリ果皮片集中範囲である。板敷遺構は調査区の上流域を中心に50cmから1.8mの間隔で南北斜面をつなぐように置かれている。板敷遺構やクリ果皮片集中範囲3・4はそれぞれ検出レベルが異なり、最終的な検出状況から確認されたものである。新旧関係は、

新 52-3 ← 52-1・2・4 ← クリ果皮片集中範囲4 古  
クリ果皮片集中範囲1～3

の可能性が考えられる。クリ果皮片集中範囲4は、板敷遺構の大型板材が置かれる以前にクリの果皮範囲を形成しており、これらが、絶えず形成されるような環境であったと推測される。

遺構からは、D2・F類の機能が得られ、作業足場+廃棄場という2つの機能が想定される。クリ=食料に関連する遺物として、容器としての用途も想定される舟形木製品や漆器類の出土など、板敷遺構周辺の遺物出土状況を見ると、食料の盛り付けや調理に使用されたと思われる遺物と何らかの関連性を持つ可能性もある。一方土器の出土は沢の下流側AN59・60付近に集中する傾向がみられ、これらの遺構付近では土器の廃棄はあまりみられない。“土器捨て場”と異なり、作業する場としての認識が多かれ少なかれあったと考えられる。

構築時期は、ⅢB層出土遺物・放射性炭素年代から円筒下層b・c式に相当すると思われる。

### (3) 他遺跡との比較 (図166)

自然流路を利用した遺構は近年増加の傾向をみせており、佐々木氏によりこれらに関わる遺構の集積が行われている(佐々木2000)。第1号木組遺構導水部と同じような構造をもつものとして、福岡県長野小西田遺跡例の「上流側の床を保護するために上流側に柵を設け、直接水が床に当たるのを防ぐ施設を設けている。」(前田ほか2001)もの、栃木県明神前遺跡の貯水部に見られる「木組遺構の南西辺を斜めにし、排水のための溝状遺構と接する部分を狭めることにより、水位を上げ、水の流れをスムーズにする構造になっている。」(鹿沼市2002)など、構造上の共通点が見いだせる。長野県栗林遺跡では他遺跡の例を比較して、木枠遺構内に溜まった水が常時入れ替わって行く構造となるものが多いことが指摘されている((財)長野県1994)。

貯水部内に木材を敷く例は、東北地方でも秋田県柏子所Ⅱ遺跡例(村上ほか2003)などに見られ、これ以外にも全国各地で利用されている。栃木県寺野東遺跡ではこの敷材について「足場的なものと考えるより、きれいな水を保つための行為の所産」(江原1998)との見解が示されている。敷材は、水流に対して木材の長軸が直交して敷かれている例と平行して敷かれている例が見られ、本遺跡例は後者に属するが、これらの違いがどこに起因するかを検討していく必要がある。



堰部と同じような構造をもつものとして、新潟県刈谷大平遺跡（柏崎市1985）の堰状遺構、静岡県蛭田遺跡堰状遺構（静岡市1990）、東京都下宅部遺跡の第7号水場遺構（東村山市2000）、寺野東遺跡S X 077の主体部北側などが見られる。堰部によって水を上流側に貯める以外に、下流側で施設をもつものが、寺野東遺跡S X 077と蛭田遺跡堰状遺構の下流で見られる洗場遺構である。S X 077は最低3列の板材が打ち込まれており、主体部とこの北側を区切るものと位置づけられている。洗場遺構は「板材を敷き詰め、3方を木杭と直径20cm程の大きな礫により、固定している部分がある。」という状況である。これらは、本遺跡の堰部と堰部下流側の樹皮範囲を合わせた構造に類似している。

出土物の状況からは、先に挙げた長野小西田遺跡例の大型農具水漬場や明神前遺跡例の貯水部内から石斧柄末製品が出土した状況が類似している点が挙げられる。

立地で見ると、一条の小支谷を利用した本遺跡例のほかに、台地の斜面から湧出する水が集まった谷底の水流を利用した拍子所Ⅱ遺跡例、自然流路内に検出された刈羽大平遺跡例、詳細は不明だが、自然流路内で検出された新潟県寺前遺跡例が見られる。このほか谷本流とその小支谷に遺構が作られる青森県近野遺跡例（村上ほか2003）や寺野東遺跡例、下宅部遺跡例などがある。

#### （4）民俗例からみた例

栗林遺跡で検討されたように民俗例から第1号木組遺構の機能を想定してみる。

ドングリの水さらし トチノキの水さらし例は多く紹介されているが、地方や時代によって少しずつ異なり、多種多様にわたる。ここでは、トチノキの水さらしには触れず、ドングリの水さらし例を検討する。東北地方ではシタミと呼ぶ（コナラ・ミズナラなど）もので、外皮をとり、水に入れて皮を流し、袋に入れて絞り、上澄みを替える。上澄みを何度も変えることにより、得られる食料である。ワラビ澱粉（ネバナ）の水さらし（三浦1983、柴田1999）根を取りだし、川端で洗い、板間の上で杵により砕き、キツ・キツ（根舟）にいれゴミや汚れを除く、すだれを置いて、置き汁を通し、底に沈むのをまち、何回もこれを行う。得られたものは、近世には糊としても使用されたという。ウルシの枝まわし（河南1993）第1号木組遺構では、炭化したウルシ属の種子が出土しており、ウルシの木が木材に加工されていることや漆器が出土していることから、遺跡周辺に自生していた可能性は高い。利用された可能性を考慮して紹介する。

枝まわしは、10・11月ころ、枝を落として適当な本数に束ねたものを10～20日間（『農業全書』では5～7日）切口を下にして水に漬ける（流水でも池水でもよい）。これを取り上げて切り込みをいれると、水分があがって汁がでるようになる」とされている。これは、接着力が強く、修理用に使われたいらしい。

#### （5）遺構の機能と構築時期

本遺跡の沢内に形成された遺構は水を利用した施設である。沢を流れる水を「貯める・利用する」施設であり、これを補助する機能を持った様々な施設を設けている。導水状遺構によって流水の流れを保持し、木道等により、作業に必要な通路を設け、第1号木組遺構貯水部で水を貯め、下流側の樹

皮範囲に水を流している。

他遺跡の例と比較すると、第1に想定されるのが、堅果類のアク抜きを主体とする“水さらし場遺構”である。先述したようにきれいな水を得るための様々な工夫が行われている可能性が高く、きれいな水を常時・多量にということであれば、民俗例に紹介したようなコナラ節の水さらしが想定される。しかし、佐々木氏の指摘するように（佐々木 前掲）トチ塚などのように特定の種類の堅果類が多量に出土しない限り、人為的所作を論じるのは難しい。コナラ属はクリと違って集中範囲等は確認されていないが、細片となったコナラ属の破片が沢の堆積土各所から出土しており、わずかに利用された痕跡が認められるのみである（第3章第11節）。仮に第1号木組遺構の貯水部が単純に堅果類の水さらし場のみで使用されたとすれば、貯水部の規模や破片量からすれば非常に少ないと言わざるを得ない。

第2に想定されるのは、先に挙げたワラビ澱粉の水さらしである。これは、根菜類を掘り上げたと思われる掘り棒（第2節3木質遺物）が貯水部北側でまとまって出土したことや貯水部上面で槽が出土したこと（図18）可能性の一つとして挙げられる。

第3に想定される機能は、貯水部内底面から石斧柄未製品が置かれたような状態で出土していることと関連する。弥生時代の例であるが、長野小西田遺跡の大形農具水漬場にみられるように木器を水漬けする施設としての機能も考えられる。これは、広葉樹の場合とくに強度を保つのに見られる事例である（山田昌久氏の御教示による。）。このほか、伐採実験等の例であるが、石斧の装着部を樹皮で縛って補強しており、石斧を使用しない間は樹皮の強度を保つために水に浸すことを行っている（渡邊晶2000）。

このほか、貯水部での水を貯める機能ばかりでなく、4列目の構造を持つ埋部は完全に貯水部とその下流側を遮断する役割が求められたと考えられ、排水部から流れる水量は常に一定であることが求められたものと思われる。これは下流側に位置する樹皮範囲との間わりが想定され、樹皮そのものを使用するために一定量の水で湿らせた可能性も考えられる（山田昌久氏のご教示による。）。

また、貯水部と埋部の上面からも桶状の用途不明加工材が出土しており（43・2・10）、この木材を使って水を流していたことが想定される。

以上のように、第1号木組遺構は機能を限定されるものでなく、堅果類の水さらし、根茎類の水さらし、木材の水漬け場、洗い場、等水の利用に関わる様々なものに利用された複合施設と考えられる。

## 2 台地検出遺構のまとめ

2カ年の調査で検出された遺構は、竪穴住居跡33軒、土坑23基、土器埋設遺構75基、焼土遺構15基、小ピット群2箇所、土器捨て場2箇所である。遺構に関しては、使用時期の可能性が高い時代の項目で述べることにする。

### （1）竪穴住居跡（図167）

縄文時代前期の竪穴住居跡31軒について述べる。

平面形 円形・隅丸方形のように炉から壁面までの距離がほぼ等しいものが合わせて14軒、楕円形・隅丸長方形のように壁の長さが異なるものが合わせて16軒、台形のもの1軒である。県内で検出された前期の住居跡で最も多いのは楕円形であり、円形住居跡の占める割合が高い。また、津軽地方には円形が多く、南部地方には大木式土器文化の影響と思われる方形の住居跡が多い傾向がある。

平面形の種類(推定のものも含む。)

1類 円形のもの	1・4A・4B・5・7・14C・18・23・25・26・28・29	12軒
2類 隅丸方形のもの	10・11	2軒
3類 楕円形のもの	2A・2B・14A・14B・21・22・27	7軒
4類 隅丸長方形のもの	3・6・8・12・13・16・17・19・24	9軒
5類 台形のもの	20	1軒

規模 2m以上5m未満の小型住居跡が全体の半数を占める。5m以上7m未満の住居跡も全体の四分の一程度を占める。10mを超える大型住居跡が1軒検出されている。

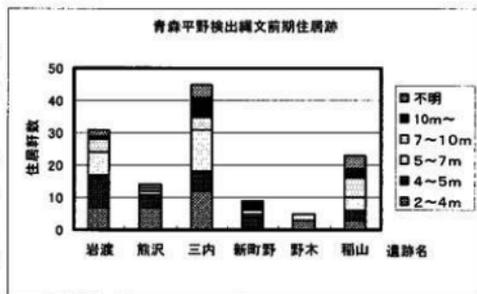
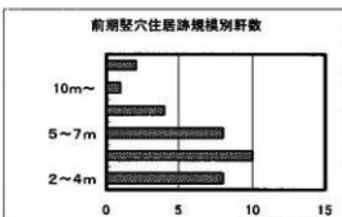
縄文時代前期の遺跡を規模別に見ると、発掘調査の面積や立地、帰属時期などの違いがあるが、青森平野の他遺跡に比べて、2～5mの小型住居跡の割合が高い。とくに、竪穴住居跡の検出数に

比して10mを超える大型住居跡が少ないのが特徴である。

主柱穴配置 住居跡中央に位置する炉やピットを中心に1本柱、2本柱、3本柱、4本柱、5本柱、6本柱が見られた。中でも半数以上を占め最も多い

のが4本柱やその可能性が高いものである。ついては2本柱、1本柱と続く。4本柱の主柱穴配列を持った住居跡は縄文時代前期の各時期に見られるが、柱の本数は住居の規模によって決定する側面もあり、一概にいえないが、4本柱が住居の規模に関わらず、主体となるのは円筒下層d式期からとなる傾向がある。2本柱の主柱穴配置も円筒下層d式期にも見られるが、多く検出される傾向にあるのは円筒下層b式期である。

炉 住居跡中央に位置する地床炉である。浅い掘りこみを持つものやピット状に掘りこむもの、土坑状に大きく掘り込むもの等が見られる。焼土・炭化粒が検出されない掘り込みもあるが、位置関係から炉として捉えている。



住居内出土遺物 竪穴住居跡内の出土遺物から、帰属時期を確定できるものを分類した。

A 床面、貼床出土、床面直上出土土器で型式の把握できるもの

円筒下層b式に相当するもの- 第5・6・8・22・29号住居跡

円筒下層c式に相当するもの- 第11・13・25号住居跡

円筒下層d式に相当するもの- 第4A・14A・16号住居跡

B 破片資料や堆積土出土遺物から把握できるもの

円筒下層d式かこれ以前(遺物包含層下)- 第21・23・26・27号住居跡

(拡張) - 第4B・14B・14C

(重複) - 第17・18・19・20・24号住居跡

下層b-d式土器が出土する住居跡- 第1号住居跡

下層b-d式、中期の土器も出土する住居跡- 第2A・2B・3・7号住居跡

C 出土遺物から判断できないもの- 第10・12・28号住居跡

住居跡中央のピットと接する溝跡 第13・14・29号住居跡で確認されている。いずれも沢原のやや上流側に立地しているのが共通している。14・29号住居跡の住居外へと連続する溝は斜面の等高線に対して直交しており、沢への排水施設として捉えることは可能である。とくに第29号住居跡は第1号木組遺構と同時期に存在した可能性が高く、この溝を排水としても、木組遺構に影響のない場所に立地している。類似した例は稲山遺跡第7号住居跡でも検出されている。遺跡内で最も低い斜面地に立地し、斜面の等高線に直交した溝が住居中央のピットに続いている。しかし本遺跡第13号住居跡と同様、住居外に延びる溝が確認されていないため、別の機能も想定される。

重複関係 住居跡の重複(拡張除く)第13→第14号住居跡、第24→第27号住居跡、第16→第17・20号住居跡、土器埋設遺構と重複- 第12・26号住居跡 焼土遺構と重複- 第28号住居跡

帰属時期 以上のような属性から竪穴住居跡の帰属時期を大きくI~IIIに分けた。拡張前住居跡は拡張後住居跡と連続しているため、同列に扱った。

南側斜面

北側斜面

I期 (円筒下層b式期相当・これに近い時期)

23・29・(24)

5・6・8

II期 (円筒下層c式期相当・これに近い時期)

25・26・27

11・13 (12・17・20)

III期 (円筒下層d式期相当・これに近い時期)

16・19・1814A・14B・14C、4A・4B、2A・2B

1、3、7、21・22、

I期 小型住居跡が沢の両側に点在していた状態と考えられる。三内丸山遺跡でも、平面形は楕円形または隅丸長方形、支柱穴は炉を挟んで2または4基、炉は地床炉、浅い掘りこみで使用されたもの

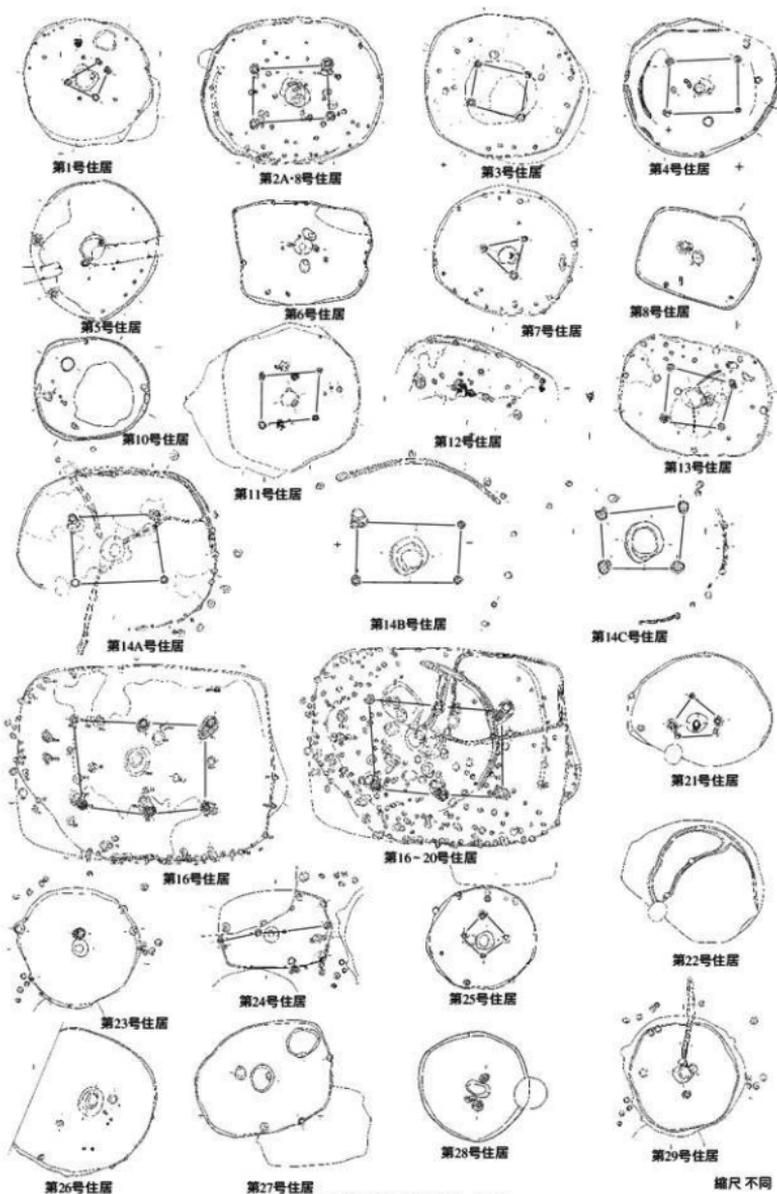


図167 前期の竪穴住居跡 集成

(青森県1996)などの特徴を有している。

Ⅱ期 平面形は隅丸長方形・円形で、Ⅰ期よりも規模が大きい。炉は地床炉(青森県 前掲)

Ⅲ期 楕円形または隅丸長方形、炉の周囲に支柱穴が4本配置され、地床炉が検出される。大型住居跡が構築されはじめる。大型住居跡は拡張しているものもあり、長い期間継続していた可能性がある。

## (2) 土器埋設遺構(図168)

土器埋設遺構は75基検出され、北側斜面で8基、南側斜面で67基が検出されている。縄文時代前期の土器埋設遺構が遺跡で検出される量としては北東北・北海道の中では最も数が多い。ここでは、本遺跡の出土例を中心に集落内での位置づけを考えたい。

### 埋設形態の分類

#### 単体埋設

- 1 正立 土器口縁部を上にして埋設されているもの(1・8・11・12・15・17・19・21・23・24・29・32・35・36・44・46・48・51・55・60・61・66・70・77・85・87埋)。  
正斜 土器口縁部を上にし、斜めに埋設されているもの(14・37・65・67・68・72・74埋)。  
正重 正立状態の土器が重なっているもの(78埋)。
- 2 倒立 土器底部を上にして埋設されているもの(9・10・13・38・39・57・59・63・71・79埋)。  
倒斜 土器底部を上にして斜めに埋設されているもの(43埋)。  
倒重 倒立状態の土器が重なっているもの(22埋)。
- 3 合口 土器の口縁と口縁を合わせて埋設しているもの(18・27・41・58・62・64・69・80・84埋)。
- 4 横転 土器が横にして置かれているもの(56埋)。

#### 複数埋設

- 1 正立(81・82埋) 2 倒立(25・26埋)

その他の要素として、

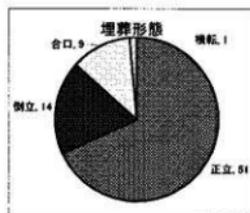
- A 埋設された土器の外側に石を置くもの B 埋設された土器内に遺物を混入するもの。

### 埋設形態

斜位の埋設を含めると、全体の7割が正立状態での検出である。倒立は全体の約2割で、この他に合口、横転状態のものが続く。斜位の埋葬の場合、斜面地であることも考慮しなければならないが、ほぼ平坦の地形でも斜位のものが含まれることから(14埋)、地形による要因なのか、本来の埋葬形態であったかを探る必要があると思われる。

使用部位 調査時には原形を留めていた土器で、接合しなかつたものは略完形の土器に含めると、完形・略完形22基：口縁～胴部21基：胴部～底部24基で割合は

ほぼ同率である。底部としたものは7基で残存器高が5cm前後のものであり、上部の状態が不明なものがほとんどである。土器を埋設するために、意図的に土器を割り取った可能性があるものは、倒立



土器で底部を欠くもの（9埋）や重ねた状態で埋設され底部を欠くもの（22埋）である。このほか可能性のあるものは、合口の蓋である。また、内面に炭化物が付着している土器が12点みられ、日常の道具として使用されたものを埋設していると思われる。

他遺構との関係 北側斜面の2埋・5埋は竪穴住居跡のほぼ床面で検出されている。5埋は底部下半のみ検出されており、仮に土器上部から埋設されていたとすれば、高いレベルから掘りこまれると考えられ、住居跡よりも後に埋設された可能性がある。2埋は土器の

上部が約5～10cm欠けた状態で住居跡の床面から検出されているため、住居跡の使用時期がこれに極めて近い廃絶直後に埋設された可能性がある。しかし、住居跡の遺存状態が悪く、詳細は不明である。

南側斜面の84・85埋は26住の堆積土上位から検出されている。確認面の下10～20cm下で検出されており、とくに84埋の上部は埋設の状態から、壊れていないものと推察される。このことからすると、南側斜面の住居跡群の堆積土上面に広がっていた捨て場は、84・85埋よりも新しい時期に形成された可能性が高い。

下層d<sub>1</sub>式の土器埋設遺構は捨て場1に隣接し、一部は捨て場内に埋設されている。

土器埋設遺構の内容物 今回、第18、21、25・26、39、60、62、64、69、81・82埋のリン酸分析を行い、この内18・62・21埋の土器内土壌、64埋の底部土器、21埋内部から出土した石器の脂質分析を行った。この結果、リン酸分析ではリン酸含有量が土器内土壌で周辺の土壌よりも若干高い傾向が窺えた。脂質分析では、全体的にパルミチン酸とオレイン酸が高く、経年変化の影響が大きい。他方、64埋の底部土器は経年変化の影響が他の試料に比べて少なく、動物由来のコレステロールが高いという結果がみられた。64埋は合口の埋設形態で、遺構内には、埋設後に流入したと思われる堆積土が底部付近に堆積しているのみで、ほぼ空洞の状態で検出されている。このことは、動物由来のものが土器内部に埋設されていた可能性も示唆するものであるが、同時に土器埋設遺構に使用された土器が日常的に使用された土器であったことも考慮しなければならない。検出事例の増加や、より精密な取り上げによる脂肪酸分析そして、その評価には慎重さが求められている（末木1999）。

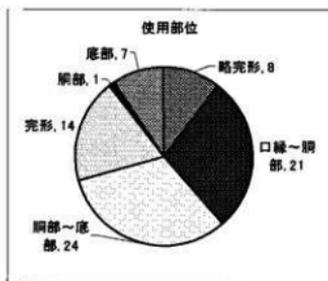
土器埋設遺構に関わる遺物とその出土状況をまとめた。

A類 埋設された土器の外側に石を置くもの

上部に石皿	62・64・84埋
下部に石皿	19埋

B類 埋設された土器内に遺物を混入するもの。

磨石	19埋
----	-----



磨石・石匙・スクレーパー	21埋
自然礫	78・80・84埋
石皿片	85埋
内部が空洞	64埋

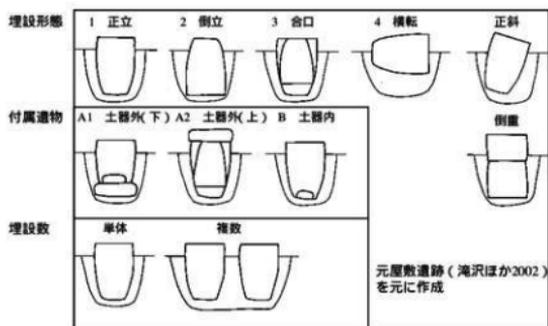
上部に石皿をもつものは3例みられる。いずれも埋設形態が合口であり、検出状況から明らかに蓋の上の土器を押える役割を果たしていると考えられる。これらはすべて石皿で、2例が土器の直径よりも大きいものである。比較的平らな石を使用するのが特徴である。土器の下部に石皿を置く1例もあり、これも平らな石皿を使用している。

一方、土器内からは自然礫・磨石・石皿片、石匙・スクレーパーが出土している。とくに、埋設形態が合口で明らかに土器内部に埋納された遺物とされるのが、80・84埋の自然礫である。形状が不整形で平坦な面などを有さない自然礫は、土器埋設遺構外部に使用される石皿類とは異なる要素をもつものと思われる。また、19埋で土器外部に使用された石皿と内部から出土した磨石も形状が異なる。これらのことから土器内出土遺物を再び見ると、磨石・石匙・スクレーパー・自然礫などは土器内に埋納された可能性が高い。しかし、石皿については85埋において土器内部から出土した例があり、埋納された可能性もあるが、土器外に置かれたものが土器内部に移動した可能性もある。後者の場合は、土器上部の蓋の役割を果たしたのは「編物・樹皮・獣の皮・葉等」であった可能性も示されており（末木 前掲）これらが腐食して土器内に入れこんだとも考えられる。この場合、土器内の堆積状況を検討する必要があると思われるが、これに関しても、土器内という非常に狭い範囲で検討するのは非常に困難である。このような意味においては、土器内部がほとんど空洞であった64埋は貴重な検出例である。しかし、すべての土器埋設遺構が空洞であったかという問題や、空洞であることの解釈の問題（末木 前掲）などがあり、さらに検討する必要があると思われる。

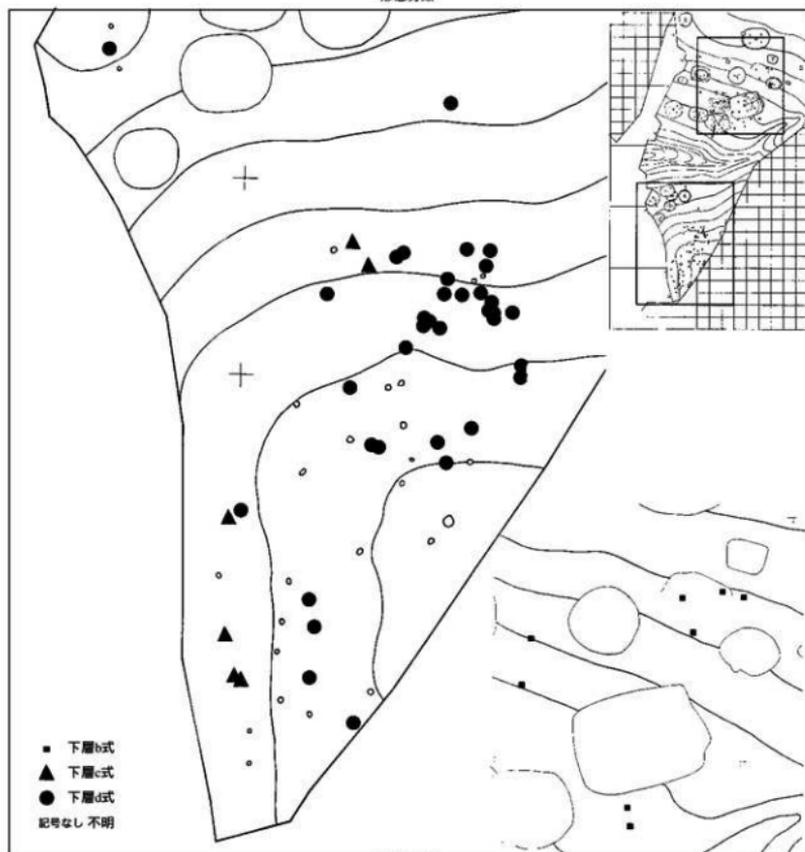
時期別変遷 75基の内、43基が型式を特定できる。概ね下層d<sub>1</sub>式の割合が最も高く、次いで、下層b・c式が続く。南側斜面頂部では、胴部から底部にかけて出土する土器が多く、型式を特定できなかった。これらの土器の器形は、底部から直線的にならず、胴部上半で内湾気味に立ち上がる器形や土器内面の調整から、下層d<sub>1</sub>式に相当するものが多数含まれると推測される。

前期中葉～後葉（円筒下層b式相当）標高35～39mの北側斜面地に土器埋設遺構が構築される。これは竪穴住居跡の周辺に位置するもので、住居跡と土器埋設遺構は近接した関係を持つ。埋設形態もすべて正立であり、土器の径よりも一回り大きく深く掘りこみ埋設している。底部付近および口縁部を欠く土器もある（1埋・8埋）

前期後葉（円筒下層c式相当）南側斜面の頂部西側が多いが、一部は標高37～38mの斜面地にも分布する。住居跡は南側斜面及び北側斜面で見られるが、土坑墓と考えられる土坑（23土・19土）が南側斜面でのみ検出されており、土器埋設遺構の分布と重複する可能性がある。土器などの捨て場は頂部捨て場・住居跡周辺（沢内）から出土が認められることからこの範囲であった可能性が高い。このことから、前段階よりも若干住居跡から離れて土器埋設遺構が構築されたと思われる。埋設形態には



形態分類



型式別分布  
図168 土器埋設遺構

は合口の埋葬形態が認められ、上部に石皿を置く例や土器内部に石を納める例がみられる。

前期後葉～末（円筒下層d式相当）南側斜面の頂部から標高37～40mの斜面部に集中する。竪穴住居跡とは沢を隔てており、直線距離で約20mである。捨て場1が南側斜面全体に広がり、沢内からも土器が大量に出土する状況を見ると、土器埋設遺構の範囲は土器捨て場と一部範囲が重なるもののさらに住居跡から遠く、空間的にもっとも離れた場所であったと思われる。埋設形態は比率からみれば正立が多いが倒立・倒重、合口、複数埋設（正立・倒立）など多様である。

#### 他遺跡との比較

捨て場内や廃絶後の住居の堆積土に埋設される例は多く、稲山遺跡で検出例が見られる。三内丸山遺跡では円筒下層a・b式期から住居跡・埋設土器の検出例があり、この傾向は円筒下層c・d式にも認められる。住居跡の周辺に埋設土器が分布しているようにみえるが、詳細は不明である（青森県1996）。畑内遺跡では、下層c～d式期に埋葬の場と遺物を捨てる場は分布範囲が重なる傾向がある。逆に、竪穴住居跡が構築される近辺に立地するものは下層a～b式に比定されるものであり、本遺跡と同じ傾向である。このように、集落内での土器埋設遺構は生活の中心として使用されない場、2次の場に構築されている。

### （3）土坑

本遺跡から検出された土坑は22基である。分布は大きく2つに分かれ、北側頂部から斜面にかけてと南側斜面頂部付近である。

出土土器などから時期を類推できたのは19基で、縄文時代前期10基、中期1基、後期1基、前期～中期2基、中期かこれ以前1基、平安時代4基、時期不明3基である。

土坑の平面形状は、調査範囲の外側に立地し完全に調査出来なかったものも含まれるが、円形、楕円形、方形の3つに大きく分かれる。円形基調16基、楕円形基調2基、方形基調4基である。このうち、方形基調のものは火山灰の堆積状況からすべて平安時代のもので、とくに14土は炭燼と推定される。この近辺から他の3基も検出されており、何らかの関連性があった可能性もある。以下に、楕円形基調2基、円形基調の比較的時期が想定できる縄文時代前期3基、後期1基の土坑について整理してみる。

楕円形基調の土坑 いずれの土坑も長軸方向がほぼ北方向である。縄文時代前期の19土は土坑の北側底面からリフレイク2点、この上部に挟入扁平磨製石斧1点、若干位置をずらした上部に完形土器1点が出土した。東側底面からは石筥1点が出土している。同様の遺構は、熊沢遺跡第12号遺構、秋田県池内遺跡（櫻田ほか1999）などでも確認されており、池内遺跡検出の遺構は「土坑墓」と報告されている。本遺跡例も形態・堆積状況・遺物の出土状況から土坑墓と考えられる。縄文時代中期の7土は土坑底面中央から横倒し状態の土器が出土し、壁際に近い部分からは磨石が1点出土している。リン酸分析では、周囲の土壌との差が認められず良好な結果が得られていないが、土坑の平面形や規模、遺物の出土状態から土坑墓の可能性が高い。

円形基調の土坑 出土遺物から、縄文時代前期の土坑4基、後期の土坑1基と考えられる。断面形

状はフラスコ状で、3・5・6・21号土坑は堆積土中位から底面にかけて埋め戻されている。17土は堆積状況から判断できなかった。フラスコ状土坑は一般的に貯蔵穴としての機能が想定されている。

しかし、21土の遺物出土状況は底面直上の壁際に土器を倒立させており、特異な出土状況を示している。フラスコ状土坑が別の機能をもつと想定される場合、土坑墓となる可能性が高い。フラスコ状土坑の場合、「壁際付近で、底面から20cm程度の間から遺物が出土している例」は墓の可能性を指摘している（南北海道1999）。また、神奈川を中心とした関東の事例であるが、倒置土器が土坑の端部に埋設され、胴下半部ないし底部を欠く事例を紹介している。そしてこれらの倒置土器が遺体の頭部を覆う役割を持つ可能性を指摘している。神奈川でのこのような例は縄文時代前期後葉から認められているとされている（山本2003）。

以上のような遺物の出土状況から、21土は最終的に墓として利用された可能性がある。このほかの3・5・6土はその断面形状や遺物出土状況から、貯蔵に使用されると考えられるフラスコ状土坑の可能性が高い。

#### （4）遺物出土状況（図169）

土器は、調査区全体で破片数約107,700点、重さ約1583kgの土器が出土している。遺構全体（住居跡・土坑・土器埋設遺構・焼土遺構・小ピット群）から出土した土器は、破片数約26,700点、重さ約346kgで、これを除いた遺構以外の出土数量は破片数約81,000点、重さ約1237kgである。南側斜面の頂部捨て場から出土した土器は、破片数約3,674点、重さ約44kg（図169の数字は全層集計したもの）、斜面捨て場Ⅲ層から出土した土器は破片数約33,385点、重さ約383kg、沢から出土した土器は破片数約33,166点、重さ約680kg、出土地は南側斜面と沢内にかけてのA D - A P-52 - 63で、大多数が縄文時代前期後半の土器片である。出土層位は第Ⅲ層が全体の約8割を占める。沢の第Ⅲ層は大きくA - Cの3層に分かれ、各層でも多くの土器が出土している。ここで、遺物の集中した出土地をまとめてみた。

頂部捨て場（第352集所収）南側斜面の頂部から南西側斜面地にかけて広がる。細片が多く、復元個体が少ないが、主として円筒下層c・d式が主体と考えられる。

捨て場1（第352集所収）北に面した南側斜面に位置する。頂部捨て場ほどではないが細片が多い。復元個体は円筒下層b・c式も見られるが、d式が最も多く、円筒下層d式主体と考えられる。

沢 調査時にはとくに遺物集中範囲を括らなかつたが、沢の下流側AN・O-59・60、沢の上流側AN54で多く出土している。各グリッド別の出土層位をみるとⅢA層出土の遺物が最も数量が多い。沢の下流側では、ⅢA層に次いでⅢB層の出土数量も多い。

遺構内（竪穴住居跡を中心に。）南側斜面の住居跡内では、確認面から堆積土上位にかけて捨て場1の遺物が出土しており、堆積土内での遺物の混入はほとんどみられない。北側斜面では、遺構の立地しない場所での出土数量とも少なく、住居跡の埋没過程で混入したものも、捨て場から出土した数量と比べれば少ない量である。

捨て場1の形成 尾根状の斜面に形成されており土器埋設遺構の範囲と重複している。斜面上から

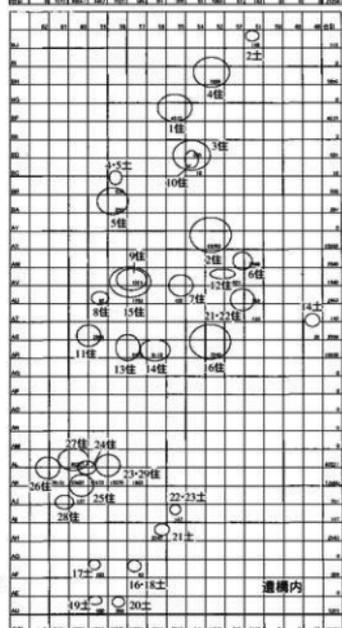
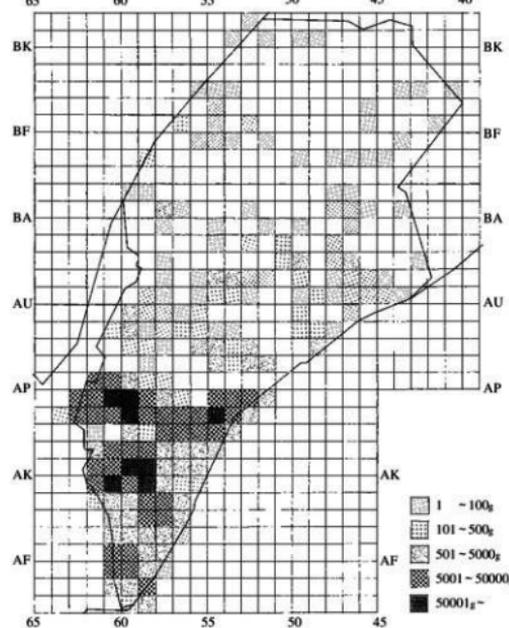
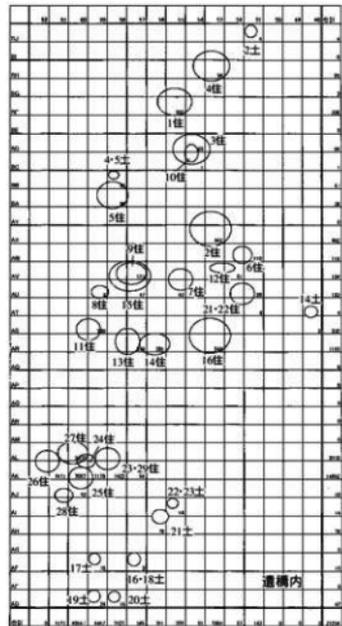
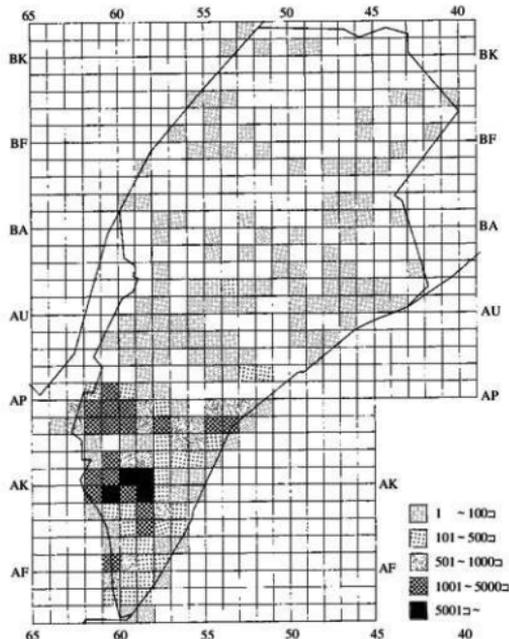


図169 出土土器の破片数と重量分布

沢の落ち際には住居跡が集中し、さらにこの住居跡の堆積土中には土器埋設遺構が構築されていることから、住居跡廃棄後に構築されたと思われる。捨て場1は、南側斜面から沢の落ち際まで広がるが、落ち際には住居跡が集中し、最大幅約10mの平坦地となっている。仮に上部から捨て場が形成されたとしてもこの平坦地で物理的に途切れてしまう可能性は十分にあり得る。このような地形的条件があったにせよ、ⅢB層の段階で沢の出土遺物が捨て場1の斜面下に位置するAN・O-59・60に集中することと考え合わせれば、縄文人は主に南側斜面に捨て場を形成し、これが沢内にも広がった可能性があると考えられる。

## 第2節 出土遺物のまとめ

### 1 土器

とくに補足を加えたい第Ⅰ・Ⅱ群土器について述べる。

#### (1) 第Ⅰ群土器

概ね縄文時代早期中葉の貝殻腹縁文を施文する土器群である。沢ⅢA～ⅢC層、第14・23・25号住居跡、捨て場1、遺構外から出土している。縄文前期の遺跡内の土地利用などで土器が移動した可能性が高い。106-1、捨て場出土土器(352集184-4)は文様構成や施文から物見台式に相当する。貝殻腹縁文を施文する一群(第14・25住、捨て場出土土器含む)は腹縁文同士が平行であること・胴部下半近くまで施文されているものがあることから、根井沼・寺の沢式系統の土器に近い属性を持つと考えられる。このほかに条痕文のみ施文している一群は、第23号出土土器片と胎土・焼成が類似することから、この土器片と同群と思われる。胴部に施文される文様構成から物見台式に相当する。

#### (2) 第Ⅱ群土器(図171-175)

縄文時代前期中葉～末の土器は出土遺物の大部分を占めており、沢・竪穴住居跡・土坑・土器埋設遺構・木組遺構などの遺構内、捨て場1、頂部捨て場と遺跡全体から出土している。

図171-173は沢・土器埋設遺構・竪穴住居跡出土遺物、捨て場1・頂部捨て場遺物の主な出土遺物をまとめたものである。左側に沢出土ⅢC層～ⅢA層の遺物でそれぞれの層において主体を占める土器を掲載した。右側には土器埋設遺構の遺物、竪穴住居跡は床直出土遺物、各住居の復元個体、堆積土上位から出土した復元個体、沢出土の遺物で出土層位の主体を占めない個体を掲載した。共存する事例として土器埋設遺構の出土土器、共存に準じるものとして、竪穴住居跡床直出土遺物、沢出土の層位と取り上げ番号が同一の出土遺物を挙げた。

とくに沢・捨て場出土の土器は、厳密に言えば、堆積土の主体を示すものではない可能性もあるが、破片を含めた出土遺物を概観した場合でも、復元個体における様相に大きな差はないと思われるため、報告書に掲載した復元個体を中心に論じることとする。また、第4類では稲山遺跡出土の共存事例を掲載している。

第2類 円筒下層a式 沢ⅢC層から出土した復元個体と破片各1点、第23号住居跡から出土した1

点を掲載している。口縁が開き、胴部上半が膨らむ器形であり、熊沢遺跡の捨て場、三内丸山遺跡第6鉄塔地区第VI a層（青森県1998）からの出土例がある。

第3 a類 円筒下層b<sub>1</sub>式 復元個体はⅢC層、ⅢB層、ⅢA層、第3・5号土器埋設遺構から出土している。底部から直線的に立ち上がる器形で、文様帯の区画に隆帯を貼付ける。器高に占める口縁部文様帯幅は次のb<sub>2</sub>式より狭い。口縁部の文様は結節回転文の割合が多い。隆帯は断面形状が方形で、二条貼付けるものが見られる。

第3 b類 円筒下層b<sub>2</sub>式 主に沢ⅢC層で主体を占める土器で、土器埋設遺構などからも出土している。器形はバケツ形で、底面から真っ直ぐに立ち上がり（器形B）、口縁部には単軸絡糸体を回転施文する。口唇上部は平坦に近く、端部にやや丸味を持つ。口縁直下や隆帯に沿わせて複節縄文を押し出すものもある。胴部は、単軸絡糸体との縄文を施文する割合がほぼ半々で、単軸絡糸体は第1類を施文する割合が高い。三内丸山遺跡第6鉄塔第V b層出土土器（青森県1997）熊沢遺跡第2号遺物集中ブロック出土土器（小野2000）に出土例がある。

第4類 円筒下層c式 主に沢ⅢB層の主体を占める土器で、土器埋設遺構、土坑、竪穴住居跡からも出土している。図104・105に示したとおり、主に沢の下流側でまとまって出土している。ここでは、これらについての特徴を整理していく。なお、この時代の土器群は同じ型式でも地域によって違いが表れているため、主に津軽地方の土器を取り上げることとする。

器形：底面から口縁部まで外側に直線的に開くもの（器形A）、底面から外側に直線的に開くが、口縁部がやや外反するもの、胴部上半がやや張り、口縁部で屈曲し口縁が外反するもの（器形C）などがある。全体の器形のなかではそれぞれに個体差があるが、共伴事例からも、概ね底面から外側に開く器形といえる。

口縁部・口唇部の形状：口縁部はごく緩い波状口縁であることが多いが、平口縁も見られる。口唇部は徐々に先細りしている。

口縁部の文様（図175）：口縁部文様帯が狭くなり、主に単軸絡糸体第1類を側面圧痕する施文技法を用いる。前型式と比較して多種多様になり、b<sub>2</sub>式で見られた単軸絡糸体第1類の横位回転施文＋縄文原体の縦位押し施文が消えている。この類では、単軸絡糸体の側面圧痕施文や縄文原体の押し施文方法が変化しており、とくに単軸絡糸体第1類を施文するものが多い。文様構成は、横位に数状施文＋波頂部などの縦位に2～3条施文するもの（1類）波頂部を中心に菱形文に施文するもの（2類）、波頂部を中心に三角形文を施文するもの（3類）に分かれる。3類は三角形文の内部に充填される文様構成からa・bの2種類に分けられる。これらの文様パターンは次のd<sub>1</sub>型式まで継続して使用されている。

このほかに、本遺跡では前型式に見られなかった、口縁部に結束縄文を横位に回転施文したものが表れ始める。津軽地方では、円筒下層b式段階から、このタイプが出現しはじめる<sup>(注1)</sup>。本遺跡例や三内丸山遺跡出土例などは口縁部に横位の側面圧痕を用いる例もみられ、これに後続する可能性がある。

結束縄文は口縁部文様帯に施文される以外、口縁部文様帯直下から胴部上半までの範囲で施文され

沢



图170 沢ⅢC・ⅢB層出土土器

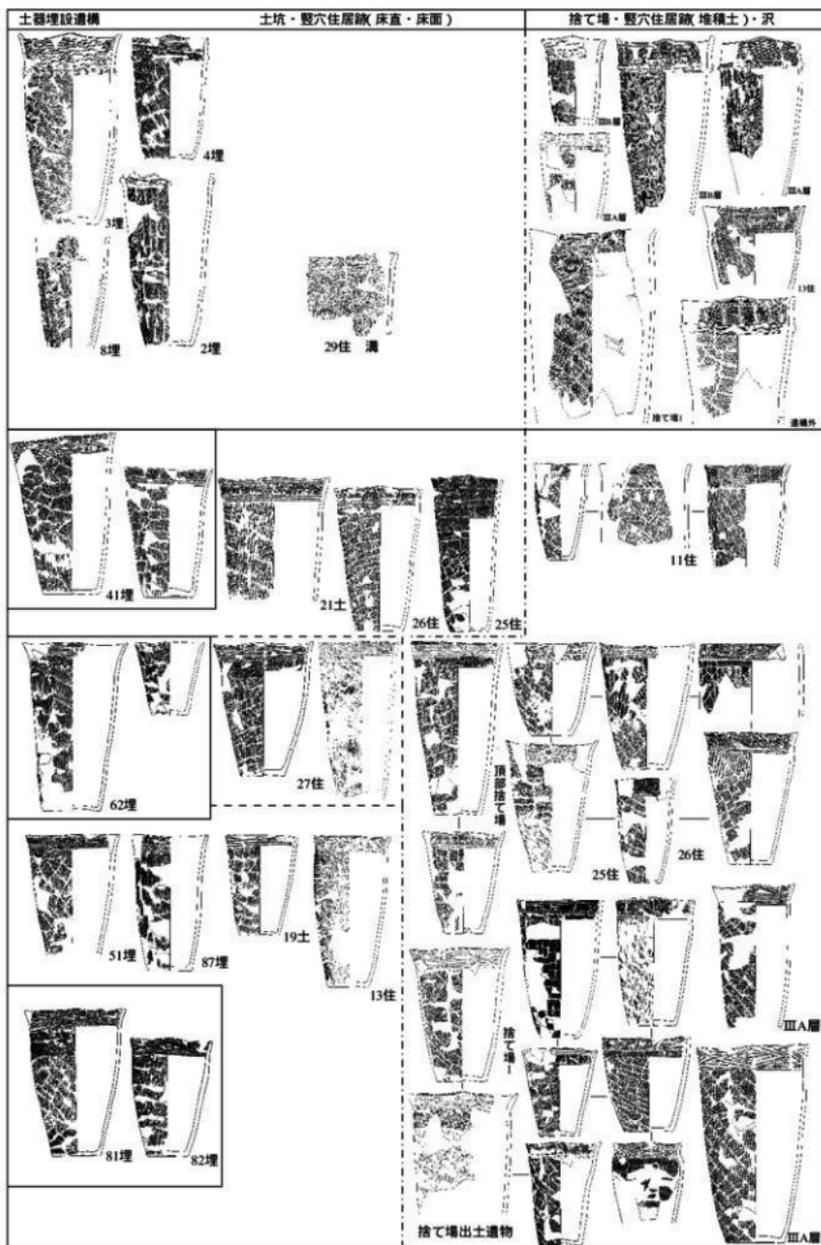
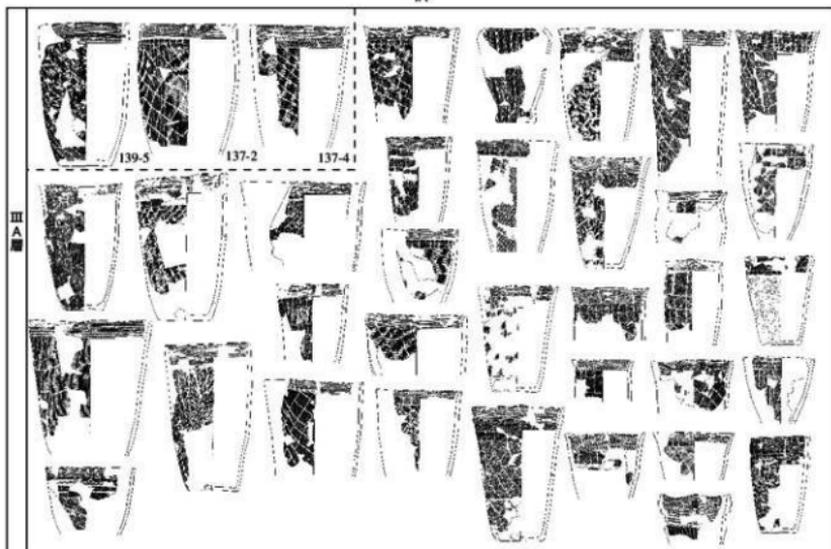


図171 遺構・捨て場等出土土器1



□ 共伴すると考えられる出土状態  
 □ 共伴に準ずる出土状態

図172 沢ⅢA層出土土器

るものが多く、d型式でも継続して使用されている。

以上、この類の口縁部文様を概観してみた。前型式から踏襲された文様構成には、単軸絡糸体回転施文技法が押圧技法によって変わられるもの（Ⅰ類）、前型式で口縁部に単節縄文や結束縄文の横位回転施文をする一群（Ⅱ類）の2つの傾向の土器群が認められる（図175）。

胴部・底部の文様：単軸絡糸体の施文がほとんどなくなり、縄文本体を斜めに回転している。前型式まで若干認められた底外面への文様施文は復元個体では確認されていない。

共伴関係と他遺跡との比較：本遺跡出土の先に示したⅠ類土器群の特徴を述べる。1 器形は胴部上半がやや張るものが多い（112-3 が顕著な例）。2 口縁部が肥厚せず、先細りする例が多い。3 口縁部文様構成で、波頂部から垂下する文様が少ない（復元個体のみ確認したため、破片資料は不明）。共伴事例やこれに準じる事例（図170・171）では、口縁部の文様構成が類似する場合が多い（81・82埋<sup>(注2)</sup>、沢出土121-1・122-2・124-2、沢出土120-1、120-2、11住堆積土出土遺物）。

第Ⅱ類は、単節縄文の施文例は、b<sub>2</sub>式では出土例があるが、c式ではほとんど見られず<sup>(注3)</sup>、共伴事例から考えると、b<sub>2</sub>式からc式の過渡期に見られる特徴の可能性がある。

注1 田小屋野貝塚では円筒下層a・b式前半としている。三内沢遺跡遺物包含層出土例などが出土している。

注2 第352集では下層d式に分類しているが、口縁部で器形が外反していることや口縁部文様帯幅が広いことから、下層c式に改めた。

注3 稲山遺跡1036土、41埋例

第5 a類 円筒下層d<sub>1</sub>式 沢ⅢA層で概ね主体をなす土器で、土器埋設遺構、捨て場1、頂部捨て

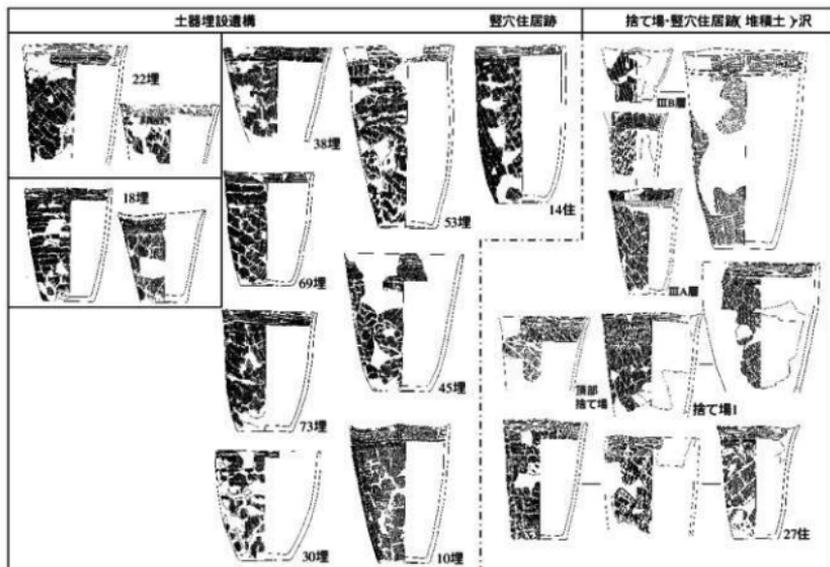


図173 遺構・捨て場等出土土器2

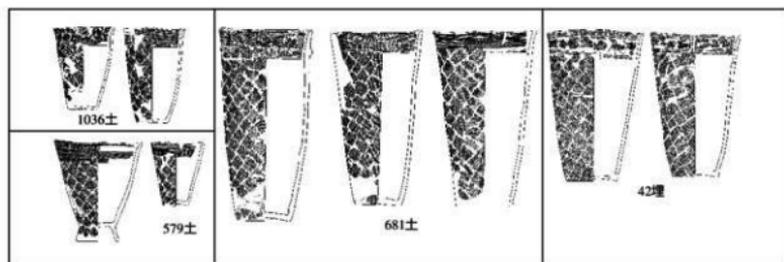
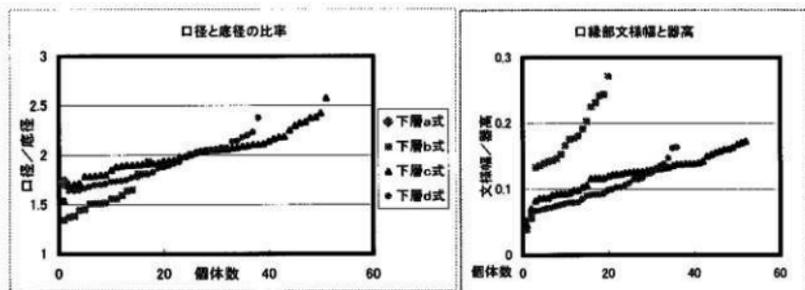


図174 稲山遺跡出土共伴土器



場でも主体を占めるとされる。

器形は底面からやや外側に開くもの、底面からほぼ真っ直ぐに立ち上がるもの、底面から緩やかに立ち上がり、胴部中央から上半でやや膨らみ口縁部がやや内湾するものなどがある（器形D）。c式より底径の規模が大きい。器厚が厚く、胎土が緻密である。内面にはほぼ全面にミガキが入る特徴がある。口唇部の形状は、断面が先細りするもの（c類）と厚みをもち三角形状になるもの（d類）がある。口縁部文様帯は前型式に比べて狭くなり、その幅は3cm以下となる（小笠原2002）。文様構成は前型式の文様パターンが踏襲されるもので、施文される縄文のバリエーションが多くなる。縄文原体は単軸結条体・縄文原体の押圧が主体であるが、単軸結条体の回転施文と単軸結条体第5類の押圧、縄文原体の種類を変えて交互に押圧施文するなど前型式に見られなかった施文方法が加わっている。また、口縁部と胴部文様帯との境界に微隆帯を貼付け、その上部から刺突文が施文されるものもある。文様帯の境界には結束縄文や結節縄文が施文されるが、特に結束縄文は前型式に比べて極めて幅が狭いのが特徴である。胴部縄文には主として縄文原体を斜回転するものがあるが、結束縄文と単軸結条体第1類を縦回転させたもの（縄文原体を斜回転したものもあり）を交互に施文するもの、縄文原体に縄文を巻き付けて回転施文したもの<sup>(注1)</sup>がある。

下層c式との比較：不明瞭であるが、器形・口縁部幅・口唇部形状に違いが表れる表で示しているとおり、器高に対する口縁部幅は若干d1型式のほうが狭く、底径と口径の規模に差がなくなる傾向がある。（p.353下表）

注1 当センター職員 茅野氏による指摘

異系統の土器：352集78-26、352集186-20の2点が出土した。いずれも南側斜面の出土である。深鉢の口縁部と考えられ、沈線による施文が見られる。

赤色顔料を塗布した土器片：5点出土している。第3号土坑堆積土から3点、第6号土坑堆積土上位から1点、沢出土のもの1点である。いずれも深鉢片と思われる。第6号土坑出土のものは内外面に赤色顔料が塗布されており、沢出土のものは外面のみ、第3号土坑出土のものは内面のみ塗布である。いずれも摩耗が激しい。

（坂本）



図175 土器の模式図

## 2 石器

二カ年の調査で出土した石器は、文末の表のとおりである。一部に縄文時代中期のものも含んでいるが、大半が縄文時代前期中葉から後葉にかけてのもので、主に捨て場や沢、住居跡覆土中から多く出土した。剥片石器類ではとくに石匙の出土が目立ち、礫石器類では各種の敲磨器類のほかには半円状扁平打製石器や挟入扁平磨製石器、石皿等が比較的多く出土している。

石鏃は18点の出土で、基部形態による分類では凹基無茎鏃2点、平基無茎鏃6点、凸基有茎鏃4点、尖基鏃5点、円基鏃1点である。この中で、特記されるものに第1号住居跡から出土した尖基鏃があり、器面には赤色顔料と思われる物質が付着している（未分析）。また、第2号住居跡から出土した凸基有茎鏃は、出土状況から縄文時代中期前葉の可能性が高い。本遺跡出土の凸基有茎鏃は総じて茎部の挟り出しが弱いが、第2号住居跡出土のものは丁寧に茎部が作出されており、基部にはターレット状の物質が付着している。

石槍は基部片1点が捨て場から出土した。また、異形石器とした第25号住居跡から出土した基部に突起が付されたものは、尖頭部を欠損しているものの石槍の可能性がある。縄文時代前期には希に見られる石器であり、永野遺跡や畑内遺跡で類品が見られる。

石匙はD1類（縦形石匙）116点、D2類（横形石匙）13点、D3類（両面加工で槍先状の先端部を持つ縦形石匙）3点、つまみ部片のため細分できないもの4点である。D1類の縦形石匙が圧倒的に多く、裏面に光沢痕が観察されるものが多いことが特徴である。また、D3類とした石匙のうち第13号住居跡出土のものは石槍に似たもので、両面に丁寧な調整が施された優品である。また、第25号住居跡出土のものは槍先状というよりは石錐状の先端を持つもので、類品はD1類の中にも2点ある。機能的には刺突や穿孔といった使われ方がなされたものと思われる。

石匙の使用痕分析では、石匙の主な役割が植物資源の切断にあったことが明らかになっている。対象となった植物についての記述はないが、川口による熊ヶ平遺跡での分析ではイネ科植物の可能性が指摘されている（川口1995）。なお、前述の第13号住居跡から出土した両面加工の石匙は、使用痕分析では他のものとはあきらかに用途が異なった石器であるとしている。

石筥は15点の出土である。完形品の10点を対象に大きさをみると、長さ6～8cm、幅2.5～4cmのものが主体であり、1点のみ長さが11cmを越すものがある。刃部は円刃かこれに近いものが大半であるが、直刃のものが1点ある。使用痕分析からは、この直刃の石筥には木の加工に関する道具の可能性がうかがわれている。石筥に似た石器に搔器がある。使用痕分析からは石筥と搔器では被加工物に対する操作の仕方が異なり、本遺跡出土の石筥が皮加工に利用されていたとすれば、その工程によって、道具や対象獣による使い分けなどが考えられるという。

磨製石斧は19点出土したが、このほかに敲石に転用されたものが1点ある。完形品は3点である。また、小型磨製石斧は2点の出土である。擦り切り技法によって製作されたものもあり、擦切痕の見られる原石も1点出土している。

敲磨器類は185点出土したが、この中のKa2類にはスリ幅の広さから半円状扁平打製石器に含めなかったものが10点ほど含まれている。石材には17種類あり、最も多様の石材が選定されている。

半円状扁平打製石器は52点出土し、このうち完形品は19点である。器体の一部あるいは全体にスリ

整形が施されているものが少数例あり、なかには挟入扁平磨製石器と似た石器もある。

挟入扁平磨製石器は51点出土した。完形品は2点で、破損率の高い器種である。なお、完形品のうちの1点は第19号土坑から出土したもので、副葬品と考えられるものである。使用された石材は本遺跡では希少な玄武岩である。石材には11種類あるが、凝灰岩が62%と多数を占めている。

北海道式石冠は3点出土した。うち、1点は第15号住居跡から出土したもので、縄文時代中期に属するものである。他の2点は縄文時代前期中葉から後葉にかけてのものと思われる。石材は石英安山岩と凝灰岩、安山岩質凝灰岩が各1点である。中期のものは安山岩質凝灰岩である。

石皿・台石類は71点の出土である。完形品は10点で、破損率の高い石器の一つである。石皿の大半は自然礫の大礫を素材としているが、板状礫を素材としているものも少数ある。また、片面加工のものが多いが、両面加工のものも18点ある。

石棒は6点出土した。第22号土坑1点、沢4点、捨て場1点である。すべて無頭のもので、いずれも器面は滑らかである。長さ26～34cm、幅10～12cmで、重さは4000～6000gのものがあるが、5000g前後が多い。石材は安山岩2点、石英安山岩4点である。

石剣は1点の出土で、破損品である。第24号住居跡床面からの出土である。石材は輝緑凝灰質片岩であり、これを石材とするものはこの1点だけである。

砥石は12点出土した。このうち、第16号住居跡と第21号土器埋設遺構から出土したものは器面に溝を持った有溝砥石で、比較的小型の石器である。

擦切具は10点出土した。形状や大きさのわかる4点を対象とすると、3点は半円形、もう1点は方形に整形されている。大きさは概ね長さ18～21cm、幅13cm、厚さ1～2.5cmであり、重さ430～580gである。刃部はいくぶん丸みを帯びて摩耗痕が見られ、刃縁には平行する擦痕が見られる。また、1例だけであるが、沢出土品の中に装着痕を現しているかのように刃部以外の広い範囲に煤炭化合物が見られるものがある。特殊な事例と思われるが、類例の増加を待ちたいと思う。

その他とした石器(Ta類)は25点出土したが、その中に擦切痕が見られるものが2点ある。南区遺構外と沢から1点ずつ出土している。擦切痕は板状礫の側縁に見られ、そこから折りとられている。流紋岩を石材とする小型の石器であり、加工途中の失敗品とも思われる。おそらく板状礫を素材とする石器の一部は、擦り切り技法によって切断されたものもあったものと推定される。

#### 石器の石材傾向

剥片石器類は大部分が珪質頁岩を石材とし、玉髄・玉髄質珪質頁岩・鉄石英・頁岩・黒曜石などが数点ある程度である。黒曜石は楔形石器と剥片の2点の出土である。産地同定分析では2点とも県内の鷹森山、大釈迦、戸門産地等の三ヶ所のいずれかである可能性が高いことが推測されている。

礫石器類の石材には21種類の石材が用いられている。最も多いのは凝灰岩の145点で、流紋岩の114点、安山岩の68点、石英安山岩の66点が続く。これら4種類の石材は大半の器種に用いられており、全体の8割以上を占めている。頁岩や緑色細粒凝灰岩、ヒン岩、輝緑岩は12～18点の出土で、それぞれ全体の2～4%程度を占めている。このうち、ヒン岩と輝緑岩は数量的には少ないものの大半の器種に少量用いられており、緑色細粒凝灰岩は磨製石斧の石材として用いられている。(畠山)

出土石器一覧表

分類	器種	住居跡	土坑	土器埋設遺構	焼土遺構	頂部捨て場	捨て場	南区遺構外	北区遺構外	表探	沢	小計
A類	石鏃	9				3	4				2	18
B類	石槍						1					1
C類	石鏃	1				1	2		1			5
D類	石匙	38		3		9	31	5	10	1	39	136
E類	石匙	4	1				4	1	2		3	15
F類	楔形石器	1							1			2
G a類	スクレイパー類	49				12	26	4	20		45	156
G b類	Rフレイク	14				2	10	1	3		20	50
G c類	Uフレイク	17	2			1	19	1	2		18	60
H類	異形石器	1										1
I a類	剥片	165	4	1		13	81	14	38	15	126	457
I b類	石核	1				1					6	8
I c類	母岩										1	1
小計		300	7	4		42	178	26	77	16	260	910
J a類	磨製石斧	5				1	1		6		6	19
J b類	打製石斧		1									1
K a 1類	磨器K a 1類	2					1	1	1		4	9
K a 2類	磨器K a 2類	17	1	2		7	3	2	12		22	66
K b 1類	磨器K b 1類	2				1		2	1		15	21
K b 2類	磨器K b 2類	6				4	5	1			20	36
K c類	磨器K c類	5	1		1	1	2	1	6		35	52
K a類	磨器K a類	1										1
L類	半円状扁平打製石器	10				2	5	6	5		24	52
M類	挟入扁平磨製石器	3	1		1	3	5		6		32	51
N類	北海道式石冠	1					1				1	3
O a類	石皿	11	1	4		2	3		2		37	60
O b類	台石	2							2		7	11
P a類	石棒		1				1				4	6
P b類	石剣	1										1
Q類	石錘										2	2
R類	砥石	5		2					1		4	12
S類	擦切具	1							2		7	10
T a類	その他(使用痕跡)	3		1		2	1	3	2		13	25
T b類	その他(搬入跡)	7					2	2	6		22	39
小計		82	6	9	2	23	30	17	53		255	477
総計		382	13	13	2	65	208	43	130	16	515	1387

※前年度に器種不明とした剥片石器2点はスクレイパーへ含む。

※器種不明の磨石器小破片を除く。

石製品一覧表

分類	器種	住居跡	土坑	埋設	焼土	頂部捨て場	捨て場	南区遺構外	北区遺構外	表探	沢	小計
U類	岩偶										1	1
V類	浮き										2	2
V類	軽石製品	2									5	7
	その他										2	2
小計		2									10	12

※住居出土の軽石製品2点は縄文時代後期に属する。

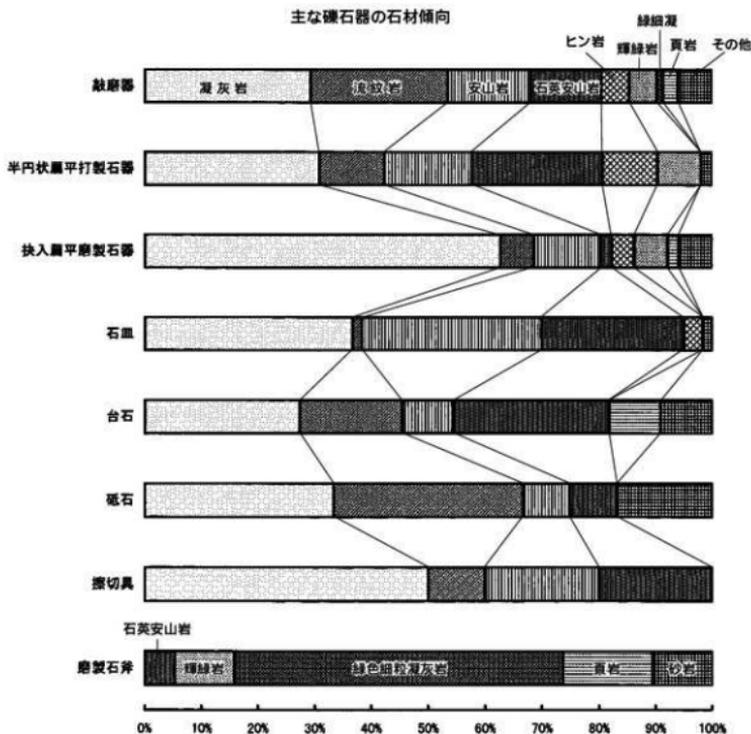
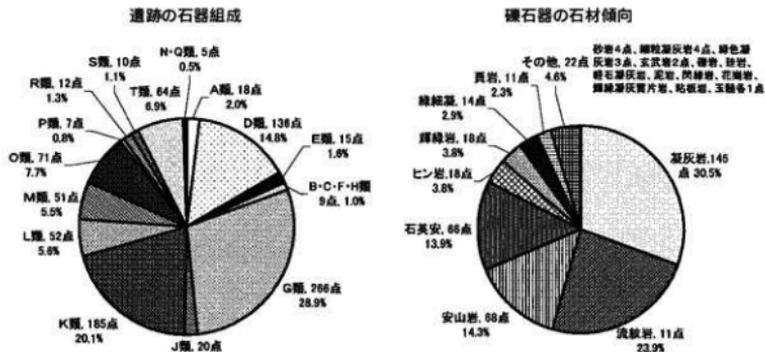


図176 石器組成と石材傾向

### 3 木質遺物

#### (1) 木質遺物における選択行為について

##### 1 はじめに

本遺跡における発掘調査の結果、沢地区から縄文時代前期に帰属する1,800点以上のぼる木質遺物が出土しており、これらのうち623点(木製品・木材583点<sup>(1)</sup>、樹皮40点)を対象に樹種同定を実施している(第3章第12節)。図177~180は樹種同定の結果に基づき、(1)全体の樹種組成と器種組成(2)層位別(ⅢA~ⅢC層)の樹種組成と器種組成(3)遺構構成材の樹種組成と器種組成(4)主要器種の樹種組成(5)主要樹種の器種組成と木取りの各項目に該当するものを抽出し、組成比率を百分率でグラフ化したものである。

本項では、このグラフをもとにこれまでの研究および発掘調査の成果から折に触れ指摘される、木質遺物における選択行為が本遺跡出土木質遺物にも認められるかを検討する。

なお、抽出作業において、①層位や樹種が不明なものは各項目の対象外とした。②器種の特定が可能な未製品および木製品は、その器種に一括した。③遺構構成材の器種組成に限り、転用材は例えば「榧転用杭」は「杭」というように、転用後の名称を使用した。④便宜上、板目板・板目材と柱目板・柱目材はそれぞれ「板目板材」、「柱目板材」とした<sup>(2)</sup>。⑤いわゆる「みかん割材」は割材に含め、木取りは分割で一括した。⑥用途不明木製品および用途不明加工材は「○○状」という語を使用せず、一括して扱った。⑦各項目に占める割合が2%未満のものは一括して「その他」とした。

##### 2 樹種組成・器種組成・木取り

(1) 全体の樹種組成と器種組成(図177) 樹種組成はクリが最も多く全体の5割強を占め、次いでコナラ節、オニグルミ、キハダ、ケンボナシ属が優占する28分類群が認められた。本遺跡における花粉分析(第3章第1節)の結果出現した分類群と重複する樹種が多い。また、クリとコナラの優占は共通する。器種組成は杭状先端加工材と板目板材が多く、それぞれが全体の2割強を占める。次いで割材、杭、丸木材、柱目板材が優占する。木製品15器種・木材16器種の合計31器種から成る。

(2) 沢地区層位別の樹種組成と器種組成(図178) ここでは、木質遺物が出土したⅢA~ⅢC層について、層位毎に述べる。

ⅢA層：樹種組成はクリ、オニグルミ、コナラ節、カエデ属、イヌエンジュの5分類群が認められる。クリが突出して多く、全体の6割強を占める。器種組成は杭状先端加工材が約4割、次ぐ板目板材が約3割を占める。次いで割材、掘り棒、容器、杭などが多い。木製品2器種・木材7器種の合計9器種から成る。

ⅢB層：樹種組成はクリが5割強を占め、次いでコナラ節、オニグルミと優占する20分類群が認められる。器種組成は杭状先端加工材、割材、板目板材がそれぞれ約2割を占める。次いで丸木材、掘り棒が多い。木製品9器種・木材15器種の合計24器種から成る。

ⅢC層：樹種組成はクリが5割を占め、次いでコナラ節、キハダが優占する25分類群が認められる。組成比率はⅢB層とほぼ同様であるが、ニレ属とウルシが優占樹種の上位になる。器種組成は板目板材、杭状先端加工材がそれぞれ約2割を占め、割材と杭がそれぞれ約1割を占める。木製品10器種・木材14器種の合計24器種から成る。

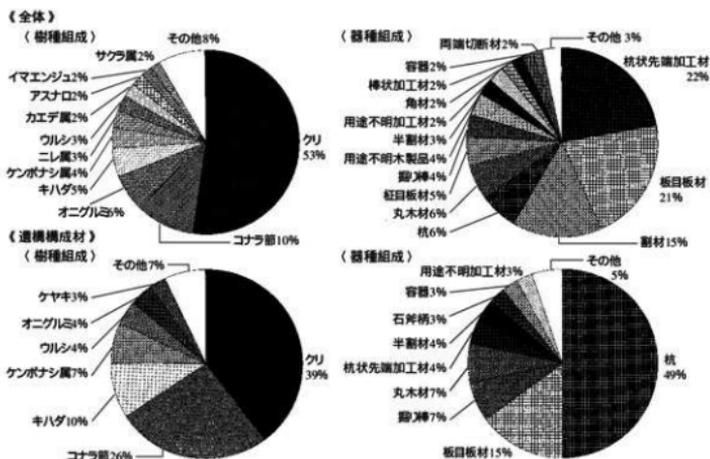


図177 樹種組成・器種組成1(全体・遺構構成材)

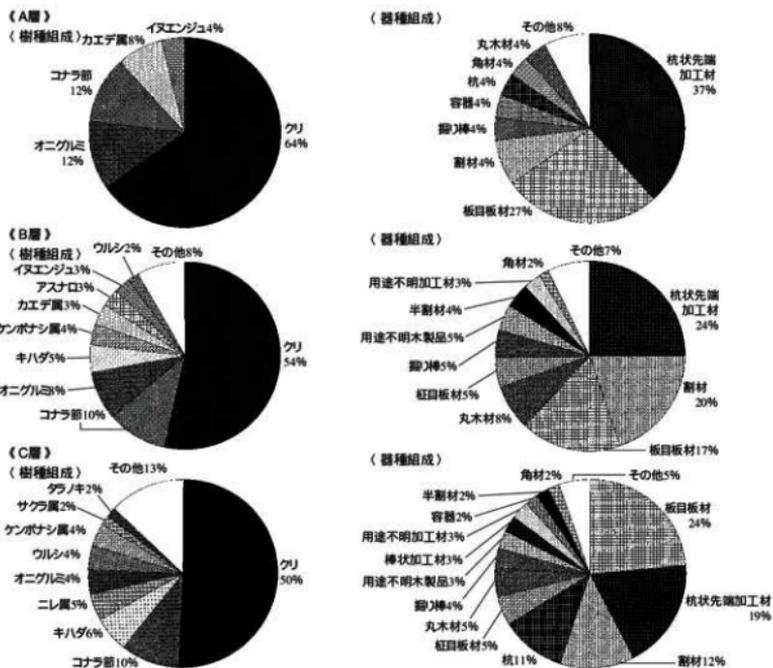


図178 樹種組成・器種組成2(層別)

各層を比較すると、樹種組成ではクリが5割もしくはそれ以上を占め、コナラ節、オニグルミが主要の樹種であること、器種組成では杭状先端加工材、板目板材、割材の3器種が大部分を占めるが、ⅢA層とⅢB層を境として大きな変化がみられ、ⅢA層に比べⅢB・ⅢC層の樹種は4ないし5倍、器種は約3倍に増加し、木製品：木材はⅢA層がおおよそ1：4であるのに対し、ⅢB・ⅢC層では2：3になる。また、ⅢC層は第1号木組遺構をはじめとする遺構群が検出されていることにより、遺構構成材に多用される板目板材と杭の占める割合が増加する。

(3) 沢地区遺構構成材全体の樹種組成と器種組成(図177) 沢地区から検出された遺構群を構成する樹種組成は、クリが最も多く全体の約4割を占め、次いでコナラ節、キハダ、ケンボナシ属、ウルシ、オニグルミが優占する12分類群が認められる。製材性や耐久性に富む樹種が構成材に多用される傾向が窺える。

器種組成は杭が最も多く、構成材の約5割を占める。次いで板目板材、掘り棒、丸木材が多い。遺構は板材を杭で固定するというように、複数の木質遺物が組み合わせられて構成されるものが多いことから、自然な結果といえるだろう。木製品4器種・木材10器種の合計14器種を使用している。

また、グラフ化はしていないが、遺構別にみると杭跡1のみ使用樹種および器種に大きな偏りが認められ、使用された杭の5本中4本はコナラ節を使用しており、それら4本中3本が樫(樫状木製品を含む)を転用している。

(4) 主要器種の機種組成(図179) ここでは、樹種組成に注目できる器種について個々に述べる。掘り棒(未製品含)：コナラ節、ケンボナシ属、アスナロ、オニグルミの4分類群が認められる。約7割がコナラ節で組成の大部分を占める。他の樹種はほぼ均一の比率である。

樫(樫状木製品含)：コナラ節とオニグルミのみが認められ、6点中、前者が5点である。

石斧柄：ケヤキとニレ属のみが認められ、3点中、前者が2点である。

用途不明木製品(舟形)：クリ、ウルシ、キリ、コシアブラ、ハリギリの4分類群が認められる。後二者は、樹種同定を実施した木質遺物の中で、ともに1点のみ認められた。クリの占める割合が最も多いが、組成全体に大きな偏りは認められない。

容器：クリ、ケンボナシ属、ウルシ、カエデ属の4分類群が認められる。クリとケンボナシ属がそれぞれ約4割を占める。

角材：クリ、キハダ、アスナロ、ケンボナシ属、コナラ節の5分類群が認められる。クリが約5割を占め、それに次ぎキハダが約2割と優占する。樹種に関係なく芯持材は認められない。

両端切断材：クリ、アスナロ、イヌエンジュ、ニレ属の4分類群が認められ、クリが全体の約7割を占める。

杭：クリ、コナラ節、キハダ、オニグルミ、ケンボナシ属、イヌエンジュ、ウルシ、ハンノキ属ハンノキ節の9分類群が認められる。クリが最も多く約5割を占め、次いでコナラ節、キハダが優占する。杭状先端加工材：クリ、オニグルミ、カエデ属、コナラ節、イヌエンジュが優占する17分類群が認められる。クリが約7割を占め、他を圧倒する。

(5) 主要樹種の器種組成と木取り(図180) ここでは、全体を占める割合が高い上位5分類群(クリ、コナラ節、オニグルミ、キハダ、ケンボナシ属)と、器種組成や木取りに特徴のみられる4分類群(ウルシ、アスナロ、イヌエンジュ、ケヤキ)について個々に述べる。また、それぞれの文末には樹種の特徴についても記述する。

クリ：樹種同定を実施した木質遺物全体の5割強を占めるとともに、層位別にもても半数もしくはそれ以上を占める。器種組成は杭状先端加工材が3割と最も多く、次いで多い板目板材、割材とで7割以上を占める。木製品4器種・木材13器種の合計17器種から成る。木取りは板目と分割が多く、両者で6割以上を占める。他には芯持丸木、柱目、芯持半割、芯去角や横木取りなどが認められる。なお、加工はやや困難であるが、水湿によく耐え、耐久性は非常に高いという特徴を有する。

コナラ節：器種組成は掘り棒が最も多く約3割を占め、次いで割材、板目板材、杭、杭状先端加工材、櫃が多い。木製品2器種・木材9器種の合計11器種から成る。木製品の器種数は少ないが、数量は約4割に相当する。木取りは芯去削出が約3割、板目と分割がそれぞれ約2割で大部分を占める。なお、強度が高く硬いが、従曲性に富むという特徴を有する。

オニグルミ：器種組成は杭状先端加工材、板目板材、割材がほぼ同じ割合で大部分を占め、次いで柱目板材、掘り棒が多い。木製品3器種・木材11器種の合計14器種から成る。木取りに大きな偏りは認

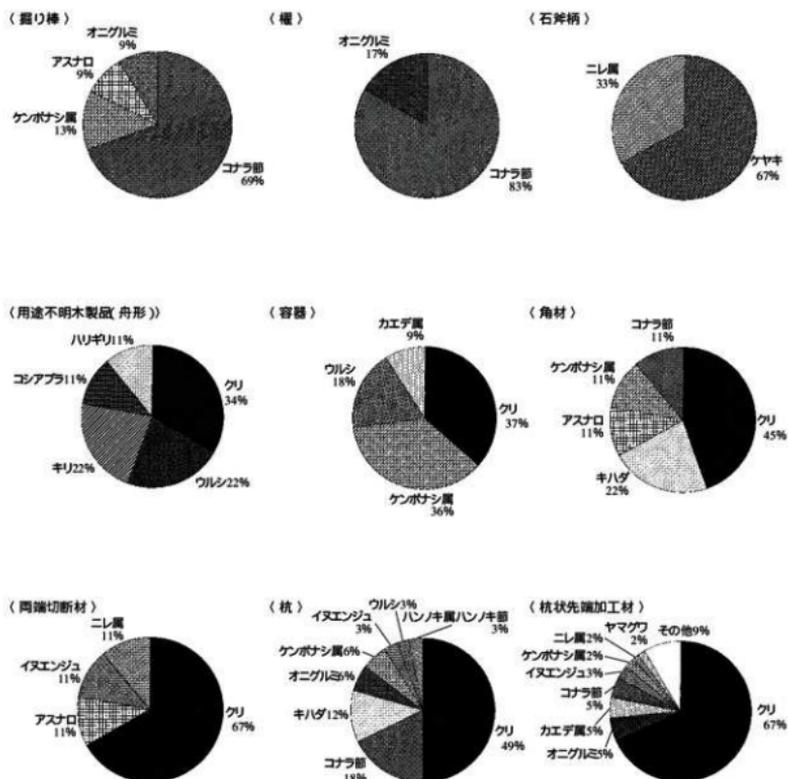


図179 主要器種の樹種組成

められず、板目が約3割と最も多く、次いで分割と芯持丸木が多いが、柾目や芯去削出もわずかに認められる。なお、狂いが少なく靱性に富み、加工が容易であるという特徴を有する。

キハダ：器種組成は板目板材と割材で全体の約5割を占めるが、他の樹種と比べ柾目板材の割合が多い。木製品1器種・木材8器種の合計9器種から成る。木取りは板目と分割に大きく偏り、ともに3割以上を占め、次いで柾目が約2割、芯持丸木が約1割と、器種組成に比べ木取りは少ない。なお、材肌は粗く強度の高い割には柔らかいという特徴を有する。

ケンボナシ属：器種組成は容器、割材、握り棒、杭状先端加工材がほぼ同じ割合で全体の6割以上を占める。また、他の樹種に比べ板目板材の割合がきわめて少ない。木製品3器種・木材7器種の合計10器種から成る。木取りは分割と芯去削出が大部分を占めるが大きな偏りはなく、他にも芯去角、横木取り、縦木取りなどが認められる。なお、材肌は粗いが美しい木理をあらわし、加工は楽であるという特徴を有する。

ウルシ：器種組成は板目板材が約4割と最も多く、次いで用途不明木製品（舟形、挟り付）容器が多い。木製品3器種・木材5器種の合計8器種から成る。木取りは板目が5割を占め、次いで横木取りと柾目が多い。なお、強度はやや弱い方で脆いが比較的軽量で吸水しにくいという特徴を有する。

アスナロ：器種組成は用途不明木製品（薄板状、筒状）が最も多く3割以上を占め、次いで削出割材片、握り棒が多い。木製品3器種・木材4器種の合計7器種から成る。木取りは芯去削出が5割を占め、次いで分割、柾目、芯去角となる。芯持材は認められず、すべて幅・厚さが3cm未満である。なお、材質は柔らかいが強靱で耐久性に優れ、水湿の場所での使用は有効であるという特徴を有する。

イヌエンジュ：器種組成は丸木材が約5割と最も多く、次いで杭状先端加工材、杭、両端切断材の4器種に分類される。木製品は認められず、すべて木材である。木取りはすべて芯持丸木である。なお、加工はやや困難であるが、耐久性は高いという特徴を有する。

ケヤキ：器種組成は石斧柄と用途不明木製品（鳥形）のみである。すべて木製品である。木取りはすべて芯持丸木で、石斧柄は股木部分を使用している。なお、水湿によく耐え、耐久性が高く比重の割に加工は比較的楽であるという特徴を有する。

上記した樹種の内、クリ、オニグルミ、キハダ、イヌエンジュは数量に対する木材の占める割合が多く、これとは対照的に、ウルシ、ケンボナシ属、ケヤキは木製品の割合が多い。前者と同様の傾向はここでは述べていないニレ属、カエデ属にも認められ、後者と同様の傾向はサクラ属、キリ、コシアブラ、ハリギリに認められる。また、アスナロ、イヌエンジュ、ケヤキは器種に限定されないものの、木取りが限定される。

3 みかん割材・半割材・丸木材の意味するもの 本遺跡から出土した木質遺物には、丸木材、半割材のほか、放射状に分割される、いわゆる「みかん割材」に分類されるものが一定量認められる。これらの器種からは、伐採された木の直径がおおよそではあるが求めることが可能である。図181は上記した器種の内、樹種を問わず直径の算出が可能な160点（みかん割材89点、半割材23点、丸木材48点）から復元直径を算出し<sup>(3)</sup>、その分布を4cm毎と10cm毎でグラフ化したものである。

4 cm毎の分布をみると、4～16cmの範囲に123点（77%）が集中し、ピークである4～8cmに76点（48%）が集中する。10cm毎の分布では、0～10cmの範囲に113点（71%）が集中し、0～20cmの範囲には142点（89%）が収まるという注目できる結果となった。

上記したように復元直径は必ずしも正確ではないものの、樹種に関係なく特定の範囲内にほとんど

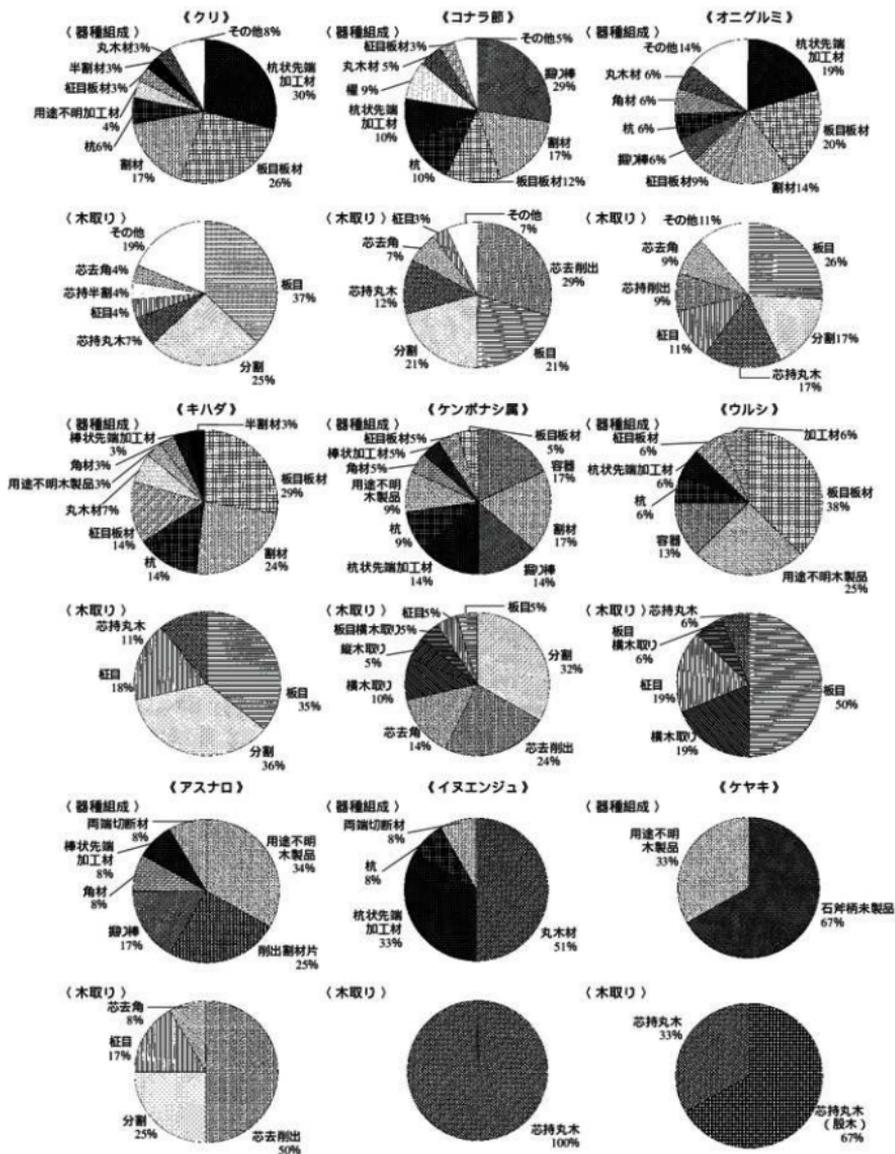


図180 主要樹種の器種組成・木取り

が集中することからは、木を伐採する際には径の太細が大きく関係した、言い換えれば、適当な太さを選択したうえで伐採が行われたものといえるであろう。「成長が速い木は、適する太さになる時間が短い(プラス要因)しかし、適する太さである時間は短い(マイナス要因)。逆に成長が遅い木は、適する太さになる時間はかかるが(マイナス要因)しかし、適する太さである時間は長くなる(プラス要因)」(山田2002)ことを反映させれば、本遺跡出土木質遺物の伐採に関わった人間にとって、直径約4～20cmが適する太さであったといえるであろう。

4 イヌエンジュと木取りの関係 本節2(5)で述べたように、イヌエンジュは例外なく芯材材である。この関係は、東京都東村山市下宅部遺跡第7号水場遺構(東村山市2000・2001)にも認められる。第7号水場遺構は出土土器から縄文時代後期の所産と推定され、二つの流路合流地点付近に構成材をコの字形に配置し、周囲に多数の杭を打ち込んだ遺構であり、イヌエンジュは構成材を支える重要な位置に杭として多用されていた。樹種同定された30本中27本(90%)が丸木材であること、構成材ではクリに次いで多用されていること、出土位置、樹種の特徴から、これまでに類例のないイヌエンジュの選択的な使用が指摘されている(佐々木・能城2004刊行予定)。

本遺跡においては、遺構構成材として使用されたものもあれば包含層から出土したものもあり、選択的に使用されたものかは判然としない。しかしながら、7cm前後にまとまる径からは本項3で述べた太さの選択性が窺え、これに木取りの特徴を踏まえれば、選択的に使用された可能性は考えられるであろう。

そして、時期的・地域的に離れている遺跡間において、これまで類例のない樹種について同様の選択性が指摘できることは、ヒトの植生への関与を検討するうえで注目できるであろう。

5 クリ使用と非クリ使用 —まとめにかえて— 本遺跡から出土した木質遺物の中で、樹種同定を実施したものについて検討してきたが、その結果、いくつかの注目すべき事柄が挙げられる。

まず、クリは他の樹種に比べて圧倒的に多く認められ、大部分の器種の優占樹種であるだけでなく、木取りも多様性に富む。これに加えて、丸木材や半割材、みかん割材から算出できるおおよその径ならびに大型の遺構構成材などから想定できる、伐採・運搬・製作などの行為に要した労働力を最小限

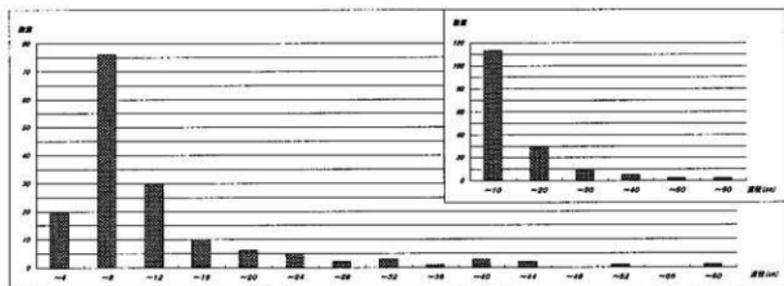


図181 みかん割材・半割材・丸木材の直径分布 4cm毎(大)・10cm毎(小)

に考慮しても、本遺跡から出土した木質遺物に関わった人間にとって、ク리는様々な利用条件に適応し得る樹種であったといえるであろう。

しかしながら、掘り棒、槌、石斧柄、敲き具、用途不明木製品、加工材といった、ク리를ほとんど、もしくはまったく使用していない器種が存在する。これらの器種は、それぞれの器種とそれに多用される樹種が相互に大部分を占める傾向にあるだけでなく、加工材以外はすべて木製品である。

ク리는出土量が他の樹種に比べ突出していること、器種や木取りが多様であることは先に述べたが、出土数に対する木製品が占める割合は3% (300点中9点<sup>(4)</sup>)と比べて少ない。本遺跡の花粉分析(第3章第1節)や約2km北東に位置する三内丸山遺跡第6鉄塔地区での分析結果(青森県1998)からは、円筒下層a・b式期の本遺跡周辺におけるクリ優占の木の分布が推定されており、これを踏まえると、クリで製作された木材が少なすぎるのはきわめて不自然といえる。

以上の事柄を合わせて考えれば、木材製作にはクリ、木製品製作には主としてクリ以外の樹種が多用された、つまり、クリ使用器種と非クリ使用器種を区別していた可能性が指摘できるであろう。

次に、丸木材や半割材、みかん割材から求められるおおよその径がほぼ同一の範囲内に集中することからは、木の伐採や割りに際し、木の太さが選択されたものと思われる。

そのほか、クリも含め、樹種によって器種組成が木製品に偏るものと木材に偏るものに大別できることから、木製品製作と木材製作という特定の器種に限定しない範囲での樹種選択が行われた可能性が指摘できる。さらに、イヌエンジュ、アスナロ、ケヤキなど、器種に限らず木取りに統一性がみられる樹種が認められることから、樹種に応じた木取りの概念が存在した可能性も指摘できるであろう。

以上の事柄を総合すると、選択行為は単に器種に応じた樹種を使用するだけに留まらず、伐採時における木の径、樹種に応じた木取りなど、木の取り扱いに対していくつかの選択項目が存在したことが推察できるであろう。

注(1) 第3章第12節では樹皮を除く598点を対象に樹種同定を実施しており、本項とは点数が異なる。これは同定後の整理作業で接合したものがあることなどに起因する。

(2) 「板」と「材」の明確な分類および基準の設定はかなり困難且つ曖昧であり、特に器種組成において両者を区別するのは問題があると判断した。両者を一括したのはそのためである。

(3) みかん割材の権元径の算出については、放射方向の値を2倍した。芯部分が加工してあるものは、二つの放射方向を延長した交点までの値を2倍した。

(4) 注(1)と同じ。

## (2) 「杭状先端加工材」の検討

1 「杭」と「杭状先端加工材」 二つの名称 本報告において、転用材を含む「杭」はすべて「地表に打ち込まれた状態で確認されたもの」であり、本遺跡から出土した多くの木質遺物の中で用途の特定が可能な数少ない器種のひとつである。それに対し、包含層から出土し、一端が杭状に加工されている木質遺物は、杭として使用された可能性が高いが「杭状先端加工材」(以下、本遺物と呼称)という名称を付し、第2章第4節1では杭と区別して扱った。

これは、①: 木質遺物における各研究機関での器種分類基準の不一致や、木質遺物が有する使用法の複雑性に因る混乱(山田1993)を避けること ②: ①の事柄から、「地表に打ち込まれた状態で確

認められたもの」以外の木質遺物に対して、形状や製作技術から「杭」という用途を限定する名称を使用するのは問題があること③：「杭」という名称は、支えや区画といった用途を限定するものであるが、本遺物の名称は「先端を杭状に加工している」という製作方法を付したものであるため、その用途は限定されないことに起因する。

本節では上記の理由から区別した両遺物の対比など、いくつかの視点から本遺物の用途を検討する。

## 2 二つの器種

(1) 杭(図179・182) 本遺跡から出土した杭の総数は44点である。冒頭で述べたように、地表に打ち込まれた状態で確認されたものである。樹種同定の結果ではクリが5割を占め、次いでコナラ節、キハダが優占する8分類群が認められた。分割材と板目板・板目材が多用されているが、内2割に相当する9点は掘り棒などの木製品を転用したものである。全体の6割以上に上端の潰れや欠損が認められ、それらの大部分は打ち込みによるものと思われる。炭化しているものや樹皮が残存しているものも存在するが、それらは全体の1割にも満たない。

杭を使用する際、ポイントのひとつとなる下端面の形状から、A類：平らなもの(方形) B類：尖るもの(V字状) C類：丸みを帯びるもの(U字状) D類：何らかの力が加わり、本来の形状が変形しているもの に分類した。

その結果、最も多くなるのがA類で全体の3割強を占める。その中には転用材である掘り棒のヘラ部分など平らで幅広い部分を使用しているものもあることから、加工の段階から使用に至るまで、下端の形状にさほど固執していないことが窺える。また、使用する際のもうひとつのポイントである上端(1)は、打ち込むには適さないと思われる板状のものや、潰れや欠損の認められないものが存在する。

以上の事柄に、使用場所が台地に比べて比較的容易と思われる沢地形の泥炭質土や砂質土であることを加味すれば、打ち込まれたものだけでなく人力で挿し込まれたものが少なからず存在したものと考えられるだろう。

(2) 杭状先端加工材(図179・183) 本遺物は樹種同定を実施した木質遺物の中で最も多く、未報告のものを含めれば128点で全体の約2割に相当する。未報告分を含めた樹種同定の結果、クリが約7割を占め、次いでオニグルミ、カエデ属、コナラ節、イヌエンジュが優占する17分類群が認められた。分割材と板目板材がほぼ同じ割合で多い。ほぼ半数に炭化もしくは焦痕が認められ、少数だが樹皮が残存するものが認められる。出土状況およびⅢA～ⅢC層の器種組成(本節3(1))から、大部分は上流からの流れ込みもしくは廃棄されたものと考えられる。

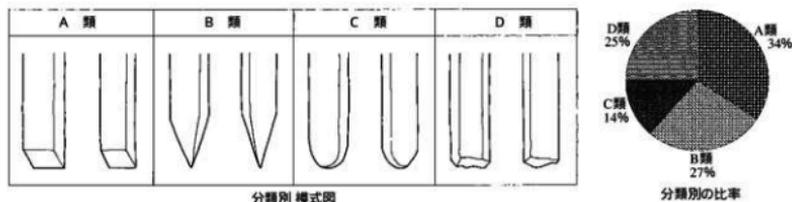


図182 杭

これらを先端加工部分の特徴から、A類：一方の側縁を加工するもの B類：全体を加工するもの C類：両側縁を加工するもの D類：両面を加工するもの E類：一方の面を加工するもの F類：焼きを入れ、炭化させることで整形しているもの に分類し、F類を除いた各分類はさらに、1類：炭化が認められるもの 2類：炭化が認められないもの に二分した。

各分類の比率をみると、A・B類がそれぞれ3割、C・D・E類が約1～2割、F類が1割未満となり、A・B類で大部分を占める。次に、分類別の炭化の割合をみると、多い順に、F類100%、B1類65%、C1類・E1類50%、A1類・D1類25%となり、先端の加工が少ないものほど炭化する傾向が窺える。これは、炭化させることで材の強化や腐食防止を図ったことのあらわれと考えられる。

そのほか、上端は破損しているものが多いが、杭の上端に類似する潰れや歪みが認められるものも存在する。これまでの事例を踏まえれば、本遺物は「差(挿)す」や「打ち込む」など、杭と似た用途が考えられるだろう。

ただ、本遺物に分類したコナラ節については、クリに次いで多いものの加工の度合いに関係なくすべてに炭化が認められない。また、掘り棒や杵に分類されるものと規模・形状に大差がない。さらに、芯の有無に限らず例外なく一面以上の平坦面が作出されていることから加工の発展が窺える。以上のことを踏まえれば、加工途中の未製品が含まれる可能性も考えられるだろう。

3 両者の対比 これまではそれぞれの特徴に注目して述べてきた。ここでは両者を比較し、その所見を述べる。

まず、両者に共通する点は、第一に、樹種組成や木取りが概ね同様の傾向を示すこと、第二に、杭の上端に多く認められる敲打痕に似た痕跡が本遺物にも観察されることである。

次に、両者の異なる点は、第一に、杭は下端が尖らないもの(転用材は平らな部分を下向きにしているもの)が多いが、本遺物は加工の程度に関係なく先が尖ること、第二に、杭に比べると本遺物における炭化の割合は圧倒的に多いことである。

以上、共通する二点からは両遺物が同様の用途を持つ可能性が考えられる。しかしながら、製作方

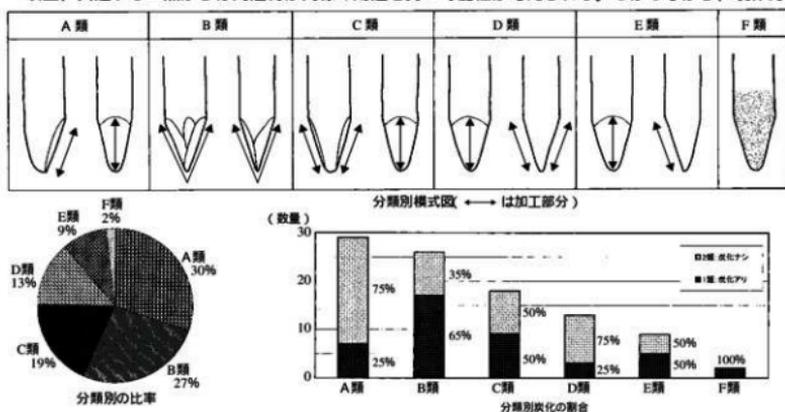


図183 杭状先端加工材

法や形状の相違という視点からは両者はその用途を異にするものと考えるのが妥当であろう。つまり、両遺物における矛盾が発生するのである。

4 遺構との関連性 さて、これまで杭と本遺物の両者を観察・比較し、所見を述べてきた。その結果発生した矛盾については後にふれるとして、ここでは視点を変えて検討する。

本遺物は掘り棒や礎などの木質遺物とは異なり単独での機能が考えにくいほか、先述したように、大部分は廃棄もしくは流れ込みと考えられる。このことから、本遺物の使用場所を沢周辺の台地、すなわち本遺跡丘陵から検出された遺構群（『岩瀬小谷（3）・（4）遺跡』所収）その中でも木質遺物と同時期である縄文時代前期に帰属する遺構に絞り込み、本遺物との関連性を検討する。

その前に、遺構が構築されている台地という場所を考えれば、先端を尖らせることで「差（挿）す」もしくは「打ち込む」際の労働力や地面の硬さなど、使用時に発生する諸問題を大なり小なり回避できるだけでなく、先端を炭化させることにより材の強度は増し、腐食防止効果が最大限に発揮されることは想像に難くないだろう。

上記の点で先ず考えられるのは、住居との関連である。住居跡群の覆土は地山ないし住居内堆積土と同質の土で埋め戻されているものが多い。また、これらには建て替えが認められるものが一部存在し、第4B号住居跡ピット6を除き全体的に柱痕が認められるものは少ない。

次に、沢に面する北側斜面および調査区南側の土器埋設遺構周辺の二つの地域から検出されている小ピット群に着目すれば、これらには建物跡の存在や周辺の遺構との関係が考えられ、多くは柱穴状を呈するが、住居内柱穴と同様に柱痕が認められるものは少ない。このことから考えると、住居内柱穴やピット群は柱材が抜かれた状態で埋められた可能性が高いといえるであろう。もし、この見解に誤りがないのであれば、抜かれた後の柱材は一体どう取り扱われたのであろうか。

また、炭化させる作業が住居内で行われたものと仮定した場合、実物から想像すれば決して不可能ではない。しかしながら、火災の危険が伴うことを加味すれば、住居外で行われたものと考えことはさほど不自然ではないであろう。

そのような視点からも検討すれば、第4号土坑は底面からピット1基が焼土と炭化物とともに検出され、地床炉を伴う仮小屋的な機能が考えられている。また、調査区中央に集中する焼土遺構はいずれも被熱深度が浅く、廃棄と思われるものを除き一時的に火が焚かれたものと考えられる。かなり漠然とした見解であるが、上記の土坑および焼土遺構は、本遺物を加工（炭化）する作業の場でもあった可能性がある遺構といえ、本遺物との関連が考えられる。

5 結語 これまで、「杭状先端加工材」という名称を付した木質遺物について、いくつかの視点から検討してきた。これまで述べてきたすべての事柄を踏まえたとうえで本遺物の用途を考えれば、住居の柱材などの遺構構築材として使用された可能性が濃厚である。これは本遺物の樹種組成の7割を占めるクリが青森県内外の当該期の住居跡から出土する炭化材に多く認められることから推測できるであろう。

しかしながら、先端部に集中する加工や炭化などの技法からは、杭として使用された可能性が高いことにも変わりはない。ただ、本遺物を杭として考えたとき、両者は明らかに加工の特徴が異なることから、使用場所に依じて製作方法を変化した製作者の柔軟な対応が考えられる。そして、このこ

とは本項3での矛盾の理解にも繋がるであろう。

また、先端部以外や全体に炭化や焦痕が認められるものは、燃料材ないし燃料材への転用材、さらには燃料材としての利用途中で消火されたもの（青森県1998）である可能性も考えられる。さらに、先述したコナラ属の検討をふまれば、加工途中の未製品が含まれることも考えられるであろう。

以上、「杭状先端加工材」という遺物に対していくつかの視点から用途を検討してきた。冒頭でもふれたように、「杭状先端加工材」とは「杭」と区別するために便宜上使用した名称であるものの、考えられる用途は多様であり、木質遺物特有の複雑性をあわす結果となった。

考古学における木質遺物の研究は、土器や石器に比べると未だ発展途上の段階にあり、検討すべき問題は決して少なくない。しかし、それらを明らかにしていくことで、過去に生きた人々の痕跡がより鮮明に描かれることはいうまでもない。

（工藤）

注（1）民俗事例では、杭を加工する際に頭（叩く面）を面取りすることで、叩いた時に縁が欠けるのを防ぐことができるほか、頭がある程度尖っている力が集中して入りやすいといわれる（村上2002）。この点を踏まえると、杭の下端に限らず上端の形状や状態は、杭や杭を使用する際の行動を検討するうえで重要なポイントであると考えられる。

### （3）木製品

掘り棒（図184）棒状に削り出された木材の端部にヘラ状または尖り状に加工されているものである。完形品・破損品・未製品が出土している。大きさは、完形品やこれに近いものから、長さ70cm～1.3m、柄の幅2.5～3.5cm、ヘラ部分の長さは8cm～20cm、幅3cm～6cmである。器面が平滑で丁寧に加工されている。使用された木材はコナラ節が多く、アスナロやクリなど他の木材で作られたものよりも柄などの断面径が大きい。前期には各地から出土例が報告されるようになり、これ以降にもその利用が広範に認められるようになる。ここでは、主に、縄文時代前期の掘り棒を比較検討してみる。加工：製作工程に違いがあり、次の2つに分かれる。一つは、割材を削り出して丸い棒状に加工したもので、本遺跡や三内丸山遺跡で出土例がある。もう一つは丸木の両端を加工しているもので、福井県鳥浜貝塚・神奈川県羽根尾貝塚（戸田ほか2003）・富山県桜町遺跡（小矢部1998）（中期）で出土例がある。

形態：一端をヘラ状に加工し、一端を尖らせた形状と両端を尖らせた形状の2種類がある。とくにヘラ状に加工してあるものは柄とヘラの肩部分形状にも違いがあり、大きく分けて3つのタイプがある。1 柄とヘラ部分に境界のないもの、2 撫で肩状になるもの、3 肩部をもつものである。1のタイプは、本遺跡出土例の9と丸木を使って製作された掘り棒4～7がこれに当たる。2のタイプは、本遺跡出土例の2・15と三内丸山遺跡出土例である。3のタイプは本遺跡出土の12と13を除いた出土例であり、ヘラ部分に肩をもつものが本遺跡の特徴である。

大きさ：断面径が3～3.5cmの太めタイプと断面径が2.5cm以下の細身タイプとに大きく分かれる。本遺跡例は大部分が太めタイプで、丸木を使って製作された掘り棒は細身タイプになる。掘り棒の長さも、完形品がこれに近い形状のものだけで確かなことは言えないが、本遺跡例が70cm～1.3mと幅があるのに対して、丸木の掘り棒は1～1.3mと同じような長さの範囲にまとまっている。

ヘラ部分の大きさを探るために、ヘラ部分の形状が1・2のタイプについて、全体の長さやヘラ部

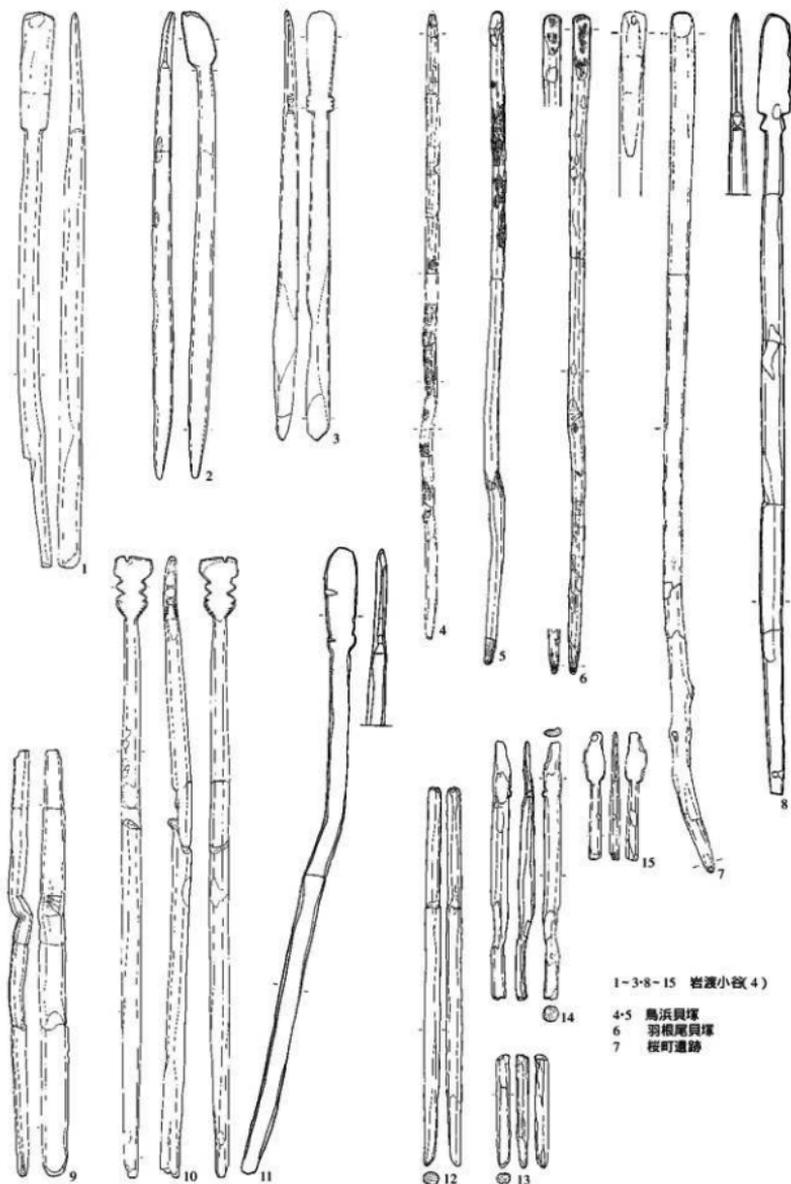


图184 掘り棒集成

分の比率を算出した。使用した掘り棒は3点で、本遺跡の完形掘り棒2点と三内丸山遺跡出土の掘り棒1点である(註1)。比率をみると、全体の長さが各々異なるにも関わらず、およそ8:1であり、掘り棒の長さの違いによってヘラの部分も変化することが分かった。

想定される機能：掘り棒に類似した形状の道具が、「フグシ」と呼ばれる近世の農具である。この農具は「根菜類を掘り取るのが目的で、(一)土をゆるめる、(二)土を掘り上げる、(三)根を突き切る」といった機能のいずれか、または組み合わせによって、根菜類を掘り上げる農具であった。」とされている(藤塚1986)。

根菜類には下表のような種類のものがあり、この内、縄文時代前期にはイモ類が京都府松ヶ崎遺跡(戸原2000)で、中期にはコゴミが桜町遺跡(小矢部市 前掲)で確認されている。松ヶ崎遺跡で出土したのはムカゴで、ツルの葉脈にできる珠芽であるが、主根の部分も掘り上げられ、食用とされた可能性は十分に考えられる。このような出土例から本遺跡でも根菜類を食用に採取していた可能性も考えられる。

下表は根菜類の地表からの長さも表しているが、掘り棒の長さと比較すると、根菜類を掘り上げることが可能な深さであることが分かる。(藤巻1993 表3から転載)

カタクリ・アサツキ	オニユリ・ヤマユリ	ワラビ・ウバユリ	クズ・ヤマイモ
20cm	20~30cm	30cm	100~150cm

このほかにも、ヤマノイモを崖に自生した場所から掘り上げると労力がかからないため、縄文人がこの採取方法を利用してヤマイモを採取していた可能性が述べられている(中口1982)。以上のことから、本遺跡から出土の掘り棒が、形状や規模から根菜類を掘る道具として使用された可能性は高い。

注1 三内丸山遺跡対策室で実測させていただいた計測値をもとにしている。

石斧柄未製品 3点出土しており、台部と柄のなす角度は鋭角である。台部の先端は全体が樹芯に向かって斜めに削られ、柄に近い端部は両面から削りが入る。32-1・3はこの端部が斜めに削られる。台部の先端中央は削られたままのもの若干ツブレたような痕跡のある32-1がある。台部の径は32-1・2と32-3に大きな違いがあり、これと同じように樹種にも、32-1・2のケヤキ、32-3のニレ属のように違いが認められる。台部径の大きさの違いが樹種の違いに反映しており、使用目的等が異なる可能性がある。未製品を含む石斧柄が大量に出土した遺跡として有名なのが縄文時代前期の鳥浜貝塚である。鳥浜貝塚の木製品を分析した網谷氏は、斧身と柄のなす角度によって、鋭角型と鈍角型に分類しており、鋭角型174例・鈍角型11例と大多数が鋭角型の柄である。この内未製品は台部両端のみを裁断したものが実に7割を占めており、網谷氏は成形の第一段階にあてている(網谷1996)。これらの事例を本遺跡の3点と比較してみると、同じ様な加工が台部に施されており、石斧柄に加工する前段階の未製品と位置づけられる。

樞・樞状木製品(図185)本遺跡出土の樞は、柄の断面形が円形で、水かきの部分に向かって緩やかに幅が広がる形状で、下端が尖るものが多い。水かき部分の断面は両側縁がやや尖り、中央部分が

膨らむ形状である。他の遺跡出土の縄文時代前期の櫂は、本遺跡出土例と同じく、下端が尖った形状を持ち、水かき部分が緩やかに広がる形状である。とくに羽根尾貝塚の出土例は水かき部分の長さや幅が本遺跡例に近い。鳥浜貝塚例は多くの種類が出土しているため一概にはいえないが、水かき部分の規模が大きく、やや幅の広い形状をしている。

縄文時代の舟を漕ぐ方法としては、櫂の出土する事例が多いことから、座位による走法であったといわれており、とくに櫂の動作によっては、最適な長さの櫂や水かき部分の面積も変わると考えられる。本遺跡出土例・羽根尾貝塚出土例・鳥浜貝塚出土例で各々櫂の形状が異なるのは、時代や地域性のほかに、海や湖沼・川など舟を操る環境の違いとも考えられる。

容器 本遺跡の容器類は9個体11点出土している。漆を塗布しているのは鉢・皿の4点である。漆は、何層かの構造で塗り重ねられており、赤漆には、ベンガラが使用されている。黒漆に使用されたものは本遺跡出土遺物でははっきりしなかったが、一般的には炭化物が使用されていたと推定されている。容器は全体形が復元できたものは59-1の1点のみで、その他は破片資料である。器種は鉢3点・皿4点・槽2点で、この内、台付鉢2点、台付皿1点である。使用された樹種はケンボナシ属・クリ・カエデ属・ウルシで、とくにケンボナシ属が多い。内訳は、ケンボナシ属：鉢1点・皿3点、クリ：鉢2点、カエデ属：皿1点、ウルシ：槽2点である。

縄文時代前期の他遺跡と比較してみると、器種では鉢の残存する遺跡が多く認められるが、最も出土点数の多い鳥浜貝塚では鉢・皿・碗の割合はほぼ同じである。使用される木材はケンボナシ属・クリ・ケヤキ・トチノキなどが各遺跡に共通する樹種である。とくにケンボナシ属が各遺跡で顕著に使用されており、「この木はそれほど優先的に自生しない木であるのに容器類に多く見られるのは、容器を製作するにあたっての樹種の選択が行われた可能性がある。」と述べられている（能城1996）。本遺跡でもケンボナシ属が容器に使用される割合が高く、同時代に使用された容器類と同じような器種組成や樹種選択が行われたと思われる。

用途不明木製品（槌状）：横断面形がU字形を呈し、内外面とも厚さが均一になるよう削られ、木口面は真っ直ぐに加工されており、表面の端部付近には一条の文様が施される。槌状木製品と分類した

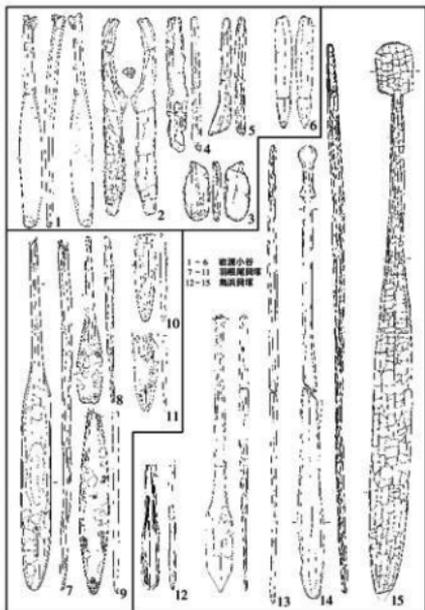


図185 櫂状木製品集成

ものの、その精巧な作りから「櫓」とは別の用途も考えられる。この櫓状木製品の類似例としては、鳥浜貝塚出土の漆塗り製品が挙げられる(鳥浜貝塚1987)。これは表面に赤漆と黒漆で文様が表現され、表面に一条の削り出し突帯がつくものである。出土例も少ないことから機能については不明であり、今後の出土事例の増加が待たれる。

用途不明木製品(鳥形) やや湾曲した丸木材の形状を生かして、全面を削り、鳥を表現したような形状に加工している。上面に楕円形状の削りが入っており、完成品のようにも見える。使用された木材はケヤキであり、97-1の用途不明加工材(容器状)や御井戸遺跡(新潟)出土の把手付き片口木製品(大田区2001)と同様に木製品の未製品の可能性もある。弥生時代以降の鳥形木製品と同様、祭祀的な意味合いで製作された可能性もあり、いずれかの判断はつかない。

用途不明木製品(舟形) 先端を三角形・楕円形状に加工しているもので、内外面が平坦・丸味を帯びて加工され、両側縁がやや立ち上がり、端部などが加工されているものである。これらの木製品の1つ、61-1は突起部分が両端につくのが特徴で、縄文時代中期の紅葉山49号遺跡(石狩市)から出土した「舟形容器」に形状が類似している(石狩市2003)。

舟形木製品と呼称されるものは全国各地で弥生時代以降も出土しており、準構造船などその時代の舟を模したと思われる木製品も出土している。本遺跡から出土した用途不明木製品(舟形)も縄文時代の舟を模した可能性もあり、このことについて若干触れてみる。

両端形状の分かる60-2、61-1は平面形がいわゆる腰節形に近い形状である。60-2は側面からみると噴水線が両端とも高くなっており、外洋にも適した構造になっている(阿部2002)。川舟の場合は「舟底の下方に丸味をつけると据わりが悪く、波にゆられて転覆するので、底下は、平らなほうが波返りすることがない」(出口2001)とあり、仮に本遺跡から海に出る場合、沖館川を通して移動する方法がとられたであろうから、川の移動と海の移動を兼ね備えた丸木舟が必要であったと想定するのは難くない。縄文時代の他の丸木舟例の平面形は腰節形の舟である(出口 前掲)。「帆定用の装置が発見されておらず、櫂が多く発掘されているので、走法はペーロン漕法(漕手が進行方向に向かって櫂で漕ぐ漕法)であったと思われる」(橋口1999)から推測すると、座位による櫂が使用されたと考えられる。

用途不明木製品(薄板状・管状)と削り出し棒状木製品の加工方法(図186)とくにアスナロから作り出された木製品は、断面が円形で径2~2.5cmに削り出ししているものである。これらと同じような形状を持つものに、掘り棒や両端切断材がある。他の削り出し材と異なる点は、1 径がやや小さく特徴的なこと、2 削り出し材をさらに分割した材が認められ

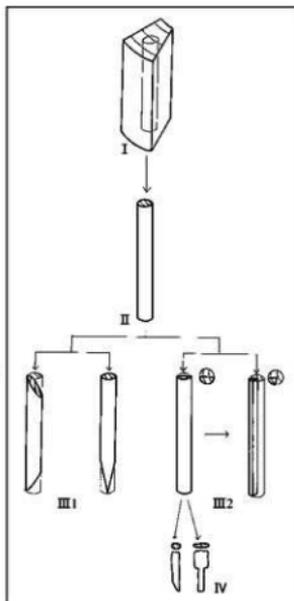


図186 用途不明木製品(管状・薄板状)と削り出し加工材の加工方法

ること、3 アスナロを使用した木製品でかなり小さく加工した木製品がみられることである。これらの違いを踏まえてアスナロ材の加工工程の想定を行った。I：木材を適当な大きさに割る、II：その割材を削り出して断面形状を丸くする、III1：削り出した丸棒の一部を加工して使用する、III2：削り出した丸棒を更に削り取る、IV：加工して別の木製品を仕上げる、である。I・II工程を示すものは出土していないが、これは、アスナロ材が製品として利用される頻度が高く、無駄なく使用される表れかもしれない。III1工程のものは削出割材片の一部を加工して使用している。III2工程のものは、半割したもの(88-12)、四分割したもの(88-11)、分割した材の裏面を除いたもの(74-6、88-13)とさらに削り取られているものがあり、IやIIの工程から連続する加工方法と位置付けられそうである。これらはIVの工程で作られた薄板状・管状木製品に加工されたと考えられる。他遺跡でもアスナロ材は木製品に利用されている。三内丸山遺跡出土の筒状木製品もアスナロ材で(中村2002)、形状は若干異なるものの、最大幅は5mm～3cm程度であり、本遺跡の薄板状・管状木製品に類似するものである。青森平野周辺の縄文時代前期遺跡における針葉樹の木材加工方法の一つである可能性がある。

### 第3節 遺跡のまとめ

#### 1 分析結果のまとめと今後の課題

花粉分析 表土から第II層では多くないが、これより下部の層ではクリが最も優占する。このほかコナラ属コナラ亜属が試料9・10で多く出現し、クルミ属もやや多い。

植物珪酸体分析 各層ともクマザサ属の残存が多い。

珪藻分析 沢の本流では各層とも河川の中～下流域に生息する指標種群や流水性種の出現率が高い。支流の下部堆積層は殻数密度が低く、ほとんど生息していない。上部は陸生珪藻が多く、ほとんど水が流れる環境ではなかったと思われる。

昆虫同定 III C層からサクラコガネ属の一種、ハナムグリが最も多く確認された。これにオサムシ科、アオオサムシなどが他の昆虫化石よりもやや多く確認されている。食性のサクラコガネ属は「周辺の植生が人為度の高い二次林で占められていたことを示す」、ハナムグリは「森林性昆虫」であり、オサムシ科、アオオサムシは「食屍性」であることを示す。これらのことから、二次林・森林性の両者を併せ持った環境であった可能性がある(森2002)。

放射性炭素年代測定 三内丸山遺跡での測定結果から、円筒下層式土器の測定値の幅は、5,100～4,600炭素年前(yrBP)とされており(辻2002)、本遺跡の年代も試料3(縄文時代後期)を除き、すべてこの範囲に含まれる。試料別にみると、第1号木組遺構は4940±40炭素年前(yrBP)から4650±40炭素年前(yrBP)と年代幅が大きい。貯水部の南北枠はほぼ同時期の値を示しているが、埋・排水・土留部分は大きな差がある。分析結果の誤差があるいは、第1号木組遺構の使用期間が長く、最終的な形態なのかは疑問が残る。住居跡は、1・11・13・23号住居跡から採取された炭化材・炭化種子を使っている。炭素年代は23→13→11→1号住居跡の順に新しくなり、竪穴住居跡のまとめで大きく分類したI～III期の中に包括されるものである。上流側の杭跡2・板敷遺構の炭素年代は近接している。三内丸山遺跡では円筒下層c式に相当する炭素年代試料が得られておらず、この型式の

炭素年代の対比は出来なかったが、第11・13号住居跡の炭素年代がこれに当てはまる可能性もあると思われる。

塗膜分析 59-1 は砂を混和した漆が1～2層塗布されている。このほか、赤く塗布された木胎漆器の赤漆はベンガラを含むものである。黒漆に含まれる黒色物質は不明である。

黒曜石産地同定 試料すべてが高い確率で遺跡の西側に位置する鷹森山・大釈迦・戸門産地である。石器の使用痕分析 筒状石器と播器には被加工物に対する刃部の当て方が異なる。素刃の筒状石器は木などの植物に対して使用されたと考えられる。とくに木製品の仕上げには小さく鋭利な工具が必要であり、これらの石器が使用された可能性がある。

土器の成分分析（松本2004）の文献と比較すると、本遺跡の土器胎土は円筒下層b・d式土器は津軽東部採取の土（遺跡周辺の土）に近い値、円筒下層b式は津軽西部採取の土に近い値を示す。また、下層b～d式にかけて白色系粘土を胎土として用いており、三内丸山遺跡で白色系粘土の利用期間内（円筒下層a式～大木10式併行）に収まるものと考えられる。

遺構内土壌分析 土器埋設遺構のまとめにあり。

大型植物化石群 IIIA～IIIC層をととして、クリ果皮片が最も多い出土量である。オニグルミ・ミズナラ等のコナラ節などの食用、ヒョウタン・ウリ・ウルシ属・キハダなどの有用植物の種子が出土している。

樹種 第4章第2節3(2)に樹種同定のまとめあり。

## 2 集落のまとめ

縄文時代早期 遺構は確認されておらず、土器片が沢を中心に出土しており、施文文様から縄文時代早期中葉に相当する。沖館川を挟んだ西側の熊沢遺跡でも同じ時期の土器片が出土しており、遺跡周辺でこの時代の人々が活動していた。

縄文時代前期 本遺跡の主体をなす時期である。前期中葉～末にかけて集落が営まれたと考えられる。沖館川流域には縄文時代前期の遺跡が立地しており、これらの遺跡と本遺跡が沖館川を介して集落間の交流をもった可能性がある。

前期中葉：沢の近辺で遺物が出土する。遺構は確認されていない。沖館川西岸の熊沢遺跡では竪穴住居跡が構築され、沖館川に面した斜面に捨て場が形成され、三内丸山遺跡では集落が形成され始める。前期中葉～後葉：沢を挟んだ南北斜面で小型の竪穴住居跡が構築される。土器埋設遺構は北側斜面のやや南側に埋設される。沢では上流側に導水状施設を設け、その下流側に木組遺構が構築され、堰部で水を遮断し、貯水部で水を貯める機能が想定される。このさらに下流側には樹皮範囲が広がり、木組遺構と樹皮範囲の間には対岸を行き来すると思われる木道がある。下流側・南側斜面住居跡周辺では土器が捨てられる。熊沢遺跡でも集落が営まれ、第2号遺物集中ブロックが形成される。

前期後葉：沢を挟んだ南北斜面に中型の竪穴住居跡が構築される。土器埋設遺構は、南側斜面の西寄りと頂部に埋設され、土坑墓も同じく南側斜面頂部・東寄りに構築される。遺物も沢下流及び南側斜面・頂部周辺に捨てられている。沢の上流側を作業場・廃棄場にしていった可能性があり、クリ果皮片

集中範囲が検出される。

前期後葉～末：北側斜面に竪穴住居跡が多く作られ、住居跡を拡張して大型住居跡を構築している。集落範囲は北側斜面頂部に広がり、貯蔵穴の可能性のある土坑はこの時期に構築された可能性がある。沢や南側斜面の住居跡のあった場所に遺物が捨てられる。また、土器埋設遺構の集中範囲となる。

前期の生業活動：本遺跡から出土した遺物から、1年の中で行われる作業を下表にした。とくに沢から出土した大型植物遺体からクリ・オニグルミ・コナラ節などを採取して食料としたと思われる。また、本遺跡からは漆器が出土し、ウルシ種子、ウルシ材も利用されていることから、遺跡周辺でウルシ採取が行われた可能性は高いと思われる。樹皮を剥いて丸めたものも出土しており、樹皮剥ぎが行われていたと思われる。また、沢から出土した多量の木質遺物から、伐採が行われていた可能性は高い。ただ、伐採季節が不明であったため、鳥浜貝塚例を参考にしている。

落葉広葉樹地帯の民俗例からみた本遺跡での生業活動の想定（年単位）

		春		梅雨		夏		秋			
1月	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
漆採取											
木の实採取											
樹皮剥ぎ											
木の伐採(鳥浜貝塚の例による)											

縄文時代中期 中期初頭～前葉は数点の遺物が南側頂部、沢近辺に散在している。遺構は検出されなかった。中期中葉から後葉にかけては北側斜面に円筒上層e式期の住居跡・土坑が構築される。遺構は存在するものの、遺物量は多くない。むしろ、北側斜面から沢にかけて円筒上層c・d式土器の出土量が多く、前期の竪穴住居跡の埋まりきらない凹地に遺物を廃棄したと思われる。この凹地は発掘調査の段階でも確認されている。後葉～末は沢から南側斜面で遺物が散在している。

縄文時代後期 前葉は遺物が散在しており、北側斜面住居跡堆積土内、沢、頂部捨て場から出土している。中葉は焼失家屋が1軒検出されている。中葉～後葉は土坑が1基検出されている。

縄文時代晩期 南側斜面・沢で土器片が2点検出されている。

平安時代 北側斜面の東寄り、白頭山降下火山灰以前に構築された土坑が4基、沢から出土した土器片が1点出土している。

最後になりましたが、4年間に及ぶ発掘調査並びに報告書作成に関わりましたすべての方々に心から感謝申し上げます。 (坂本)

引用・参考文献

- 青森県教育庁文化課1996『三内丸山遺跡Ⅵ』 青森県埋蔵文化財調査報告書第205集 青森県教育委員会  
 青森県教育庁文化課1997『三内丸山遺跡Ⅶ』 青森県埋蔵文化財調査報告書第230集 青森県教育委員会  
 青森県教育庁文化課1998『三内丸山遺跡Ⅷ』 青森県埋蔵文化財調査報告書第249集 青森県教育委員会

- 青森県埋蔵文化財調査センター 2003『畑内遺跡Ⅰ』青森県埋蔵文化財調査報告書第345集 青森県教育委員会
- 青森県埋蔵文化財調査センター 2003『上野尻遺跡Ⅳ』青森県埋蔵文化財調査報告書第353集 青森県教育委員会
- 青森県教育委員会 1978『熊沢遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第38集 青森県教育委員会
- 青森県教育委員会 1980『大平遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第52集 青森県教育委員会
- 阿部千春2000『第七章第1節』『青森県史 別編 三内丸山遺跡』青森県史友の会
- 網谷克彦ほか 1996『縄文時代木製遺物・木工技術の基礎的研究 平成7年度科学研究費補助金(一般研究C)研究成果報告書』
- 池谷勝典2003『磨石・鮎石・石皿の実験考古学的研究』『アルカ 研究論集第1号』埋蔵文化財研究業務 株式会社アルカ
- 石狩市教育委員会2003『2003年度 石狩紅葉山49号遺跡低湿地部発掘調査概要報告』CD-ROM版
- 江原 英1998『寺野東遺跡Ⅳ(縄文時代谷部編)』栃木県埋蔵文化財調査報告書第208集
- 大川 清・鈴木公雄・工業普通編1996『日本土器事典』雄山閣出版株式会社
- 大田区立郷土博物館2001『ものづくり考古学- 原始・古代の人々の知恵と工夫』東京美術
- 小笠原雅行2000『第四章第2節第1項』『青森県史 別編 三内丸山遺跡』青森県史友の会
- 小野賢之ほか2000『熊沢遺跡発掘調査報告書』青森市埋蔵文化財調査報告書第48集 青森市教育委員会
- 小野賢之ほか2001~2003『稲山遺跡発掘調査報告書Ⅰ~Ⅲ』 青森市教育委員会
- 小矢部市教育委員会1998『桜町遺跡おやべ展-縄文の森に吹く風を感じて-』小矢部市・小矢部市観光協会
- 河内武春1993『吉野の塚かき- 奈良県吉野郡高吉野村賀名生を中心として』『日本歴史民俗論集7 海・川・山の生産と信仰』吉川弘文館
- 柏崎市教育委員会1985『刈羽大平・小丸山』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第5 柏崎市教育委員会
- 鹿沼市教育委員会2002『明神前遺跡-発掘調査概要報告書』鹿沼市教育委員会
- 工藤大他『木造野田小笠野貝塚- 岩木川流域の縄文前期の貝塚発掘調査報告書-』青森県立郷土館調査報告第35集考古-10
- (財)長野県埋蔵文化財調査センター1994『県道中野豊野線バイパス志賀中野有料道路- 長野県中野市内- 栗林遺跡・七瀬遺跡』(財)長野県埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書 19
- 櫻田 隆ほか1999『池内遺跡 遺物・資料編』秋田県文化財調査報告書第282集 秋田県教育委員会
- 佐久間惇1985『三面のヤマノイモ』『技術と民俗(上)』日本民俗文化大系(普及版)第13巻 小学館
- 佐々木由香2000『縄文時代の「水場遺構」に関する基礎的研究』『古代』第108号 早稲田大学考古学会
- 佐々木由香・熊城修一2004『東京都下宅部遺跡の水場遺構材から復元する縄文時代後期の森林資源利用』『植生史研究』第12巻第1号 刊行予定
- 静岡市教育委員会1990『蛭田遺跡』静岡市埋蔵文化財調査報告23 静岡市教育委員会
- 栗田正蔵1999『雪国の保存食』『ブナ林の民俗』高志書院
- 末木 健1999『埋蔵』『縄文時代 第10号(第3分冊)』縄文時代研究会
- 滝沢規明ほか2002『元屋敷遺跡Ⅱ(上段)奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書XⅣ』朝日村文化財報告書第22集 朝日村教育委員会
- 種市幸生・田口 尚ほか『忍路土場遺跡・忍路5遺跡』北海道埋蔵文化財調査センター調査報告書第53集
- 茅野高雄ほか2001『畑内遺跡Ⅶ』青森県埋蔵文化財調査センター第308集 青森県教育委員会
- 辻誠一郎2000『第VI章第4節』『青森県史 別編 三内丸山遺跡』青森県史友の会
- 出口晶子2001『丸木舟』ものと人間の文化史98 法政大学出版局
- 戸田哲也ほか2003『神奈川県小田原市 羽根尾貝塚』玉川文化財研究所

- 戸原和人2000「話題の遺跡と出土遺物 京都府網野町松ヶ崎遺跡」文化庁編『発掘された日本列島2000 新発見考古通報』朝日新聞社
- 鳥浜貝塚研究グループ1987「図版312」『鳥浜貝塚- 1980-1985年度のまとめ』
- 中口 裕1982「Ⅳ 縄文農耕のあけぼの」『実験考古学』鎌山館
- 中村美杉2000「第Ⅳ章第2節3」『青森県史 別編 三内丸山遺跡』青森県史友の会
- 名久井文明1999「樹皮の文化史」吉川弘文館
- 奈良国立文化財研究所1985『木器集成図録 近畿古代編』
- 成澤潔水1982『木材- 生きている資源- 』パウワウ社
- 能城修一ほか1996「鳥浜貝塚から出土した木製品の樹種」『鳥浜貝塚研究1』福井県立若狭歴史民俗資料館
- 横口尚武ほか1999『海を渡った縄文人 縄文時代の交流と交易』小学館
- 東村山市遺跡調査会2000『下宅部遺跡 2000年度発掘調査概報』東村山市遺跡調査会下宅部遺跡調査団
- 東村山市遺跡調査会2001『下宅部遺跡 2001年度発掘調査概報』東村山市遺跡調査会下宅部遺跡調査団
- 藤巻悦司1986「武蔵の羅り棒」『技術と民俗(下)』日本民俗文化大系(普及版)第14巻 小学館
- 藤巻正徳1993「土器具(一)」『新編考古学談話会会報』第12号 新編考古学談話会
- 北海道開拓記念館1998「第47回特別展 うるし文化- 漆器が語る北海道の歴史- 」。北海道開拓記念館・開拓の村文化振興会
- 前田義人ほか2001「長野小西田遺跡2。北九州市埋蔵文化財調査報告書第262集 (財)北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室
- 松本建通2003「三内丸山遺跡粘土探窟坑粘土と遺跡出土土器の成分分析」『特別史跡三内丸山遺跡 年報6』青森県教育庁文化財保護課三内丸山遺跡対策室
- 松本建通2004「三内丸山遺跡出土土器粘土成分の時代的変化に関する研究- 円筒下層a式から大木10式まで- 」。平成15年度 三内丸山遺跡報告会 予稿集。青森県教育庁文化財保護課三内丸山遺跡対策室
- 三浦貞栄治1983「Ⅴ. 衣 食 住」『小田野沢の民俗』調査報告書。青森県郷土館調査報告第14集・民俗- 7
- 南北海道考古学情報交換会第20回記念シンポジウム実行委員会1999「北日本における縄文時代の墓制 資料集」
- 村上由美子2002「木を割るということ」『住進する考古学』近江貝塚研究会
- 村上義直ほか2003「平成14年度 縄文講座 縄文人の台所・水さらし場遺構を考える- 縄文人は水とどう関わってきたか- 」。資料
- 森 勇- 2000「第Ⅵ章第2節」『青森県史 別編 三内丸山遺跡』青森県史友の会
- 山本暉久2003「墓壇内に倒置された土器」『神奈川考古 第39号』神奈川考古同人会
- 山田昌久2002「材成長から見る縄文・弥生時代の人類-森林関係」『人類誌集報2002』東京都立大学考古学報告8
- 山田昌久1993「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成- 用材から見た人間・植物関係史」『植生史研究』特別第1号 植生史研究会
- 渡邊 昌2000「縄文時代の建築用主要道具について- 木の建築をつくる技術と道具の歴史に関する調査報告 その2- 」。 (財)竹中木工道具館研究紀要 第12号 財団法人 竹中木工道具館
- 渡辺 誠2002「水さらし場遺構研究の現状と課題- 明神前遺跡の成果に基づいて」『明神前遺跡- 発掘調査概要報告書』鹿沼市教育委員会

遺構出土土器

図版番号	出土地点	出土層位	部位	口唇・口縁	胴部	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	分類	備考
図27-1	AN56P2880	ⅢC	口・胴上	波状, 単気(LA) 須回, 残帯→RLR 側注	単気(L) 須回?	(288)	(136)	-	Ⅱ3	口縁丸み
図27-2	AN56	ⅢC	口	波状, 単気(LA) 須回, 残帯→RLR 側注	-	-	-	-	Ⅱ3	

二次加工 - 割り取り後の加工を指す。割製痕の残存しているものは「二次加工なし」にしている。  
 樹皮の推定長は実測図をマップメーターで計測した。

遺構出土木質遺物

遺物番号	No	名称	部位	グリッド	遺構構成部位	製造の時期, 採取層	形態・用途	長さ(mm) / 幅(mm)	備考
図28-1	H196 C-1712	3011	コナラ 横切面	C 層	AN S1	1木 須回	芯部切断	704 75	AMS 5011 RWATARI3
図28-2	C-1270	3612	コナラ 横切面	C 層	AN S6	1木 須回 厚皮層	芯部切断	754 57	炭化あり
図28-3	C-1697	3611	コナラ 横切面	C 層	AN S6	1木 須回 厚皮層	芯部切断	915 280	
図29-1	C-814	3613	コナラ 横切面	B 層	AN S6	1木 須回 厚皮層	芯部切断	1262 51	
図29-2	H60 C-793	3340	ケンボノ 横切面	B 層	AN S5	1木 須回 厚皮層	芯部切断	1032 34	
図29-3	H175 C-834	3028	コナラ 横切面	B 層	AN S5	1木 須回 厚皮層	芯部切断	1219 39	
図29-4	C-1681	3008	コナラ 横切面	C 層	AN S5	1木 須回 厚皮層	芯部切断	1378 55	
図30-1	H182 C-1850	3318	コナラ 横切面	C 層	AN S6	1木 須回 厚皮層	芯部切断	846 50	
図30-2	H182 C-1672	3317	コナラ 横切面	C 層	AN S6	1木 須回 厚皮層	芯部切断	733 41	樹皮付着
図30-3	H37 C-1705	3390	クスノキ 横切面	C 層	AN S5	1木 須回	芯部切断	622 23	丸端縁
図30-4	H196 C-1843	3013	アズキ 横切面	C 層	AN S3	1木 須回	芯部切断	437 37	
図30-5	C-1463-1683	3802 3385	ケンボノ 横切面	C 層	AN S6	1木 須回 厚皮層	芯部切断	(1023) 63	
図30-6	H35 C-792	3386	ケンボノ 横切面	B 層	AN S5	1木 須回 厚皮層	芯部切断	700 49	
図30-7	C-1767	3610	コナラ 横切面	C 層	AN S3	1木 須回 厚皮層	芯部切断	691 71	樹皮着 ?
図31-1	C-1334	3604	ケヤキ 横切面	C 層	AN S6	1木 須回 厚皮層	芯部切断	463 262	
図31-2	C-1720	3605	ケヤキ 横切面	C 層	AN S6	1木 須回 厚皮層	芯部切断	467 210	
図31-3	H218 C-1729	3070	ニレ 横切面	C 層	AN S6	1木 須回 厚皮層	芯部切断	257 62	
図31-4	H192 C-1324	3270	クリ 横切面	C 層	AN S6	1木 須回 厚皮層	芯部切断	618 58	
図31-5	H43 C-1852	3337	コナラ 横切面	C 層	AN S6	1木 須回 厚皮層	芯部切断	812 33	
図31-6	C-1803	3034	コナラ 横切面	C 層	AN S6	1木 須回 厚皮層	芯部切断	825 47	
図31-7	H181 C-1650	3020	クリ 横切面	C 層	AN S6	1木 須回 厚皮層	芯部切断	1699 27	
図31-8	H181 C-1664	3017	クリ 横切面	C 層	AN S6	1木 須回 厚皮層	芯部切断	1699 27	AMS 5011 RWATARI6
図31-9	H180 C-1106	3032	ケンボノ 横切面	C 層	AN S6	1木 須回 厚皮層	芯部切断	894 53	
図31-10	H180 C-1670	3018	コナラ 横切面	C 層	AN S6	1木 須回 厚皮層	芯部切断	732 69	
図31-11	H182 C-1668	3316	クリ 横切面	C 層	AN S6	1木 須回 厚皮層	芯部切断	1143 67	
図31-12	H180 C-1671	3146	ヒノキ 横切面	C 層	AN S6	1木 須回 厚皮層	芯部切断	1027 66	
図31-13	H180 C-1671	3146	ヒノキ 横切面	C 層	AN S6	1木 須回 厚皮層	芯部切断	500 48	

通跡番号	No	傾斜	方位	グリッド	通跡構成	掘削の状況、水質等	形態・技法	全長 (mm)	備考	
通跡1	H183 C-1666	3310	キハダ	C	A N56	1本掘 お排水 溝	杭 既設材	掘削	390 85	
通跡2	H177 C-1663	3014	コナア ノ型	C	A N56	1本掘 お排水 溝	杭 既設材	掘削	724 131	
通跡3	H43 C-1662	3336	クリ	C	A N56	1本掘 お排水 溝	杭 既設材	掘削	482 76	
通跡4	H191 C-1662	3048	クリ	C	A N56	1本掘 お排水 溝	杭 既設材	掘削	643 155	
通跡5	H181 C-1664	3019	ノ	C	A N56	1本掘 お排水 溝	杭 既設材	249掘	780 149	
通跡6	H182 C-1660	3320	コナア ノ型	C	A N56	1本掘 お排水 溝	杭 既設材	分割	937 65	
通跡7	H15 C-1662	3377	クリ	C	A N56	1本掘 お排水 溝	杭 既設材	249掘	448 100	金属化
通跡8	H38 C-1669	3137	クリ	C	A N55	1本掘 既設材	杭 既設材	掘削	197 47	
通跡9	H45 C-1769	3329	キハダ	C	A N56	1本掘 既設材	既設	掘削	536 99	掘削?
通跡10	H45 C-1793	3330	クリノ少	C	A N56	1本掘 既設材	既設	掘削	556 80	
通跡11	H217 C-1354	3334	クリノ少	C	A N55	1本掘 既設材	既設	掘削	642 69	
通跡12	H177 C-1431	3015	クリ	C	A N56	1本掘 既設材	既設	掘削	792 122	
通跡13	H37 C-1799	3380	キハダ	C	A N56	1本掘 既設材	既設	掘削	486 75	
通跡14	H2 C-1613	3353	クリ	C	A N56	1本掘 既設材	既設	掘削	800 114	炭化あり
通跡15	H13 C-1624	3375	キハダ	C	A N56	1本掘 既設材	既設	掘削	484 81	
通跡16	H216 C-1625	3331	クリ	C	A N56	1本掘 既設材	既設	掘削	621 248	
通跡17	H193 C-1618	3085	クリ	C	A N56	1本掘 既設材	既設	掘削	500 64	
通跡18	H44 C-1619	3332	クリ	C	A N56	1本掘 既設材	既設	掘削	505 66	
通跡19	H202 C-1623	3093	オニダ ノ型	C	A N56	1本掘 既設材	既設	掘削	1044 368	
通跡20	H198-2 C-1662	3094	クリ	C	A N56	1本掘 既設材	既設	掘削	688 273	
通跡21	H198-2 C-1661	3093	クリ	C	A N56	1本掘 既設材	既設	掘削	710 280	A M S 封閉 RWAT#10
通跡22	H183 C-1667	3308	クリ	C	A N56	1本掘 お排水 溝	杭 既設材	掘削	656 262	A M S 封閉 RWAT#7
通跡23	H193 C-1375	3084	クリ	C	A N55	1本掘 既設材	既設	掘削	688 275	
通跡24	H128-3 C-1646	3487	ノ	A	A N56	1本掘 既設材	既設	分割	180 55	
通跡25	H24 C-1646	3380	キハダ	C	A N56	1本掘 既設材	既設	掘削	809 21	
通跡26	H8 C-1640	3365	クリ	C	A N55	1本掘 既設材	既設	掘削	317 120	
通跡27	H22-2 C-1613	3511	クリ	C	A N56	1本掘 既設材	既設	掘削	291/289 157/160	
通跡28	H186 C-840	3096	クリ	C	A N55	1本掘 既設材	既設	掘削	1107 226	
通跡29	H188 C-833	3046	クリ	C	A N55	1本掘 既設材	既設	掘削	735 156	
通跡30	H197-1 C-1815	3097	キハダ	C	A N56	1本掘 既設材	既設	掘削	765 404	スゲツチのみ
通跡31	H6 C-1165	3380	オニダ ノ型	C	A N55	1本掘 既設材	既設	掘削	624 196	
通跡32	H189 C-1827	3347	コナア ノ型	C	A N56	1本掘 既設材	既設	掘削	787 242	
通跡33	H192 C-1479	3122	コナア ノ型	C	A N55	1本掘 既設材	既設	掘削	587 113	掘削?

建物番号	No	名称	部材	グレード	構造体 組成部	目的の機能、 実用性等		形態・技法	全長 (mm) 構造 寸法	備考	
図02	H10 C-183	3126	キハダ	C	A N56	1本組 丸木	芯持丸木	上部が破損している。下部は腐りにより丸味を帯びている。	161 95		
図03	H10 C-173Z	3351	ニレ	C	A N56	1本組 貯水部 笠形部	半割材	遺存状態悪い。表面は二次加工あり。裏面は平直。表面下部に腐り痕あり。	334 96		
図04	H105 C-1815	3044	クリ	B	A N56	1本組 貯水部 笠形部	板目材	割材内で、表面下部・表面左側縁に大きな割れ痕あり。上下部は破損している。二次加工なし。	688 65		
図05	H105 C-184	3043	ケンボ アケシ	C	A N56	1本組 貯水部 笠形部	割材	12分割	分割材の下部裏面に腐り割れ痕が認められている。右側縁中央には分節部分が見られる。	689 75	
図01	H-1628	3340	クリ	C	A N56	1本組 貯水部	丸木	分節	両面・左側縁に割れあり。両面左側縁付近に腐りによる腐り出しがある。右側縁は真っ直ぐに加工する。右側縁から下部にかけて斜めに割れられ、下部を尖らす。上部には笠形蓋とした腐り痕が見える。	282 52 31	丸割加工
図02	H150-2 C-1616	3285	クリ	C	A N56	1本組 貯水部	丸木	用途不明加工(補修?)	表面を腐り取り平直面を作り出す。裏面は芯部分を削り出す。両側縁下部斜めに削り出し。下部は真っ直ぐである。全体に丁寧な二次加工である。	263 72 34	丸割加工
図03	H1303 C-1788	3486	クリ	C	A N56	1本組 貯水部	丸木	技法先組加工(丸木 補修?)	全体に二次加工あり。断面三角形で、裏面の中央から下部の縁線と入り切る。	227 25 29	側面加工
図04	H135-6 C-1156	3265	ケンボ アケシ	C	A N55	1本組 貯水部	割材	分節	表面下部から下部にかけて腐りをいれて斜めに加工している。裏面上部にも腐り痕あり。	240 79 58	
図05	H1637 C-1708	3542	クリ	C	A N55	1本組 貯水部	丸木	16分割	両面は欠損している。二次加工なし。	115 25 17	
図06	H183 壁	3311	クリ	C	A N56	1本組 補修	丸木	芯持丸木	表面腐れあり。下部丸味を帯びる。上部破損。裏面一部欠損。	156 90 42	
図07	H1475 C-1858	3181	ワウシ	C	A N55	1本組 笠形部	柱目	柱目	上部全体に斜行によるツブレが見られる。また、裏面に斜行による腐りが見られる。上部や中が削れている。	205 69 24	
図08	H194 C-1439	3051	ワウシ	C	A N55	1本組	板目材	板目	深く削り取った板材で、表面の左右縁と斜めになり、中央は削り取られて窪み状である。裏面は平直で、上部に削り取り跡の縁線が残る。	796 296 46	
図09	H150-4 C-1796	3286	クリ	C	A N55	1本組	柱目	柱目	同一個体と思われるが割れなし。両面を削り出しで平直に仕上げている。裏面にごく浅い削り痕が見られる。上部は土庄により変形している。	(105)180- 63	
図010	H162-5 C-1621	3546	クリ	C	A N56	1本組	用途不明加工(補修?)	板目	木製の内部を削り取り、両側縁縁に緩やかに立ち上がり。両側縁は真っ直ぐに加工している。裏面は中央の縁線を残すように裏面左側のみ削り込まれている。	889 38 16	
図41	H200 C-1160	3100	クリ	C	A N56	1本組 貯水部 笠形部	丸木	芯持丸木	腹心の上部の高さをそろえ、下部を尖らせた形状。一辺削り取りをし、平直面を作り出す。	2332 288 190	A M S 記録 NWTAR9
図42	H215 C-1333	3346	クリ	C	A N56	1本組 貯水部 笠形部	半割材	芯持半割	上部がやや中がでこぼことした丸木の下部の一部を削り取り平直面を作り出す。上部はほぼ平直に保たれている。裏面中央付近に腐り出しと浅いこぼれが見られる。上部は切断跡の痕あり。芯持残存する。	2218 217 213	A M S 記録 NWTAR8
図41	H197-2 C-1806	3002	ニレ	C	A N56	1本組 板目	板目	板目	表面左側縁に削り取り痕?が2カ所見られる。裏面中央付近に削り取り痕あり。	840 203 217	
図42	H201 C-1109	3086	クリ	C	A N56	1本組 貯水部 笠形部	丸木	芯持丸木	丸木を5-6割削り取りして断面が丸形に仕上げられている。上部右側縁は大きく破損している。下部は表面が平直で欠損している。一箇所に全長20cm、幅3cm程度の凹みに加工されている。両側縁の下部及び裏面の縁線に削り取りの痕が見られるが状況は劣りすぎたと思われる。	1704 190 190	部材利用/金 腐削り
図43	H184 C-308	3083	コナラ 割材	B	A N56	1本組 貯水部 笠形部	丸木	芯持丸木	芯持とした丸木を5cm程度の平直面を両面に作り出す。二次加工なし。両側縁は中央を削り取り、下部はほぼ平直で、上部は断面が丸形に仕上げられている。下部はほぼ平直で、上部は断面が丸形に仕上げられている。下部には丸角が交差しているが、いずれも断面長方形に加工されており、何らかの部材であった可能性が高い。	1947 114 20	芯持して加工
図41	H191 C-1630-1	3048	クリ	C	A N56	1本組 貯水部	半割材	芯持半割	表面は上部を削り削りしている。これ以外の加工は見られない。	677 117 79	
図42	H192 C-332	3328	カエデ	B	A N55	1本組 貯水部 笠形部	丸木	丸木	丸木材を伐採したもので、裏面と上部に削り取りを平直にしている。両面は芯部分を削り取り残されている。	968 105 70	腐削加工
図43	H182 C-1475	3313	カエデ	B	A N55	1本組 貯水部 笠形部	丸木	丸木	丸木材を伐採したものの、上部は先が尖り、下部は平直に作り出される。	969 84 99	腐削加工
図44	H180 C-1331	3038	ハンノ キ	C	A N56	1本組 貯水部 笠形部	丸木	芯持丸木	下部は二次に削り取りがある。下部には両面から斜めに削られた跡があり、伐採時の腐削の可能性が高い。	161 34 35	腐削加工
図45	H182 C-1474	3312	キハダ	C	A N56	1本組 貯水部 笠形部	板目	板目	半割材で、両面・左側縁を真っ直ぐに加工する。裏面は削り取り跡の状態である。左側縁から下部にかけて丸味を帯びて削られている。裏面はほぼ平直に削り取られてはいる可能性がある。	1034 136 126	
図46	H14 C-1847	3128	ニラギ	C	A N56	1本組 貯水部	丸木	芯持丸木	丸木を5-6割削り取り、断面が丸形に仕上げられている。上部は断面が丸形に仕上げられている。下部はほぼ平直で、上部は断面が丸形に仕上げられている。下部には丸角が交差しているが、いずれも断面長方形に加工されており、何らかの部材であった可能性が高い。	531 230 113	金腐加工
図47	H187 C-1820	3016	オニゲ カ	C	A N56	1本組 板目	丸木	芯持丸木	分節材で両面に平直面を作り出す。上部は両側縁を斜めに削り、丸味を尖らす。	592 110 110	
図01	H214 C-219	3103	クリ	B	A N56	木製	丸木	芯持丸木	芯部分を削り取り、裏面は平直にする。裏面の下部は芯部分を削り取り、両側縁を削り取りしている。両側縁は削り取りによる形状のみである。上下部は両面とも平直で、上部には丸角が交差しているが、いずれも断面長方形に加工されており、何らかの部材であった可能性が高い。	2682 363 303	
図02	H100 C-2241	3025	クリ	B	A N56	木製	丸木	半割材	半割材(した後) 芯部分を削り、表面に削り取りの跡が残る。上部は切断跡の加工あり。	783 143 143	
図01	H141- ま3 C-1391	3191	板目材	C	A N57	板目材	板目材	芯持半割	削り出しで、上部は両側縁を平直に、下部はほぼ平直に削り取りされている。下部の断面は中央が膨らんだ形状である。上部及び下部は破損している。	383 61 34	
図02	H138-1 C-1595	3485	板目材	C	A N57	板目材	板目材	芯持半割	両面に平直面を作り出し、全体の形に削り取りを施している。下部の両側縁を斜めに削り取りしている。	305 57 26	
図03	H160-9 C-1592	3515	板目材	C	A N57	板目材	板目材	芯持半割	両側縁から下部にかけて丸味を帯び、平直面に削り取りされている。上部は破損している。断面は中央が膨らんだ形状である。表面には削り取り跡がある。	196 83 24	
図04	H180 C-1592	3033	板目材	C	A N57	板目材	板目材	芯持半割	丸木の柱で、両側縁を切断した削り取り跡が残る。表面は表面を削り取りしている。	873 195 30	
図05	H198-1 C-1041	3040	コナラ 割材	C	A N57	板目	板目	板目	板材の両側縁の上部・下部にかけて真っ直ぐに加工されている。下部には丸角の痕跡が見られるが、切断時の腐削である可能性が高い。両面は平直で、表面下部には削り取りの痕跡が見られる。	720 117 47	

岩盤小致 4 連跡 II

遺物番号	No	形状	素材	グリッド	遺物群	製造の時期	用途	形態・技法	全長 (mm)	備考
遺物41	H42 C-1673	3341	キリ	C	A N53	遺水状 遺物	板目	基本型 5mm程度の薄板で、削り出して長く仕上げている。縦線は中や厚く、ごく細く立ち上がるようである。反対側の縁が厚さ 1、2mm程度である。	825 159	
遺物42	H1674 C-1673	3534	キリ	C	A N53	遺水状 遺物	板目	41と同一と思われるが厚さしなかつた。上端は丸味を帯びている。両端を上向きに削り、左側縁をやや高く残している。裏面はほぼ平直で両端削りだけでつくられている。下端は縦線している。	164 70	
遺物43	H1661 C-1679	3536	コアラ 黒コアラ 片削	B	A O52	板目	剥離片	全体の形を整える行為に削りだしている。下端は尖らせてあり、削りの痕跡が残っている。下端は削りだによる意匠のツレが見られる。	278 38	
遺物44	H1661 C-1679	3535	クリ	C	A O52	遺水状 遺物	板目	下縁を斜めに削っている。裏面に削りだによる意匠あり。	226 39	
遺物45	H1661 C-1680	3537	キヤビ	C	A N53	板目	12分削	上端から削りだより、下端が歪んでいる。歪みによるヒドも見られる。	220 38	
遺物46	H16 C-893	3108	クリ	B	A O52	遺水状 遺物	半周削	方形の半厚材の裏面を半円状に削り、裏面は内部を削り、両端を平直に削っている。中心線付近に削りの痕跡 2カ所。3mm程度半周削りあり。	295 354 146	
遺物47	H176 C-1601	3007	ケンボ アレス	C	A N53	遺水状 遺物	板目	全面の上 1/3 は新削りだの行為で削りだあり。その他 2/3 は上端より 10mm程度で削りだである。両端左側縁と下端付近はさらに深く削りだしている。下端は斜めに削りだされたい。上端は縦線が見られる。	1368 90 50	
遺物48	H1444 C-1659	3273	クリ	C	A O52	板目	6分削	断面三角形で、中央部分は、削りだによって歪み残している。上端は丸味を帯び、一部尖り残りがあつた。削りだによる意匠も残っている。下端は尖り残りがあつた。	301 39 37	
遺物49	H197 C-1675	3036	クリ	C	A O53	板目	6分削	断面三角形の材料の上端から下向きに削りだの痕跡に削りだしている。削りだの上端削りだによるツレ、歪みしている箇所も見られる。下端にはツレがほとんど残っていない。	500 137	A M S 2期 PHATARI1
遺物50	H1575 C-1580	3292	クリ	C	A O52	板目	板目	左側縁を上端から下向きに削りだしている。下縁を尖らす。削りだによる意匠が見られる。	308 34 22	
遺物51	H1425 C-1801-2	3484	クリ	C	A O52	板目	板目	断面三角形で、角の部分を削りだしている。下端から下向きにかけて全体削り、両端を尖らす。裏面には削り痕跡あり。	152 28 28	
遺物52	H182 C-1546	3315	クリ	C	A N53	遺水状 遺物	板目	削りだにより断面が変形五角形である。裏面には縦線が見られる。下縁は完全に削りだされている。両端は尖り残りの形状である。上端は中央部分に削りだあり、削りだによるツレも見られる。	725 104 53	
遺物53	H189 C-1655	3348	コアラ 黒コアラ 片削	C	A O52	遺水状 遺物	板目	上端に削りだによるツレあり。上端裏面に削りだの痕跡が見られる。下端は両端縁を斜めに削りだして両端を尖らす。	580 50 50	
遺物54	H209 C-1221	3091	コアラ 黒コアラ 片削	B	A N54	板目	板目	一部凹削材。裏面は下縁直上、上端は削りだがある。裏面は平直加工され、1131から上端にかけて削りだあり。	1131 39 192	
遺物55	H201 C-899	3087	クリ	B	A N53	板目	丸木材	断面が丸味を帯びて板目に加工する。上端は右側部分を削りだし、見る左側の丸味を残して削りだしている。全面平直加工による意匠が見られる。裏面は断面がほぼ平直で削りだされている。両端は削りだの痕跡がほとんど残っていない。	1793 292 1572	
遺物56	H211 C-705	3088	クリ	A	A N53	板目	板目	両端とも平直に削りだしている。下縁を斜めに削りだしている。上端は下縁とほぼ平行に削りだされている。両端は削りだの痕跡がほとんど残っていない。	1174 96	
遺物57	H212 C-1361	3090	クリ	B	A N53	板目	板目	断面が丸味を帯びて削りだしたもので、この部分が削りだされている。裏面には削りだの痕跡が見られる。裏面は削りだの痕跡がほとんど残っていない。上端は下縁とほぼ平行に削りだされている。上端は下縁とほぼ平行に削りだされている。上端は下縁とほぼ平行に削りだされている。上端は下縁とほぼ平行に削りだされている。	1126 104	奥面 (裏面) A M S 2期 PHATARI1
遺物58	H18 C-1678	-	クリ	C	-	遺水状 遺物	板目	両端・両側縁は長方形、上端の両側縁は削りだされている。両端は削りだの痕跡がほとんど残っていない。上端は削りだの痕跡がほとんど残っていない。上端は削りだの痕跡がほとんど残っていない。上端は削りだの痕跡がほとんど残っていない。	146 29	破損の可能性あり?
遺物59	H18 C-1677	3127	ケンボ アレス	C	A N53	板目	3分削 (厚部)	上端から上端にかけて丸味を帯びる。下端は尖り残りの形状で削りだされている。下端は削りだの痕跡がほとんど残っていない。上端は削りだの痕跡がほとんど残っていない。	324 62 54	
遺物60	H18 C-1674	3123	クリ	C	A O53	板目	板目	上端左側縁に削りだによる意匠 1箇所あり。	305 36 16	変色 →酸付
遺物61	H182 C-1715	3319	コアラ 黒コアラ 片削	C	A N53	板目	板目	全体の形状、下縁に削りだによる意匠が見られる。	222 40 38	
遺物62	H1493 C-1544	3186	クリ	C	A O52	遺水状 遺物	板目	幅 7cm の板であるが、上端から下向きに削りだされている。両端とも縦線している。	96 72 22	割裂片?
遺物63	H10 C-1532	3371	クリ	C	A N53	遺水状 遺物	両端削	両端削りだの痕跡がほとんど残っていない。両端は削りだの痕跡がほとんど残っていない。両端は削りだの痕跡がほとんど残っていない。両端は削りだの痕跡がほとんど残っていない。	257 265 138	

遺構外出土木質遺物

遺物番号	No	形状	素材	グリッド	遺物群	製造の時期	用途	形態・技法	全長 (mm)	備考
遺物64	C-406	3140	コアラ 黒コアラ 片削	B	A N54	板目	剥離片	断面が三角形に削りだされ、下方から下向きにかけて先尖り形状で、両端が縦線している。中央部をやや変形している。上端は削りだの痕跡がほとんど残っていない。中央部は削りだの痕跡がほとんど残っていない。中央部は削りだの痕跡がほとんど残っていない。中央部は削りだの痕跡がほとんど残っていない。	681 370 493	
遺物65	C-1986	3010	コアラ 黒コアラ 片削	C	A N57	板目	剥離片	上端は縦線している。両端は削りだの痕跡がほとんど残っていない。上端は削りだの痕跡がほとんど残っていない。上端は削りだの痕跡がほとんど残っていない。上端は削りだの痕跡がほとんど残っていない。	652 34	
遺物66	H1669 C-462	3384	コアラ 黒コアラ 片削	C	A N53	板目	剥離片	元は削りだと思われるが、縦線 7 のため、裏面が半分欠損している。下縁は両端・両側縁から削りだされている。上端から上端は削りだの痕跡が見られる。	187 40 30	板目材の可能性あり
遺物67	H1241 C-462	3553	アレス	B	A N55	板目	剥離片	削りだして全体を丸く加工する。断面下部に縦線あり。下方は全体削り、下縁をやや中削り。	187 21 20	
遺物68	H196 C-474	3006	コアラ 黒コアラ 片削	B	A N54	板目	剥離片	へら削り残りの未製型。へら削りによる両端平直で、断面は長方形で、下端から下向きにかけて先尖り形状。他の部分は断面削りだの痕跡が見られる。	1270 49 59	
遺物69	H196 C-236	3012	コアラ 黒コアラ 片削	B	A N57	板目	剥離片	断面はほぼ長方形で、裏面が上向きに大きく縦線している。下縁もわずかに縦線している。	438 31 31	
遺物70	H195 C-1362	3387	コアラ 黒コアラ 片削	B	A N53	板目	剥離片	へら削り残りの未製型。上端は縦線と横線が削りだされている。下縁は大きく欠損している。左側縁の一部は未削りだの痕跡により上端から先尖り形状で見られる。	425 34	
遺物71	H212 C-1511	3063	コアラ 黒コアラ 片削	B	A N53	板目	剥離片	へら削り残りの未製型。上端は平直削りだの痕跡がほとんど残っていない。両端縁と両側縁で中や厚みがある。断面はほぼ平直である。両端縁は削りだの痕跡がほとんど残っていない。下縁は削りだの痕跡がほとんど残っていない。	210 38	
遺物72	H1363 C-215	3255	コアラ 黒コアラ 片削	B	A N56	板目	板目	全体の平直で、下向きに加工あり。両端縁は削りだしている。断面は両端縁で縦線し、両端にかけて丸味を帯びる。裏面には斜めに縦線あり。	441 60 20	縦線

遺物番号	No	名称	単位	グループ	遺物構成成分	加工の種類、形状等	形態・技法	全長(mm) 幅(mm) 高さ(mm)	備考
図53	H1112 C-265	3217	オニギル	B	A N56	磁柱木製品	楕円	645 76 29	
図54	H221 C-366	3053	ヤウラ	C	A N55	磁柱木	磁柱木製品	157 157 29	
図56-1	C-642	-	ヤウラ	B	A N55	磁柱木	磁柱木製品	205 104 29	鉄製蓋あり
図56-2	H221 C-366	3053	カズガ	A	A N53	磁柱木	磁柱木製品	264-120 157-85 49-20	楕円状楕円
図57-1	C-1230	3603	ヤウラ	B	A N54	磁柱木	磁柱木製品	115 115 (31)	赤漆塗り
図57-2	H221 C-1762	3058	ヤウラ	C	A N53	磁柱木	磁柱木製品	154 154 19	内外面漆塗り
図57-3	C-1543	-	クリ	C	A N54	漆柱	磁柱木	170 115 30	内外面漆塗り
図58-1	-	-	クリ	C	A O52	漆	不明	104 104 10	横径191x6mm 赤漆塗り
図58-2	-	-	クリ	C	A O52	漆	不明	116 126 6	横径191x6mm 赤漆塗り、内面に黒漆塗り
図58-3	-	-	クリ	C	A O52	漆	不明	89 49 4	赤漆塗り
図59-1	C-1095-1139	-	ヤウラ	B	A N54	磁柱木	磁柱木製品	142 129 29	
図59-2	C-1586	3073	ウルシ	C	A N55	磁柱木	磁柱木製品	340 148 30	
図59-3	C-1293	3073	ウルシ	C	A N55	磁柱木	磁柱木製品	375 148 30	裏面に刺突あり
図60-1	C-1371	3606	モクレン	B	A N53	用漆不漆木製品(楕円)	楕円	700 115 22	
図60-2	C-1285	3609	コノハ	C	A N53	用漆不漆木製品	楕円	739 115 61	
図60-3	C-1217-3610	3608 3610	ウルシ	B	A N54	用漆不漆木製品	楕円	816 115 (106)	
図60-4	H218 C-1740	3071	ケヤキ	C	A N56	用漆不漆木製品(楕円)	楕円	334 112 112	
図60-5	H221 C-206	3052	ハリギリ	B	A N56	用漆不漆木製品(楕円)	楕円	138 94 23	
図60-6	H221 C-429	3054	ウルシ	B	A N57	用漆不漆木製品(楕円)	楕円	109 59 25	
図60-7	C-1603	-	クリ	C	A N56	用漆不漆木製品(楕円)	楕円	169 96 26	
図60-8	H56 C-214	3164	クリ	B	A N57	用漆不漆木製品(楕円)	楕円	620 121 65	
図60-9	H2212 C-1399	3061	ヤウラ	C	A N57	用漆不漆木製品(楕円)	楕円	140 79 29	
図60-10	C-373	3607	ヤウラ	B	A N57	用漆不漆木製品(楕円)	楕円	247 60 26	
図60-11	H99-6 C-1136	3036	ニシキ	C	A N57	用漆不漆木製品(楕円)	楕円	304 62 26	
図60-12	H2212 C-1399	3060	アスロ	B	A O53	用漆不漆木製品(楕円)	楕円	72 19 19	
図60-13	H2212 C-1399	3065	アスロ	C	不明	不明	楕円	41 20 5	楕円より裏面とくに彫刻
図60-14	H2212 C-1399	3066	アスロ	C	不明	不明	楕円	197 7 5	
図60-15	H167 C-175	3068	ヤウラ	B	A N53	用漆不漆木製品(楕円)	楕円	66 6 6	
図60-16	H167 C-175	3068	ヤウラ	B	A N54	用漆不漆木製品(楕円)	楕円	268 24 24	
図60-17	C-1839	3069	ヤウラ	C	A N55	用漆不漆木製品(楕円)	楕円	234 12 12	
図60-18	H13910 C-1461	3254	ウルシ	C	A N55	用漆不漆木製品(楕円)	楕円	273 148 24	
図60-19	H1102	3459	クリ	B	A N56	用漆不漆木製品(楕円)	楕円	358 115 32	

建物番号	No	階種	部材	グリッド	構造体位置	部材の種類、配筋状況		形態・技法	全量 (mm) 補修量	備考
図549	H133.0 C-1147	3476	オニブ 丸瓦	C	A N S7	両面天端大 鋼筋(縦筋)	柱目	全面二次加工あり、両面は塩ビで覆われ、表面は上層から上部にかけて剥りが入る。両側縁は丸瓦を葺いてあり、裏面は工具痕が見られる。下層は破壊している。	132 41	
図551	H02.16 C-732	3434	クワ	A	O S3	角材	芯部	二次加工あり、剥り取り時の継ぎ継ぎする。	109 40 29	劣損状況
図552	H1101 B-Vバル ト-3	3465	オニブ 丸瓦	C	A N S6	角材	芯部	新築台座で、全体に二次加工あり、裏面は平準に作り出す。工具の削り履あり。	102 27 29	
図553	H1291 C-1347	3244	半ハダ	B	A N S3	角材	6分割	左側縁を真っ直ぐに加工する。剥り取り時の継ぎ継ぎする。上部に削りの痕跡あり。	120 42 39	
図554	H1642 C-155	3521	クワ	B	A N S5	角材	芯部	二次加工なし。剥り取り時の継ぎ継ぎする。	125 60 46	
図555	H1307 C-1626	3253	-	C	A N S6	角材	芯部	全面二次加工あり、表面は右側に剥り取り時の継ぎ継ぎあり。これを境に削りが入る。裏面は平準に作り出す。上部は両側縁を削り、先端が尖った形状である。下層は剥り履が残存する。	176 73 29	
図556	H1438 C-1750	3280	オニブ 丸瓦	C	A N S3	角材	芯部	表面は平準で、両側縁は真っ直ぐに加工されている。表面の右側下部は斜めに削り出している。上部は削りが入る。	445 30 26	
図557	H35 C-1555	3388	クワ	C	A N S7	角材	柱目	分割時の両側縁を真っ直ぐに加工される。上部縁に削り履が残っている部分が残存し、剥離して両端が見られる。表面は右側部分があり、裏面に斜めに削り履が残存している。	159 55 31	劣損あり
図558	H185 C-2045	3246	コナラ 丸コナ ラ瓦	B	A N S6	角材	芯部	ほぼ完成。削り取り加工済。上部は斜めに削り出す。上部は新築正形に削り履が残存している。下部についてやや斜めに削り履が残存する。右側コナラと下部コナラ1枚の違いは僅かである。	745 30 58	
図559	H07.10 C-1197	3428	クワ	C	A N S4	棟状加工材	芯部	全体に平準。左側縁、上部は新築正形に近いが、下部については平準になる。右側縁から裏面に削り取り加工痕が残存している。	283 27 27	
図560	H159.9	3491	クワ	C	A N S6	棟状加工材	芯部	削り出して新築を平準状に作り出す。裏面は平準。両側縁はやや丸瓦を葺ける。全体に平準で丁寧な二次加工である。	55 31 7	
図561	H194 C-1463	3050	ケンボ ナシ瓦	B	A N S3	棟状加工材	芯部	分割時の両側縁を真っ直ぐに加工される。表面は分割材のままで、表面下部は平準に削り出す。裏面は平準に削り履が残存している。下部は平準に削り履が残存している。	853 66 59	
図564	H152.6 C-1736	3199	コナラ 丸コナ ラ瓦	C	A N S3	棟状加工材	芯部	新築正形に削り、裏面下部と上部右側縁に割込みがある。使用による割れと見られる。	323 28 29	
図565	H118.14	3222	単子葉 植物	C	A N S6	棟状加工材	芯部	上部は新築正形、下部は新築三角形である。全体に削りだし、丸瓦を葺ける。	89-50 43 35	棟状木製部
図566	H76.5 C-1004	3424	ノリウ ソウ	C	A N S7	棟状加工材	芯部	新材を削り出して新築正形に加工している。全体に平準である。両側縁は破壊したと思われる。	176 48 8	棟状木製部
図567	H149.6 C-1570	3185	クワ	C	A N S3	棟状加工材	芯部	削り出して新築を平準状にする。表面部は加工は平準である。	48 28 26	
図568	H7 C-1547	3362	クワ	C	A N S3	棟状加工材	芯部	丸瓦の本巻縁を削り取り、平準面を4層作り出す。下部は右側縁から斜めに削り履が残存している。全体に二次加工あり、削り取りの痕跡が見られる。上部に削りあり。	256 117 113	劣損状況
図569	H76.3 C-1253	3176	クワ	C	A N S7	棟状加工材	分割	全体に削り取り時の継ぎ継ぎする。削り履も見られる。	270/457 30 20	
図570	H02.12 C-722	3433	クワ	A	A N S3	柱状先削加工 工材(角材)	芯部	上半は新築正形だが、表面下部から下部にかけては削りが入り新築三角形になる。	170 30	劣損状況
図571	H76.6 B-Vバル ト	3425	クワ	C	A N S6	柱状先削加工 工材(角材)	芯部	全体に平準で、丁寧な二次加工あり。新築正形に削り、分割材を削り出したものと同く見られる。上部は切断したと思われる。削り履あり。表面に削り履あり。両側縁はやや丸瓦を葺ける。削り取り時の高まりもあつたと思われる。	214 45 24	
図573	H91.10 C-465	3427	ケンボ ナシ瓦	B	A N S7	柱状先削加工 工材(角材)	芯部	削り出した部分を一帯を削り取られる。上部は両側縁を削り、丸瓦がやや丸い。下部から下部にかけては両側縁を削り丸瓦が。全体に二次加工あり。裏面は丸瓦が葺ける。削り取り時の高まりもあつたことから、加工中と思われる。表面中央は深く削り入る。	210/95 37 29	劣損あり
図574	H57.75	3416	クワ	B	A N S7	柱状先削加工 工材(角材)	芯部	上部は新築正形に削り履が残存し、下部で新築正形に削り履が残存し、全体に削り取り時の継ぎ継ぎする。下部は両側縁から斜めに削り丸瓦を葺ける。	439 40 29	劣損状況
図575	H98.12 C-1201	3195	クワ	C	A N S4	柱状先削加工 工材(角材)	芯部	全体に平準で丁寧な二次加工あり。下部から下部にかけては全体を削り出す。上部の右側縁は斜めに加工されている。	400 42	劣損状況
図576	H125 C-707	3026	クワ	B	A N S4	柱状先削加工 工材(角材)	芯部	上部両側縁を中心に裏面に劣化している。裏面中央に工具による切り込みが両方にも見出すで見られる。右側にも劣化は仕上げられている。裏面の切り込みは、高まりが両側縁に残存している。	776 75 29	劣損状況
図577	H11 C-1174	3372	コナラ 丸コナ ラ瓦	C	O S3	柱状先削加工 工材(角材)	芯部	平準時の両側縁を削り出したもの。芯部には削り履なし。上部は削り履を残したものである。上部は斜めに削り履が残存する。	731 95 26	
図578	H192 C-1560	3326	クワ	C	A N S7	柱状先削加工 工材(角材)	芯部	上部は新築正形に削り、下部は方形に削り履が残存する。両側縁中央に削り履あり。左側縁中央から下部に右が1枚を削り履を留める。	590 46 29	
図579	H66 C-1126	3404	クワ	C	A N S7	柱状先削加工 工材(角材)	芯部	両面・両側縁を丁寧に加工し新築角材にする。下部10cm削り履が剥り、下部内側に削り履を留める。上部は破壊している。	712 48 48	
図580	H51 C-1536	3367	クワ	C	A N S3	柱状先削加工 工材(角材)	芯部	両面・右側縁平準。左側縁をやや斜めに加工される。両端丸みを葺ける。	219 28 14	
図581	H5 C-1461	3383	クワ	B	A N S3	柱状先削加工 工材(角材)	芯部	全体に丸瓦を葺き、丁寧な二次加工あり。両側縁の上部は削り履が残存して斜めに削られる。上部はへう状で丸瓦を葺ける。左側縁の上部はのりまき葺きし、ゆるやかに変形がみられる。	327 60 21	へう状葺きか?
図582	H159.9 C-1150	3465	半ハダ	C	A N S7	柱状先削加工 工材(角目材)	柱目	表面右側中央・下部にかけて大きく削り履が残存している。左側縁に浅い剥りあり。	426 57 30	
図583	H119.9 C-1150	3465	半ハダ	C	A N S7	柱状先削加工 工材(角目材)	柱目	全体に二次加工あり、両面を削り履が残存して削り履を留める。両側縁を真っ直ぐに加工する。左側縁、	117 54 31	表面劣化
図584	H67 C-487	3405	クワ	C	O S2	柱状先削加工 工材(角目材)	柱目	二次加工あり、両面を平準にする。左側縁を真っ直ぐに加工する。表面は両側縁の部に斜めに削り履が残存し、裏面には削り取り時の継ぎ継ぎあり。左側縁のくぼみ(窪み)あり。	82 59	
図585	H175 C-708	3034	コナラ 丸コナ ラ瓦	C	A N S3	柱状先削加工 工材(角目材)	柱目	分割材を全体に削り加工している。上部は両面に平準面を持ち、下部は先削り履が残存している。この両側縁が平準である。状況による劣損もあつたと思われる。	1133 56 46	
図586	H128.4 C-1305	3227	クワ	C	A N S7	柱状先削加工 工材(角目材)	柱目	下部の両側縁を斜めに削り、下部内側に削り履を留める。両側縁中央に削り履が入る。全体に平準で、丁寧な二次加工が見られる。裏面は削り履を留めるように削り履が入る。	225 29	劣損状況

遺物番号	No	形状	素材	グランド	遺物構成状況	製造の時期・使用時期	形態・技法	全長(mm) 幅 高さ	備考	
遺02	H118-3 C-576	321	ク	Ⅱ	A N56	後鉄先追加工材(梃目材)	梃目	下部から下端にかけて先端を尖らす。上部は破壊。二次加工なし。	135 46 75	先頭酸化
遺03	H93-1 矢ノ丸上	346	ク	Ⅱ	A N57	後鉄先追加工材(梃目材)	梃目	表面・右側縁に二次加工あり。上部左側縁斜めに削り落とす。	119 20 15	先頭酸化
遺04	H1515 C-181	3184	ニガキ	Ⅱ	A N56	後鉄先追加工材(梃目材)	梃目	表面は平手で二次加工あり。右側縁・裏面は削り取り残る。下部両側縁斜めに削り。下部は尖らす。	169 48 48	先頭酸化
遺05	H50 C-925	3410	ク	Ⅱ	A N56	後鉄先追加工材(梃目材)	梃目	表面は平手で、両側縁は真っ直ぐに加工された全体で平手である。表面は削り取り残あり。上部は削り落とす。下部から下端にかけて削りの痕跡あり。	541 121 46	先頭酸化
遺06	H37 C-1546	3391	ク	Ⅱ	A O52	後鉄先追加工材(梃目材)	梃目	梃目に削り取られたもので、上部は破壊している。下部につれて鋭くなっている。	596 83 34	
遺07	H35 C-921	3382	ク	Ⅱ	A N55	後鉄先追加工材(梃目材)	梃目	表面は平手に作り出され、裏面は上部から中央にかけて7箇所削り取りあり。両側縁下部から下端が削られ、先が尖る。	580 68 17	
遺08	H96-2 C-643	3440	ク	Ⅱ	A N55	後鉄先追加工材(梃目材)	梃目	分断線、全面に二次加工あり。下部両側を著しく削っている。上部には削りあり。	789 47 26	
遺09	H15 C-1173	3376	コナラ 黒コナ ラ野	Ⅱ	A O53	後鉄先追加工材(梃目材)	梃目	1174:同木?芯部分を一部削し、裏面を削り取る。削り取り後の状態なし。下部両側縁斜めに削り落とされる。上部は比較的斜めに削り落とされる。	759 75 83	
遺10	H12 C-1336	3374	ク	Ⅱ	A N56	後鉄先追加工材(梃目材)	梃目	表面に削り取り時の線跡残存する。表面左側縁斜めに削り取り残である。二次加工あり。上部左側縁斜めに削り取りあり。下部縁部が左側縁下部は斜めに削り出される。	352 37 31	
遺13	H22 C-721	3116	ク	Ⅱ	A N54	後鉄先追加工材(梃目材)	梃目	下部両側縁・表面を削り先端を尖らす。両面に削り取り時の線跡残存。	270 68 23	
遺14	H105-2 矢ノ丸上	3466	ク	Ⅱ	A N54	後鉄先追加工材(梃目材)	梃目	表面及び両側縁は平手に作り出される。表面左側縁部分は削り取られている。裏面には平手で残る部分があり、表面左側縁斜めに削り出される。	199 33 33	
遺15	H133-9 C-1364-2	3475	ク	Ⅱ	A N53	後鉄先追加工材(梃目材)	梃目	両面平手で、裏面下部は破壊している。上部はほぼ断片あり。下部から下端にかけては先が尖る。	122 46 14	
遺16	H91-3 C-748	3435	ク	Ⅱ	A N56	後鉄先追加工材(梃目材)	梃目	二次加工なし。表面に工具痕のようなものがあるが不顕。左側縁下部から下端にかけては先が尖る。	113 39 17	
遺17	H119-1 C-476	3462	力エゾ 属	Ⅱ	A N56	後鉄先追加工材(梃目材)	梃目	表面は平手で、裏面はほぼ断片。右側縁は下平から下端に向かい尖る。	242 48 14	
遺18	H140-3 C-173	3482	ク	Ⅱ	A N54	後鉄先追加工材(梃目材)	梃目	右側縁を真っ直ぐに加工する。裏面をほぼ平手で磨く。下部左側縁から中央にかけて斜めに削られる。裏面に左側縁が鋭く残る。	177 76 37	線跡残存
遺19	H22 C-1298	3112	力エゾ 属	Ⅱ	A N56	後鉄先追加工材(梃目材)	梃目	上部に削り屑。下部両側縁から斜めに削られ、下端を尖らす。表面中央付近に凹みあり。	487 63 32	線跡付着
遺21	H106-2 C-1446	3452	ク	Ⅱ	A N57	後鉄先追加工材(梃目材)	分断	削り取りにより、断面長方形形状になる。右側縁はほぼ断片だが、右側縁はほぼ真っ直ぐに加工する。裏面はほぼ削り取りにより中央部が広くぼんぼん削り落とす。上部は尖ったまま残る。	281 71 51	表面酸化
遺22	H159-1 矢ノ丸上	3480	ク	Ⅱ	A N55	後鉄先追加工材(梃目材)	分断	全体に二次加工あり。削り取り時の線跡残存する。両側縁下部斜めに削り取りを尖らす。工具痕残存。	214 51 51	先頭酸化
遺23	H142-4 矢ノ丸上	3496	ク	Ⅱ	A O56	後鉄先追加工材(梃目材)	分断	削り取り時の線跡残存する。下部は表面と両側縁を削って先端を尖らす。上部はほぼ断片あり。	157 44 34	先頭酸化
遺24	H101-7 C-525	3449	ク	Ⅱ	A N56	後鉄先追加工材(梃目材)	分断	全面に削り取り時の線跡残存する。右側縁は真っ直ぐに加工される。下部は下平から下端のみに削り出す。全体に平手である。	148 63 23	先頭酸化
遺25	H137-5 C-1273	3530	フナボ テシ属	Ⅱ	A N55	後鉄先追加工材(梃目材)	分断	両面に削り取り時の線跡残存。両面下部から下端にかけて削りあり。	204 51 23	先頭酸化
遺26	H140-7 C-301	3487	ク	Ⅱ	A N56	後鉄先追加工材(梃目材)	分断	全面に削り取りが入り、角材に加工している。上部は破壊している。下部は右側縁斜めに削り落とされている。	243 42 27	先頭酸化
遺27	H99 C-857	3153	ク	Ⅱ	A N53	後鉄先追加工材(梃目材)	分断	全体に平手で、二次加工あり。表面左側縁部分が大きく削り取られ、上部は断面長方形に薄く削られている。両面下部に削りあり。	495 59 57	先頭酸化
遺28	H64 C-466-4	3398	ク	Ⅱ	A N56	後鉄先追加工材(梃目材)	分断	両側縁上部斜めに削り取り?表面に二次加工あり。	147 49 46	先頭酸化
遺29	H92 C-232	3162	ク	Ⅱ	A N57	後鉄先追加工材(梃目材)	分断	削り取り前に炭化?二次加工なし。削り取り時の形状をそのまま利用?	239 58 42	先頭酸化
遺30	H38 C-1771	3135	ク	Ⅱ	A N56	後鉄先追加工材(梃目材)	分断	削り取りによる線跡あり。二次加工なし。下部は若干曲線しているが、炭化より削り取り跡不顕。断面の形状をそのまま利用?	254 70 48	炭化あり
遺31	H92-3 C-632	3431	ク	Ⅱ	A N55	後鉄先追加工材(梃目材)	分断	下部から下端にかけて尖らす。裏面に二次加工あり。上部には削りあり。	198 52 31	先頭酸化
遺32	H134-2 C-316	3233	ク	Ⅱ	A N56	後鉄先追加工材(梃目材)	分断	右側縁は真っ直ぐに加工する。表面右側縁中心に尖る。上部は炭化により段状に削られる。左側縁下部は斜めに削られる。	418 42 20	先頭酸化
遺33	H168-3 C-1718	3529	ク	Ⅱ	A N56	後鉄先追加工材(梃目材)	分断	断面は長方形に近いが、表面右側縁を削り取りしている。上部に削り取りによる段状に削られている。右側縁から下部にかけて炭化している。下部は表面を削り取り後に加工してある。表面は削り取り時の線跡残存。	277 68 48	
遺34	H76-1 C-1310	3423	トネズ ム属	Ⅱ	A N56	後鉄先追加工材(梃目材)	分断	断面形状で表面は平手。丁寧な二次加工あり。表面上部から上部は斜めに削られる。	324 29 28	
遺35	H173-6 C-2567	3507	ク	Ⅱ	A N56	後鉄先追加工材(梃目材)	分断	削り取り時の線跡残存する。下部は表面を削り、先端を尖らす。上部尖鋭。	280 40 33	
遺36	H156-3 C-1528	3500	ク	Ⅱ	A N53	後鉄先追加工材(梃目材)	梃目	削り取りにより幅5mm程度の幅に加工した後、右側縁下部斜めに削り、上部を尖らせている。右側縁上部に若干のぼんぼん削り込み?残存あり。下部は表面を削り取り後に加工してある。表面は削り取り時の線跡残存。	339 51 33	
遺37	H119-1 C-576	3483	オニヅ ル属	Ⅱ	A N56	後鉄先追加工材(梃目材)	梃目	下部の先端が削られ尖る。	219 51 39	先頭酸化
遺38	H141-2 C-1768	3288	ク	Ⅱ	A N56	後鉄先追加工材(梃目材)	分断	二次加工全体にあり。削り取り時の線跡表面に残存する。下部は削り取られ、上部は破壊している。	204 34 34	先頭酸化

岩盤小致4 通路Ⅱ

通路番号	No	形状	断面	グリッド	通路構造 状況	掘削の状況、 掘削工事		形態・技法	全長 (mm)	備考
第07	H172-5 C-137	3506	クリ	B	A N 57	柱状先削加工 工機(新機)	分割	掘り取り掘り。下部は巻面を削り、先を尖らす。	150 46	先端酸化
第08	H1322 C-1190	3473	クリ	C	A O 52	柱状先削加工 工機(新機)	分割	全体二次加工あり、巻面下部に削り面が見られる。下部は丸角を帯びて削られる。	150 47	先端酸化
第09	H1187	3219	クリ	C	A N 56	柱状先削加工 工機(新機)	分割	全体に二次加工あり、断面三角形あり、上部は削り出しで扁平である。下部は先端が鋭くなっている。	205 46	先端酸化
第10	H52 C-400	3413	クリ	B	A N 54	柱状先削加工 工機(新機)	分割	分割の下部を削り取って下部を尖削りさせている。断面は上部で矩形だが、下部では丸角となる。断面中央付近の巻面が掘りよみがあると思われる。また、寸法公差のよみは長さ±1mm程度の精度が保たれている。	1238 82	標準?
第31	H13412 C-311	3238	クリ	B	A N 56	柱状先削加工 工機(新機)	分割	下部先端を尖らす。巻面は全体に平準で二次加工あり、巻面上部に工具による傷あり。	154 48	先端酸化
第32	H110 実Vヘル ト-1	3453	クリ	C	A N 56	柱状先削加工 工機(新機)	分割	右側面に削りあり、このほかの二次加工は不明。	223 51	先端酸化
第33	H1023 C-1264	3206	クリ	C	A N 57	柱状先削加工 工機(新機)	分割	上部から下部にかけて巻面を削り出して断面長方形に削り、下部は巻面を斜めに削り、先端を尖らす。	204 47	先端酸化
第34	H9 C-1644	3360	クリ	C	A N 57	柱状先削加工 工機(新機)	分割	全体に二次加工あり、右側面に工具痕跡多数あり、下部から下部にかけて全体と削り。	203 56	先端酸化
第35	H1692 C-1569	3533	クリ	C	A N 55	柱状先削加工 工機(新機)	分割	断面三角形状で、全体に平準、丁寧な二次加工あり、下部は断面右側面に削り先端を尖らす。巻面上部は断面は若干欠損しているが、全体としては鋭くなる。	342 82	先端酸化
第36	H1585 C-1560	3300	クリ	C	A N 57	柱状先削加工 工機(新機)	分割	分割の下部を削り取って下部を尖削りさせている。断面は上部で矩形だが、下部では丸角となる。断面中央付近の巻面が掘りよみがあると思われる。また、寸法公差のよみは長さ±1mm程度の精度が保たれている。	278 56	先端酸化
第37	H1193 C-1421	3484	クリ	B	A N 53	柱状先削加工 工機(新機)	分割	下部巻面は二次加工の可能性あり。	181 27	
第38	H916 C-869	3436	ニガキ	B	A N 54	柱状先削加工 工機(新機)	分割	下部右側面を斜めに削っている。右側面は平準で、巻面のようなものが重畳している。	137 22	
第39	H51 C-719	3356	クリ	A	A N 53	柱状先削加工 工機(新機)	分割	巻面に削り取り時の線状痕跡を有する。左側面下部から下部にかけて斜めに削り出される。	275 24	
第39-10	H1404 C-199	3483	クリ	B	A N 56	柱状先削加工 工機(新機)	16分節	全体に平準で、二次加工あり。削り取りにより生じた線状痕跡は、また、正3角断面を中心とした工具痕による削りあり。上部は巻面に向かって斜めに削り落とす。	373 56	
第39-11	H9 C-1256	3398	クリ	C	A N 57	柱状先削加工 工機(新機)	分割	二次加工あり、断面に削り取り時の線状痕跡を有する。巻面は平準で、下部は尖らす。	274 24	
第39-12	H963 C-235	3441	クリ	B	A N 57	柱状先削加工 工機(新機)	分割	全体に平準で、丁寧な二次加工あり、中央付近が大きく欠損している。右側面は真っ直ぐに加工される。巻面は削り取り時の線状痕跡を有する。下部は左側面に削りあり。	167 30	
第39-13	H1101 実Vヘル ト-5	3458	クリ	C	A N 56	柱状先削加工 工機(新機)	分割	全体に二次加工あり、断面に削り取り時の線状痕跡を有する。右側面下部から下部にかけて斜めに削りあり。	242 36	
第39-14	H1101 実Vヘル ト-5	3457	ニガキ	C	A N 56	柱状先削加工 工機(新機)	3分節(巻 形)	巻面の残存状態良好し、断面に削り取り時の線状痕跡を有する。左側面は下部に向かって斜めに削り出される。	263 50	
第41	H50 C-924	3412	クリ	C	不明	柱状先削加工 工機(新機)	分割	断面の巻面上部と下部断面を削り出している。上部は右側面に下部にかけて斜めに削り、下部は巻面から削り出す。全体に二次加工あり。断面は削り取り時。	727 65	
第42	H20 C-1721	3381	クリ	C	A O 52	柱状先削加工 工機(新機)	8分節	断面左側面に傾きから丸角の痕跡あり。上部から中央付近に断面三角形あり、下部は断面長方形に削り、両端は鋭いものが上部から上部にかけては斜めに削り出される。	716 91	酸化あり
第43	H53 C-1462	3180	クリ	B	A N 53	柱状先削加工 工機(新機)	分割	二次加工あり、全体に丸角を帯びている。下部は両側面から斜めに削り落とすし、先端を尖らす。上部は分節で削り落とされている。	663 82	
第44	H63 C-1175	3421	クリ	B	A O 52	柱状先削加工 工機(新機)	分割	二次加工あり、巻面は平準、巻面に削り取り時の線状痕跡を有する。巻面下部は平準に加工される。巻面は両側面に二次加工あり。	589 61	
第45	H63 C-1368	3422	コナ 鋼コナ 劣節	B	A O 53	柱状先削加工 工機(新機)	6分節	断面右側面を尖らす除去している。左側面は真っ直ぐに加工される。右側面下部から下部に削りあり。	367 42	
第46	H22210 C-1774	3512	アスタ ル	C	A N 53	柱状先削加工 工機(新機)	分割	全体に削り取りあり、巻面と上部に線状痕跡。上部は削り出しによる断面も見られる。下部は両側面から削り落とされる。	129 15	
第47	H9132 C-500	3438	クリ	B	A N 57	柱状先削加工 工機(新機)	16分節	削り取り時の線状痕跡を有する。巻面上部に削りあり、巻面は酸化、両側面及び巻面下部に削り先端に向けて尖らす。	174 39	酸化あり
第48	H1191 C-978	3461	クリ	C	A N 57	柱状先削加工 工機(新機)	分割	削り取り時の線状痕跡を有する。二次加工の有無は不明だが、左側面下部に削りあり。	208 55	先端酸化
第49	H1721	3504	エ/キ 鋼	C	A N 56	柱状先削加工 工機(新機)	6分節	木炭質の巻面上部に丸角の痕跡あり、右側面下部から下部にかけて削りあり。	306 50	酸化あり
第51	H1101 実Vヘル ト-4	3456	オニゴ ル	C	A N 56	柱状先削加工 工機(新機)	芯持半削	断面形状で、全体に二次加工あり、巻面は平準に存在される。左側面下部から下部にかけて斜めに削り出す。	189 20	全体巻面
第52	H1535 C-369	3289	ニガキ	B	A N 54	柱状先削加工 工機(新機)	芯持半削	丸角を半分削り取り、巻面を平準に加工した巻面あり。上部は削り出しの線状痕跡あり、下部は酸化している。なお、本巻には削り取り時の線状痕跡を有する。両側面は断面長方形に削り、右側面は斜めに削り出される。	199 64	先端酸化
第53	H1426 JpV-1	3495	マダマ ウ	C	A O 56	柱状先削加工 工機(新機)	芯持半削	半削時の断面を帯びている。上部は鋭角になっている。両側面を斜めに削り先端を尖らせている。	179 43	先端酸化
第54	H51 C-714	3358	クリ	A	A N 53	柱状先削加工 工機(新機)	芯持半削	丸角の半削材で、上部ごととなり、下部から下部にかけて斜めに削り出される。	162 65	先端酸化
第55	H51 C-1542	3373	クリ	C	A O 52	柱状先削加工 工機(新機)	芯持半削	丸角を半削し、断面両側面下部を斜めに加工している。	416 76	
第56	H1082 C-522	3211	クリ	B	A N 56	柱状先削加工 工機(先削)	芯持半削	半削材の末端部分を二方向から削り取る。中心に線状痕跡。巻面は比較的平準、左側面下部から下部に削りあり。	317 72	
第57	H1082 C-522	3211	クリ	B	A N 56	柱状先削加工 工機(先削)	芯持丸末	巻面・右側面を真っ直ぐに加工される。下部を尖らす。上部は削り出し。	297 63	先端酸化

建物番号	No	階層	グリッド	構造体 位置	部材の種類、 形状・寸法	形態・技法	全高 (mm) 厚さ	備考	
建54	H57 C-406	3414	オニヅ B系	A N54	柱状先組加工 工材(丸木 材)	芯持丸木	413 51	先組加工	
建55	H42 C-1423	3335	クリ	B系	A N53	柱状先組加工 工材(丸木 材)	芯持丸木	549 134	先組加工?
建56	H47 C-278	3076	イヌ エング ル系	B系	A N57	柱状先組加工 工材(丸木 材)	芯持丸木	424 74	
建52	H106-1 C-1066	3461	オニヅ B系	A N56	柱状先組加工 工材(丸木 材)	芯持丸木	403 31		
建53	H176 C-1460	3614	クラノ C系	A N56	柱状先組加工 工材(丸木 材)	芯持丸木	605 60 56		
建54	H174 C-1460	3321	クラノ C系	A N56	柱状先組加工 工材(丸木 材)	芯持丸木	605 60 56	芯持材を平 に加工	
建55	H161-1 C-685	3517	イヌ エング ル系	B系	A N56	柱状先組加工 工材(丸木 材)	芯持丸木	429 60 34	
建57-1	H174 C-737	3323	クラノ A系	O S3	柱状先組加 工材(丸木 材)	芯持丸木	605 282 113		
建57-2	H189 C-363-1	3340	クリ	B系	A N53	柱状先組加 工材(丸木 材)	芯持丸木	585 80 70	
建58-1	H1346 C-415	3234	クリ	B系	A N55	柱直垂	柱直	147 37	
建58-2	H92-2 C-498	3430	クラノ C系	A N57	柱直垂	柱直	110 29 7	端部加工	
建58-3	H122-2 C-554	3477	-	B系	A N57	柱直垂	柱直	92 29 6	
建58-4	H1245 C-1154	3555	ヒズキ	B系	A N54	柱直垂	柱直	178 28 8	横断あり?
建58-5	H1348 C-1154	3235	クリ	C系	A N57	柱直垂	柱直	177 29 14	
建58-6	H80-7 C-1093	3178	カエデ 系	B系	A N54	柱直垂	柱直	256 31 10	
建58-7	H38 C-1419	3133	クリ	C系	A N57	柱直垂	柱直	331 40 8	先組加工
建58-8	H1042 C-1442	3002	クリ	C系	A N57	柱直垂	柱直	412 30 28	先組加工
建58-9	H175 C-1018	3035	ニレ系	C系	A N57	柱直垂	柱直	819 144 30	柱方向の芯材 を露出?
建58-10	H1271 C-1723	3505	トネリ 系	B系	A N57	柱直垂	柱直	394 38 30	
建59-1	H1033-1	3207	ニレ系	C系	A N54	柱直垂	柱直	248/ 163 72/ 49 31/ 22	
建59-2	H118-8 C-320	3520	オニヅ B系	A N54	柱直垂	柱直	276 48 21		
建59-3	H98-8 C-900	3191	キハダ	B系	A N55	柱直垂	柱直	254 32 27	
建59-4	H129-8	3248	オニヅ B系	A N56	柱直垂	柱直	125 29 17		
建59-5	H66 C-1384	3403	クリ	C系	A N57	柱直垂	柱直	220 27 11	
建59-6	H139-6 C-1779	3253	キハダ	C系	A N56	柱直材	柱直	115 38 27	遺存状態悪い
建59-7	H130-9 C-1344	3480	クマシ デ	B系	A N53	柱直材	柱直	66 25 13	
建59-8	H47 C-304	3078	クラノ C系	A N56	柱直垂	柱直	389 70 21	壁面付き	
建59-9	H123-6 C-422	3559	クラノ C系	A N57	柱直垂	柱直	110 62 30	壁面付き	
建59-10	H93-3 C-1328	3196	クリ	C系	A N55	柱直垂	柱直	68 50 21	
建59-11	H131-1 C-1133	3257	クリ	C系	A N57	柱直垂	柱直	93 33 8	
建59-12	H150-5 C-1665	3287	クリ	C系	A N53	柱直垂	柱直	110 37 9	壁面付の可 能性あり
建59-13	H133-7 C-1460-2	3472	クリ	B系	A N53	柱直垂	柱直	135 53 7	先組加工
建59-14	H110-9 実V5ト	3400	クラノ C系	A N57	柱直材	柱直	288 47 14		
建59-15	H75-5 C-1382	3174	オニヅ B系	A N53	柱直垂	柱直	68 46 11		

岩瀬小牧4 通路II

遺物番号	No	種類	単位	グリッド	遺物構成	出土の時期	出土の層	形態・技法	全長(mm)	備考
図01	H121-4 C-1171	3276	クリ	B	A O53	板瓦	板瓦	両面を削って平切面を作り出す。表面下部に削りの線跡あり。	184 62 17	片化あり
図02	H134-11 C-1304	3237	クリ	C	A N57	板瓦	板瓦	全面二次加工あり。両端線跡。	225 20 16	
図03	H150-1 C-1689	3282	クリ	C	A N57	板瓦	板瓦	表面は平滑で、丸味を帯び、丁寧に二次加工されている。裏面は削り取り時の線跡残存する。	459 43 16	裏面に片化あり
図04	H190 C-224-3	3031	クリ	B	A N56	板瓦	板瓦	上面は長尺に削る。中央に部分で穿孔あり。表面部分では周知も削っている。裏面に削り取り時の線跡残存する。下部は削打によるヒビが入る。裏面右側には斜めに削りが入る。	594 583 75 34	
図05	H190 C-224-2	3030	クリ	B	A N56	板瓦	板瓦	上面に削打によるツブあり。両面・両側縁を削り取り。裏面中央付近に長軸に直交する溝を削り出す。	472 78 62	
図06	H147-5 C-1538	3182	クリ	C	A N53	板瓦	板瓦	板瓦に加工される。上面は破壊している。両側縁を真っ直ぐに加工され、両端は削って平切になっている。	176 40 19	
図07	H223-2 No.C-967 M411	3513 M411	キハダ	C	A N55	板瓦	板瓦	下部に線跡に幅2cm、長さ15cmに渡って垂直方向の溝が入る。全体的に縦長に線跡とその裏面に線跡は深く削られている。表面上部も浅く削られている。表面には溝状に直交する線跡が見られる。	1514 1040 1050 21 13	
図08	H18 C-1181	3006	ワケウチ	C	A O52	板瓦	板瓦	右側縁が深く、左側縁がやや厚みを持つ形状。左側縁は真っ直ぐに加工される。	381 216 40	端部片化
図09	H17 C-1667	3106	クリ	C	A O52	板瓦	板瓦	残存状態無し。二次加工なし。中央付近で破壊している。	262 169 79 19 15	
図10	H121-2 C-816	3224	ケンボ ナシ	B	A N56	板瓦	板瓦	全体に平滑で丁寧な二次加工あり。右側縁には削り跡あり。表面上部は破壊している。	470 137 28	
図11	H17 C-1576	3107	クリ	C	A O52	板瓦	板瓦	表面部に平切面を作り出し、右側縁下部を削り出す。左側縁は削りの線跡が見られない。	366 28 15	
図12	H51 C-285	3408	ワケウチ	B	A N57	板瓦	板瓦	板瓦を削り削りす際に変更されたと思われる線跡あり。両面・両側縁とも削りの線跡がほとんど見られない。一度、表面の左側縁は斜めに削られている。下部は中や丸味を帯び、上面付近は深く削られている。	802 139 40	破損
図13	H212-1 C-1527	3064	オニゴ ル瓦	C	A N53	板瓦	板瓦	板瓦に削り取り。表面上部を深く削り出している。下半部両側縁を削り取り。上部にも斜めに加工する。裏面下部は削り取り時の線跡残存する。	233 84 37	
図14	H1447 C-1823	3275	クリ	C	A N56	板瓦	板瓦	表面は平滑で、両側縁は真っ直ぐに加工される途中の段階である。全体に平滑で、丁寧な二次加工あり。両端は線跡。	155 47 17	
図15	H3 C-1292	3354	コナラ 黒コナ ラ	C	A N56	板瓦	板瓦	削り取りあり。上面は丸味を帯びて削られている。表面上部に削り跡が浅く。	463 170 42	
図16	H4 C-150	3355	クリ	B	A N55	板瓦	板瓦	両端平切に加工。両面とも上部・下部全体に削り取り。右側縁はやや斜めだが、表面にはほぼ真っ直ぐに加工される。右側縁上部に工具痕あり。	509 281 65	
図17	H164-5 C-1213	3532	オニゴ ル瓦	B	A N56	板瓦	板瓦	裏面に削り取り時の線跡残存する。右側縁には斜めに削り落とされた線跡あり。上面にも削り取りの線跡が見られる。表面はやや平滑で二次加工した線跡あり。	82 39 26	
図18	H129-4 C-766	3246	キハダ	B	A N56	板瓦	板瓦	下部の両側縁を斜めに削り、下部を削らす。裏面は上部に削り跡が少しあり。	124 71 36	
図19	H137-7 C-854	3551	カエデ 葉	A	N53	板瓦	板瓦	表面に二次加工の線跡あり。工具痕残存。上面を斜めに削り、両側縁は丸味を帯びて削られる。裏面は二次加工があったが不明。	141 68 46	
図20	H134-9 C-1142	3236	クリ	C	A N54	板瓦	板瓦	全体に平滑で、丁寧な二次加工あり。両端平切で、両側縁は真っ直ぐに加工される。裏面下部は削り跡が見る。全体に全体的であるが、木の跡もそのままだけしている。	187 81 25	
図21	H135-5 C-1737	3264	クリ	C	A N53	板瓦	板瓦	裏面の下部全体を削って深くしている。表面上部も全体に削りが入る。	156 121 37	破片か
図22	H27 C-1646	3342	ワケウチ	C	A N57	板瓦	板瓦	板瓦を深く削り取る。表面と下部には割傷している。上部は右側縁は残存しており、長さ5mm程度で真っ直ぐに加工される。	297 162 30	破損?
図23	H187 C-1802	3307	板瓦	C	A N56	板瓦	板瓦	板瓦を削いたにもて下部を切り落とすとしたもの。	297 117 45	破片付き
図24	H208 C-724	3008	コナラ 黒コナ ラ	A	N53	板瓦	板瓦	表面を削り、平切面を作り出す。下部には削り跡あり。裏面は芯が残存する。	682 280 168	
図25	H141-2	3289	コナラ 黒コナ ラ	C	A N56	板瓦	板瓦	表面に削り取り時の線跡残存する。全体に二次加工あり。右側縁下部斜めに削られる。	1119 69 28	破片付き
図26	H153-4 C-154	3288	クリ	B	A N55	板瓦	板瓦	分銅材の末葉。木葉を平滑に削り取り形状にする。両側縁は削り取り時のままで、断面が三角形である。両端は文様している。二次加工なし。	211 125 50	
図27	H115-9 C-980	3216	ワケウチ	C	A N57	板瓦	板瓦	表面は全面板瓦付き。裏面は平滑である。下部には削り跡が見られる。伏線跡のものではない。	168 46 16	破片付き
図28	H110-1 沢ノ丸 上-2	3454	クリ	C	A N56	板瓦	板瓦	全体に二次加工あり。断面長方形になるよう削り出している。下部は断面から斜めに削る。	76 60 22	未製品か
図29	H102-4 沢ノ丸 上	3546	クリ	C	A N54	板瓦	板瓦	削り取り時の線跡残存する。両面の丸味を削り取って平切面を作り出す。裏面に削り取りの線跡あり。	582 24 27	
図30	H123-5 C-1485	3558	クリ	C	A N57	板瓦	板瓦	全体に平滑で、丁寧な二次加工あり。両側縁を真っ直ぐに加工する。裏面に削り取り時の線跡残存する。	141 68 20	
図31	H9 C-1764	3266	クリ	C	A N53	板瓦	板瓦	両面平滑で、二次加工あり。削り取りあり。下部から下部にかけて斜めに削り取り。先端は平滑である。表面上部から上部にかけて工具痕があり、上部には上部からの削り跡が見られる。	220 146 22	
図32	H173-6 C-1807	3508	カエデ 葉	C	A N56	板瓦	板瓦	表面と左側縁は真っ直ぐに加工する。右側縁下部はやや丸味を帯びる。上部は中や斜めに削り落とされている。断面に中央付近が深くくぼみ使用時の木跡ありと推定される。裏面は削り取り時の線跡残存する。	270 218 59 18	
図33	H130-7 C-1085	3479	オニゴ ル瓦	C	A N55	板瓦	板瓦	二次加工なし。裏面に削り取り時の線跡残存する。	318 60 20	
図34	H93-2 C-267	3446	クリ	B	A N56	板瓦	板瓦	両面に削り取りあり。裏面は二次加工あり?	203 40 46	

建物番号	No	階層	グリッド	構造形式	柱の配列	床の配列	形態・技法	全高 (mm) 構造高さ	備考
図848	H176 C-1253	3006	クリ	C	A N S7	縦置材	縦置材	185 16 11	
図849	H95-2 C-1247	3190	クリ	C	A N S4	縦置材	縦置材	315 44 27	
図8410	H98-11 C-1297	3194	クリ	C	A N S6	縦置材	縦置材	409 48 20	炭化あり
図8411	H64 C-466-6	3400	クリ	B	A N S6	縦置材	縦置材	265 60	
図8412	H56 C-896	3165	クリ	B	A O S2	縦置材	縦置材	395 150 44	先頭炭化
図851	H132-30 C-1230	3241	+	C	A N S6	縦置材	縦置材	144 117 42	
図852	H131-11 C-1186	3261	クリ	C	A O S2	縦置材	縦置材	187 81 27	
図853	H187 C-1641	3305	クリ	C	A N S7	縦置材	縦置材	606 129 52	
図854	H143-3 C-1797	3277	キハダ	C	A N S5	縦置材	縦置材	169 52 21	
図855	H84-5 C-640	3443	クリ	B	A N S4	縦置材	縦置材	153 38 28	
図856	H141-3 C-1782	3270	クリ	C	A N S5	縦置材	縦置材	112 36 30	
図857	H147-5 C-1563	3180	クリ	C	A N S7	縦置材	縦置材	253 58 24	先頭炭化 確認?
図858	H108-4 C-533	3212	クリ	B	A N S6	縦置材	縦置材	118 52 19	
図859	H139-1 C-1824	3250	クリ	C	A N S6	縦置材	縦置材	289 29 20	柱状加工 材の可能性あり、炭化あり
図864	H133-3 C-477	3469	クリ	B	A N S6	縦置材	縦置材	152 31 16	
図865	H168-4 C-1785	3530	ヒズキ	C	A N S3	縦置材	縦置材	113 49 22	
図866	H96-4 C-1697	3442	クリ	C	A N S6	縦置材	縦置材	26 28 18	
図867	H150-2 C-994	3284	クリ	C	A N S7	縦置材	縦置材	145 36 28	
図868	H64 C-841	3146	クリ	A	N S3	縦置材	縦置材	380 49 22	
図869	H98-9 C-1448	3192	クリ	C	A N S7	縦置材	縦置材	440 48 39	
図8610	H22 C-595	3113	クリ	B	A N S4	縦置材	縦置材	474 55 21	
図8611	H47 C-155	3079	クリ	B	A N S5	縦置材	縦置材	691 162 48	
図871	H128-11 C-366	3231	クリ	B	A N S4	縦置材	縦置材	177 71 33	
図872	H136-3 C-1798	3251	クリ	C	A N S6	縦置材	縦置材	142 36 14	
図873	H130-3 C-484	3478	ウルシ	A	N S7	縦置材	縦置材	329 60 29	横置?
図874	H169-7	3536	クリ	C	A N S6	縦置材	縦置材	188 35 16	
図875	H69 C-702	3152	クリ	A	N S3	縦置材	縦置材	395 60 28	
図876	H69 C-706	3148	クリ	A	N S3	縦置材	縦置材	290 163 48	
図877	H137-7 C-1269	3259	クリ	C	A N S5	縦置材	縦置材	593 46 20	
図878	H185 C-329	3042	カエデ 栗	A	N S6	縦置材	縦置材	726 18 28	
図881	H163-1 C-1541	3520	コナラ 栗 コナラ	A	N S3	縦置材	分断	191 107 75	全体黒腐
図882	H128-10 C-160	3230	クリ	B	A N S4	縦置材	分断	102 48 26	炭腐炭化
図883	H128-5 C-1488	3228	クリ	C	A N S7	縦置材	分断	103 25 20	先頭炭化
図884	H115-1 C-426	3215	クリ	B	A N S7	縦置材	分断	221 36 33	炭化あり

岩瀬小牧 4 通路Ⅱ

建物番号	No	面積	形状	グリッド	構造	基礎	築造の時期	大取り等	形態・技法	全長 (mm)	備考
図05	H125- C-1277	3548	ク	Ⅲ	A N53	鉄材	分期		取り取り時の継ぎ残存。二次加工なし。右側壁は真っ直ぐに加工される。	231 28 36	先頭部欠損
図06	H81- C-762	3426	ク	Ⅲ	A N56	鉄材	分期		分断材で、下壁を斜めに取る。両面に取り取り時の継ぎ残存する。	281 56 34	先頭部欠損
図07	H1242 C-315	3554	ク	Ⅲ	A N57	鉄材	分期		全体に平壁で、丁寧な二次加工あり。左側壁が厚く、右側壁が薄く(断面三角形の形状である。右側壁の上下部に削り、右側壁付近で薄くなる。裏面工具痕あり。	212 33 24	先頭部欠損
図08	H1116 C-486	3218	ク	Ⅲ	A N57	鉄材	分期		分断材の左側部分を除く。本壁は取り残されている。表裏から両側壁にかけて二次加工あり。下部から下部にかけて斜めに削られる。	145 45 36	透壁?
図09	H1086 C-625	3214	ク	Ⅲ	A N55	鉄材	分期		分断材で二次加工の痕なし。上部が破壊している。	119 38 21	透壁状態あり
図10	H1248 C-547	3556	ク	Ⅲ	A N56	鉄材	分期		全体に平壁で、丁寧な二次加工あり。両側壁は真っ直ぐに加工する。裏面は平壁。表裏・両面は平壁。	80 56 32	
図11	H1043 C-376	3203	アス ロ	Ⅲ	A N54	鋼造鉄材片	否	剥離	両壁は欠損している。表裏に削り残あり。裏面は削り取られている。	313 22 14	剥離
図12	H89 C-443	3151	アス ロ	Ⅲ	A N55	鋼造鉄材片	否	剥離	削りだして表面に丸味をつける。裏面は削り取残あり。二次加工なし。両側壁あり。	262 28 20	剥離
図13	H50 C-404	3429	アス ロ	Ⅲ	A N54	鋼造鉄材片	否	剥離	削り取り前に丸く削り出して、両面を削り取る。	429 17 19	剥離
図01	H1325 C-1213	3239	ク	Ⅲ	A N53	鉄材	分期		上下両側壁。断面長方形。二次加工なし。	(64) 18 11	柱目
図02	H131- C-1340	3258	ク	Ⅲ	A N57	鉄材	分期		両面平壁で、両側壁は取り取り時の形状で斜めである。上部左側壁破壊。	(85) 6 13	
図03	H936 武ノ丸 上	3447	ク	Ⅲ	A N57	鉄材	分期		表裏には取り取り時の継ぎ残存する。裏面に二次加工あり。	179 39 12	
図04	H1415 C-1790	3271	二シ 羅	Ⅲ	A N53	鉄材	分期		削り取りにより断面がやや平直だが、上部から下部にかけて前後方向で、下部は削り出して前後長方形である。二次加工全体にあり。	445 10 25	
図05	H1143 C-819	3539	ク	Ⅲ	A N55	鉄材	分期		全体に二次加工あり。上半部は断面三角形だが、下半部は断面長方形である。	367 26 31	
図06	H89 C-738	3150	ク	Ⅲ	A O53	鉄材	分期		表裏上部は削り取りにより平壁で、下部は削り残し部分あり。下部付近では丸味向う。裏面は削り取り残あり。	324 13 20	
図07	H96- C-1323	3439	二シ キ	Ⅲ	A N55	鉄材	分期		全体に平壁で、丁寧な二次加工あり。表裏に壁が太く削り取られ、断面長方形の部分である。	311 18 29	
図08	H166- C-1857	3528	ク	Ⅲ	A O53	鉄材	分期		全体二次加工あり。上部は丸味を帯びて削られる。	230 19 16	
図09	H155- C-338	3543	二シ 羅	Ⅲ	A N57	鉄材	分期		裏面に削り取り残あり。両側壁は真っ直ぐに加工される。表裏上部に削り残あり。	278 46 36	
図10	H141- C-1166	3267	ク	Ⅲ	A N53	鉄材	分期		表裏・左側壁に削り取り残あり。二次加工なし。	233 40 30	
図11	H76- C-1227	3175	テ コ 下	Ⅲ	A N54	鉄材	分期		二次加工痕ほとんどなし。表裏に削り残あり。断面長方形に削り落とす。	179 77 21	
図12	H1633 C-1592	3541	二シ 羅	Ⅲ	A N57	鉄材	6分期		上部破壊。表裏下部右側に工具痕・削り残あり。二次加工あり。	161 53 37	
図13	H846 C-1039	3444	ク	Ⅲ	A N57	鉄材	分期		透壁状態あり。両側壁ともに取残あり。両側壁破壊。	152 75 51	
図01	H189 C-363-2	3390	コナ コ コナ コ コナ コ	Ⅲ	A N53	鉄材	165分期		表裏下部に約4mmの高さ、幅5cmで棒を打ち出す。上部に削り時の傷跡が二カ所見られる。下部は破壊。	236 76 46	
図02	H1141 武ノ丸 上	3538	ク	Ⅲ	A N56	鉄材	分期		削り材片で、下部は丸味を帯びてカーブしている。二次加工なし。	244 85 46	
図03	H89- C-959	3179	ク	Ⅲ	A N53	鉄材	相目		両面に削り取り時の継ぎ残存。表裏の上部は端部にかけて削りが入る。裏面に中央部分付近は平壁である。下部は削りが入る。	120 76 37	
図04	H98 C-347	3157	コナ コ コナ コ	Ⅲ	A O53	鉄材	分期		削り取り残あり。両面二次加工なし。	317 118 25	
図05	H59 C-254	3173	ク	Ⅲ	A N56	鉄材	分期		全体に二次加工あり。表裏面を平壁に削る。	628 175 198	
図01	H98-10 C-371	3193	テ コ 下	Ⅲ	A N54	鉄材	分期		二次加工なし。表裏に削りあり。	130 40 2	
図02	H1434	3278	コナ コ コナ コ	Ⅲ	A N56	鉄材	分期		左側壁に透壁?あり。右削り取り。二次加工なし。	145 56 28	透壁?
図03	H121- C-951	3225	テ コ 下	Ⅲ	A N54	鉄材	分期		全体に平壁で、二次加工あり。表裏から右側壁にかけて削り残あり。削り取り時の継ぎ残存する。	274 24 27	
図04	H90- C-485	3429	オニ ル 石	Ⅲ	A N57	鉄材	分期		両面に削り取り時の継ぎ残存。全体に二次加工あり。	444 42 17	
図05	H176 C-1172	3004	ク	Ⅲ	A O53	鉄材	8分期		二次加工あり。上壁を斜めに削っている。下部は削り取られ、断面長方形となる。	1269 78 78	
図06	H64 C-621	3394	二シ キ	Ⅲ	不明	鉄材	6分期		削り取り時の継ぎ残存する。全体に二次加工あり。表裏下部を削る。上部に軸打による痕跡あり。	445 24 40	
図07	H30 C-448	3143	ク	Ⅲ	A N54	鉄材	12分期		分断材で、右側壁に削り残がある。表裏・左側壁は平壁であるが、加工があったかは不明。	377 40 29	

遺物番号	No	形状	素材	グリッド	遺物構成成分	製造の時期、未定年	形態・技法	全長(mm) 長さ	備考
図9-8	H131- C-129	3262	クロナ キ	C	A N56	新材	3分製 木翼を削り取っている。芯部分除去。	304 44 16	
図9-9	H146-5 C-175	3187	クリ	C	A N52	新材	4分製 削り取り時の線跡残存する。二次加工なし。	146 41 26	
図9-10	H124-12 C-473	3557	クリ	B	A N56	新材	16分製 両端とも切り落とされており、素材内と思われる。表面に削り取り時の線跡残存する。	87 38 29	
図9-11	H143-5 C-178	3279	クリ	C	A N52	新材	分製 削り取り時の線跡残存する。二次加工の痕跡なし。	104 34 34	
図9-12	H129-2 C-403	3246	キハダ	B	A N54	新材	4分製 表面に削り痕あり。裏面下部にも削りが見られるがこれ以外の二次加工は見られない。	154 51 34	
図9-13	H02-13 京Vヘル ト	3432	クワン ボ アラシ	C	A N56	新材	8分製 表面・右側面に二次加工あり。左側面は線跡。	111 35 29	
図9-14	H93-7 C-655	3448	クリ	B	A N54	新材	8分製 削り取り時の線跡残存する。二次加工なし。上部右側面に削り?の痕跡あり。	154 25 22	
図9-1	H17 C-1579	3105	クリ	C	A O52	新材	12分製 全体に彫られている。削り取り以外の痕跡はあまりみられないが、表面左側面に凹みがある。また、表面右側面は若干線跡を削る。削り出しの可能性もある。	695 81 41	
図9-2	H192 C-1667	3327	コナ ラ ウツ	C	A N56	新材	分製 分製材の削り両面に平切面を作り出す。表面下部と裏面上部に彫り込みが見られる。	371/241 56/56	遺存状態悪い
図9-3	H123-8 C-308	3540	クリ	B	A N56	新材	6分製 削りにより中央付近で変形している。全体に二次加工あり。表面中央に長方形の窪みが見られる。右側面には工具による削り跡の痕跡が多く見られる。	615 28 25	
図9-1	H136-6 C-1760	3252	クリ	C	A N56	新材	分製 二次加工なし。両面に削り取り時の線跡残存する。表面右側ごく浅い窪みあり。線跡?	154 22 16	
図9-2	H64 C-66-1	3395	クリ	B	A N56	新材	分製 二次加工あり。表面に削り取り時の線跡残存する。下部はやや薄く削られる。中央付近にごく浅い窪みあり。裏面平直。	237 27 25	
図9-3	H176 C-1228	3003	クリ	B	A N54	新材	分製 二次加工あり。両端丸味を帯びて削り出す。	(351) 63 38	
図9-4	H90-2 C-413	3177	キハダ	B	A N54	新材	4分製 二次加工なし。表面に削り取り時の線跡残存する。上面は切斷痕あり。下面は斜めに削り入る。	482 96 58	
図9-5	H58 C-248	3171	クリ	B	A N57	新材	分製 上面に切斷痕あり。下面は平直。表面に工具痕あり。裏面・左側面より深く加工される。二次加工なし。	610 110 110	線状付き
図9-6	H174 C-1622	3322	キハダ	C	A N56	新材	8分製 削り取り後。表面に二次加工あり。両端は線跡している。	473 71 52	
図9-7	H176 C-1250	3002	クリ	C	A N57	新材	分製 断面形状がレンズ状である。両端削り痕あり。両端とも中央付近で平直になる。側面は線が抜ける。	(440) 20 20	
図9-8	H108-5	3213	ワケズ ミ	B	A N55	新材	4分製 削り取り後の二次加工なし。	154/123 16/19 12/13	線状付き
図9-9	H102-2 C-1564	3208	クロナ キ	C	A N57	新材	2分製(原 形?) 丸木の外側を削りつけた新材片。裏面に削り取り時の線跡残存する。	113 38 15	線状付き
図9-1	H120-1 C-1481	3552	クリ	C	A N56	半製材	芯平直 表面は平直で、左側面は高く深く加工されている。右側面から裏面にかけて大きく削り取る。左側面下部は下面に向かって斜めに削られる。中央付近で削り跡の痕跡が多量見られる。	302 50 25 47	
図9-2	H153-9 C-1548	3201	クリ	C	A O53	半製材	芯持半直 表面は部分線跡を残し、左右両側を削り取る。裏面は芯部分はややく残存する。	610 71 52	
図9-3	H185 C-221	3041	クリ	B	A N56	半製材	芯平直 半削(した丸)。木表・線跡方向を一箇所削り削り、面を作り出す。左側面は削り付けしている。	679 95 64	
図9-4	H178 C-286	3301	クリ	B	A N57	半製材	芯持半直 半削後。表面の深い部分を削り平直にし、表面左側面、裏面右側面も同じように削っている。裏面は芯部分を除去しているが、下部は線跡残存している。下部は線跡の痕がり部分から斜めに削られ、先を尖らす。上面の尖りは下部ほど大きくない。	1938 166 150	
図9-1	H183 C-1680	3300	クリ	C	A N53	半製材	芯持半直 両面にツブシあり。表面に削り跡の線跡残存。	589 123 29	
図9-2	H188 C-1686	3047	クニ シ	C	A N56	半製材	芯持半直 半削後。木表を削り削りしている。裏面では一部芯部分を除去している。このほか削り工程はみられるが、断面がどうかわからない。	656 74 55	
図9-1	H121 C-1388	3055	クリ	C	A N57	両端切斷材	芯持半直 下側切斷材。斜めに削り取り入り芯部分残存する。- 上面切斷材の線跡あり、後側面二次加工なし。側面線跡にあり?	207 100 63	線跡
図9-2	H114-1 C-846	3537	クリ	A	A N53	両端切斷材	4分製 4分削した材の左側面を高く深く加工する。表面は線跡あり。両端は削り削りしている。裏面は二次加工なし。	140 80 60	
図9-3	H39 C-867	3141	クリ	B	A N54	両端切斷材	芯持丸木 丸木の裏面を削り取る。両端は芯を残して斜めに切斷する。	307 77 82	
図9-4	H171-6 C-249	3503	クニ シ	B	A N57	両端切斷材	芯持丸木 下側に切斷面全面にあり。表面上部には大きく削り取られた線跡あり。表面の線跡には削り痕あり。	146 68 40	線状付き
図9-5	H171-4 次	3502	-	C	A N57	両端切斷材	芯持丸木 芯に近い部分が残存する。表面は平直に削り取る。	146 68 40	線状付き
図9-6	H81-2 C-850	3427	クリ	A	A N53	両端切斷材	板直 両面に削り取り時の線跡残存する。全体に二次加工あり。表面上部に線跡?の痕跡には工具痕あり。両端は平直に切斷されている。	228 75 27	
図9-7	H133-7 C-146-1	3471	アスナ コ	B	A N53	両端切斷材	芯持平直 断面を円形に削り出し、下部の先端を削り尖らせている。側面は非常に削っている。上面は削りによる切斷と思われる。	126 25 25	両面酸化
図9-1	H38 C-1088	3134	カエデ	C	A N55	芯持丸木	芯部分削り取る。全体に二次加工あり。側面はほぼ同じで加工される。木のうろ部分の丸味を持った部位は内部が丸形状になっている。	342 28 25	木のうろ部分を使用
図9-2	H219 C-1282	3072	クリ	C	A N53	芯持平直	変形した丸木半製材の内部芯部分を取り取り、内側から外側に向かって緩やかに立ち上げる形状である。両端には削りを入れて丸味を帯びた形状にしている。	358 64 156	

岩盤小致4 通群II

通群番号	No	形状	単位	グリッド	通群構成	製造の場所		形態・技法	全長 (mm)	備考
図P3	H152-C-1794	3083	クリ	C	A N55	用途不特定 工材(管類)	芯丸丸木	木の芯部の木質部を削り取り加工している。上部は破損。内部は丸棒を穿けて削られている。	124 102 279	
図P4	H153-C-1654	3295	クリ	C	A N56	用途不特定 工材(管類)	楕円	全体に管壁が厚く、両面に二次加工あり。表面生肌は全体にカブって立ち上がり、管壁が厚い。	464 196 106	
図P5	H34-C-1169	3138	クリ	B	A N53	用途不特定 工材(管類)	半割削	半割材の芯部分を削り出し、表面に幅約10cmの平歯部を作り出す。上部に重合する芯丸棒を加工した部分あり。表面は管壁が厚い。	484 199 95	内面炭化
図P6	H205-C-1455-2	3281	サクラ	C	A N56	用途不特定 工材(管類)	3分削(裏削)	裏削は大きく削り取りされる。表面は平歯に削り取りされるが、削り取り残あり。下部は丸棒を穿けて加工。両端は真っ直ぐに加工される。	365 134 39	
図P7	H23-C-1660	3111	ワルシ	C	A N57	加工材	芯持丸木	裏削は両面に線を持つように平歯に加工している。表面は真っ直ぐに加工する。表面は丸棒を穿けて削り出す。	441 140 74	
図P8	H182-C-1654	3314	コナラ	C	A N53	加工材	芯持丸木	丸木の外側を削り取りし、断面を整形にする。削り取りされた部分は平歯である。	461 56 47	
図P9	H180-C-1836	3037	コナラ	C	A N57	丸木材	芯持丸木	丸木の分枝部分を切断。右側部下から下部にかけて大きく削り取り。上部は破損している。	681 109 70	
図P10	H178-C-366	3302	オニグルミ	B	A N55	丸木材	芯持丸木	丸木を両側面を真っ直ぐに加工し、両端にも削り取り。両端は破損している。	730 254 195	
図P11	H186-C-1536	3023	クリ	C	A N53	丸木材	芯持丸木	丸木の表面下部を両側面を削る。表面上部から両端にかけて削り取りあり。	486 82 76	
図P12	H176-C-358	3005	クリ	B	A O52	丸木材	芯持丸木	全体に削り取り。下部は径同様の破損。芯部が一部残存。	1195 162 98	
図P13	H175-C-903	3027	クリ	B	A O53	丸木材	芯持丸木	丸木を両面を削り出すように全体の径に削り取り。表面は丸棒に仕上げている。下部は表面はほとんど大きく削り取り。下部を削り取り。表面は丸棒に仕上げている。下部は表面はほとんど大きく削り取り。下部を削り取り。表面は丸棒に仕上げている。	835 189 88	
図P14	H9-C-1372	3370	イヌエシジロ	C	A N55	丸木材	芯持丸木	上部に切断痕あり。下部は平歯。径部に切断痕あり。	421 17 32	
図P15	H90-C-1843	3344	サハザ	C	A N56	丸木材	芯持丸木	外側の削り取りはほとんどなく、下部の一方に大きく削り取り。工具による削りの可能性もある。	816 56 35	
図P16	-	-	オニグルミ	B	A N57	破損のある丸木		丸木(径部)は打撃により破損し、結合部に沿って二分割されている。この外層を削ったものと考えられ、明確な痕跡が残る。	23 23 2	
図P17	C-237		ヒョウタン	B	A N57	ヒョウタン		ヒョウタンの下部に近い部分。	41 56 4	
図P18	C-502		マツ	B	A N57	ツル植物を削り取ったもの		ワルシの様にツル植物を削り取っている。種に骨を付けたツルと別のツルを結び種に刺したツルを固定している。	111 56 2	全体を削削
図P19	土層サンプル		ツル植物	不明	不明	ツル植物を削り取ったもの		種部? おそらく種の殻の部分と思われる。二葉一組のツルを種に、一葉のツルを種に削り取り。	39 22	
図P20	真Vベルト	3581	C	A N57	破産管	幅広、両端管、折畳み	割削法による割削り取り。断面は破損している。	最大径67 最大厚13	測定長300	
図P21	C-754	3576	B	A N56	破産管	幅広	割削法による割削り取り。断面は破損している。	最大径91 最大厚15	測定長280	
図P22	C-193	3564	不明	不明	破産管	厚手管	割削法による割削り取り?	最大径71 最大厚13	測定長170	
図P23	C-664	3565	B	A N54	破産管	普通管	割削法による割削り取り。	最大径95 最大厚13	測定長560	
図P24	C-319	3595	B	A N56	破産管	普通管	割削法による割削り取り。	最大径70 最大厚12	測定長155	
図P25	C-1363	3577	B	A N53	破産管	普通管	割削法による割削り取り。	最大径65 最大厚12	測定長40	
図P26	C-882	3568	B	A N54	破産管	普通管	割削法による割削り取り。	最大径48 最大厚12	測定長160	
図P27	C-1308	3585	C	A N57	破産管	普通管	割削法による割削り取り。	最大径48 最大厚12	測定長175	
図P28	C-399	3573	B	A N54	破産管	太管	割削法による割削り取り。表面にコブあり。	最大径55 最大厚12	測定長300	
図P29	C-591	3586	B	A N54	破産管	普通管	割削法による割削り取り。表面にコブあり。	最大径59 最大厚12	測定長160	
図P30	C-726	3587	A	A N53	破産管	普通管	割削法による割削り取り。	最大径40 最大厚12	測定長160	
図P31	C-726	3587	A	A N53	破産管	普通管	割削法による割削り取り。	最大径40 最大厚12	測定長160	
図P32	C-326	3561	B	A N56	破産管	折畳み	割削法による割削り取り。破損した破産片多数あり。	最大径56 最大厚13	測定長185	
図P33	C-326	3561	B	A N56	破産管	折畳み	割削法による割削り取り。破損した破産片多数あり。	最大径56 最大厚13	測定長200	
図P34	C-159	3578	B	A N55	破産管	薄手管	割削法による割削り取り。破損した破産片多数あり。	最大径32 最大厚12	測定長40	
図P35	C-1348	3583	B	A N53	破産管	両端管	割削法による割削り取り。破損した破産片多数あり。	最大径32 最大厚12	測定長180	
図P36	C-734	3562	A	A O53	破産管	普通管	割削法による割削り取り。破損した破産片多数あり。	最大径24 最大厚12	測定長230	
図P37	C-1348	3583	B	A N53	破産管	両端管	割削法による割削り取り。破損した破産片多数あり。	最大径30 最大厚12	測定長160	

土器観察表 1

図録 番号	出土地点	出土層位	部 位	口 唇 ・ 口 縁	胴 部	口径 (mm)	器高 (mm)	底径 (mm)	分類	備 考
106-1	AM57 P2013-2123	ⅢA・ⅢB	口・胴	口縁上部に貝殻磨線を斜めに施文	貝殻磨線を直角に施文。沈線	-	-	-	I	
106-2	AL57	Ⅲ	口縁	口縁部断面三角形、縦方向に貝殻磨線を斜めに施文。	縦方向に貝殻磨線を斜めに施文	-	-	-	I	
106-3	AN59-2 P665	ⅢC	底部分付	-	貝殻磨線を斜めに施文	-	-	-	I	
106-4	AP59-4	ⅢB 3	底部分付	-	貝殻磨線を直角に施文	-	-	-	I	
106-5	AN60-1	ⅢA	胴部	-	貝殻磨線を斜めに施文	-	-	-	I	他の土器との種類違う
106-6	AR50	ⅢB 4	胴部	-	赤褐色→貝殻磨線を斜めに施文	-	-	-	I	
106-7	AN62-1 P597	ⅢA	胴部	-	貝殻磨線を斜めに施文(押し引き文)	-	-	-	I	内面に赤褐色あり
106-8	AN62-1	ⅢA 1	胴部	-	貝殻磨線を斜めに施文	-	-	-	I	内面に赤褐色あり
106-9	AO60-2	ⅢA 1	胴部	-	貝殻磨線を斜めに施文	-	-	-	I	
106-10	AN61-3	ⅢA 1	胴部	-	貝殻磨線を斜めに施文	-	-	-	I	
106-11	AN59-2	ⅢB 4	胴部	-	貝殻磨線を斜めに施文	-	-	-	I	
106-12	AN59-2 P564	ⅢA	胴部	-	貝殻磨線を直角に施文	-	-	-	I	
106-13	AN59-2 P568	ⅢA	胴部	-	貝殻磨線を直角に施文	-	-	-	I	
106-14	AN61-1	ⅢA 1	胴部	-	貝殻磨線を斜めに施文	-	-	-	I	
106-15	AK57	I	胴部	-	貝殻磨線を斜めに施文	-	-	-	I	
106-16	AN59-2 P204	ⅢA	胴部	-	貝殻磨線を斜めに施文(押し引き文)	-	-	-	I	
106-17	AM56-2	ⅢA 1	胴部	-	貝殻磨線を斜めに施文(押し引き文)	-	-	-	I	
106-18	AN61-4	ⅢA 1	胴部	-	貝殻磨線を斜めに施文(押し引き文)	-	-	-	I	
106-19	AO58-3 P21	ⅢA	胴部	-	貝殻磨線を斜めに施文(押し引き文)	-	-	-	I	
106-20	AO59-4 P724	ⅢA 1	胴部	-	貝殻磨線を斜めに施文	-	-	-	I	
106-21	AN59-1 P80	ⅢA	胴部	-	貝殻磨線を斜めに施文(押し引き文)	-	-	-	I	
106-22	AN53 P2720	ⅢA	胴部	-	貝殻磨線を斜めに施文(押し引き文)	-	-	-	I	
106-23	AK57	IV	胴部	-	貝殻磨線を斜めに施文(押し引き文)	-	-	-	I	
106-24	AR50	Ⅱ	胴部	-	貝殻磨線を斜めに施文(押し引き文)	-	-	-	I	
106-25	AM56 P2222	ⅢA	胴部	-	貝殻磨線を斜めに施文(押し引き文)	-	-	-	I	
106-26	AM57 P2008	ⅢB	胴部	-	貝殻磨線を斜めに施文	-	-	-	I	
106-27	AN58-4 P45	ⅢA	胴部	-	赤褐色→沈線二条	-	-	-	I	
106-28	AM55 P2124	ⅢA	胴部	-	赤褐色→沈線	-	-	-	I	
106-29	AO53-1	ⅢB	胴部	-	赤褐色→沈線	-	-	-	I	
106-30	AN57-3	ⅢB 5	胴部	-	赤褐色→沈線	-	-	-	I	
106-31	AN58-4 P67	ⅢA	胴部	-	赤褐色	-	-	-	I	
106-32	AN54 P2325	ⅢA	胴部	-	赤褐色→沈線	-	-	-	I	
107-1	AO59-1 P686	ⅢC	口・胴下	流紋 R 磨面, RL R 磨面	RL R 磨面	147	(230)	-	Ⅱ 2	
107-2	AN57 P2878, AN 53 P2854, AN53-3 沢V(6ト), AN 541, AO53-2	ⅢC	肩部	二流紋, 口唇RL R 磨面, 結核 R 磨面, 隆帯→RL R 磨面	直前段反折RL R 磨面	293	412	162	Ⅱ 3	
107-3	AN59-3 P936-940流紋	ⅢC	口・胴下	四流紋?, 単 1(R) 磨面	RL R 磨面	206	(272)	-	Ⅱ 3	
107-4	AN58-3 P998	ⅢC	肩部	内輪部	RL R 磨面	101	185	70	Ⅱ 3	
107-5	AO60-4 P626	ⅢC	口・胴下	軟 R 磨面, 隆帯→射突文	RL R 磨面	(100)	(311)	-	Ⅱ 3	
108-1	AN57 P2877-2877-2856	ⅢC	肩部	四流紋, 単 1(R) 磨面→RL 磨面	単 1(R) 磨面	232	575	142	Ⅱ 3	
108-2	AO52-1	ⅢC	口・胴上	四流紋, 単 1(R) 磨面→RL R 磨面, 隆帯→RL R 磨面	単 1(R) 磨面	(144)	(158)	-	Ⅱ 3	口唇上平坦
108-3	AO59-1 P668, AO58-4 P1033, AO59-1	ⅢC	肩部	委託, RL 磨面, 軟 R 磨面, 隆帯→軟 R 磨面	軟 R 磨面	191	410	(126)	Ⅱ 3	種群もあち
108-4	AO60-1 P688	ⅢC	肩部	単 1(R) 磨面→RL 磨面	単 1(R) 磨面	(178)	289	(108)	Ⅱ 3	口唇上平坦
109-1	AO59-1 P686	ⅢC	肩部	単 5(R) 磨面, LR 磨面, 隆帯→LR 磨面	単 5(R) 磨面	205	304	106	Ⅱ 3	
109-2	AN55 P2851-2847	ⅢC	口・胴上	単 5(R) 磨面	単 5(R) 磨面	(252)	(142)	-	Ⅱ 3	
109-3	AO58-1 P899	ⅢC	口・胴下	単 5(R) 磨面→RL R 磨面, 隆帯→RL R 磨面	RL R 斜・横面	(150)	(272)	-	Ⅱ 3	
109-4	AN57-4 沢V(6ト)	ⅢC	口・胴下	四流紋, 単 6(A/R)→単 4?, 隆帯→RL R 磨面	RL R 斜面	171	(235)	-	Ⅱ 3	
109-5	AO58-1	ⅢC	口・胴上	流紋, 口唇上RL R 磨面, 単 6(A/R) 磨面→RL R 磨面, 隆帯→RL R 磨面	RL R 斜面	(218)	(143)	-	Ⅱ 3	
110-1	AN59-3 P955	ⅢC	口・胴上	流紋, 口唇上RL R 磨面, 単 6(A/R) 磨面→RL R 磨面, 隆帯→RL R 磨面	単 1(R) 磨面	(380)	(204)	-	Ⅱ 3	
110-2	AO60-1 P683	ⅢC	肩部	流紋, 単 6(A/R) 磨面, 隆帯→射突	単 1(LR) 磨面	102	210	76	Ⅱ 3	

土器観察表 2

図録 番号	出土地点	出土層位	部 位	口 唇 ・ 口 縁	胴 部	口径 (mm)	器高 (mm)	底径 (mm)	分類	備 考
110-3	AN58-3 P1029-1030	III-C	底形	単6A(R)頸部→RL側圧。隆部→RL側圧	RL斜胴	156	348	98	II-3	補修孔あり
110-4	AO60-1 P687	III-C	砲丸形	一部波状。単6A(L)頸部→RL側側圧。隆部→RL側側圧	単1(L)腹胴	(171)	(300)	113	II-3	
110-5	AO59-1 P685	III-C	底形	波状。単6A(L)頸部。隆部→単1(L)頸部から単6A(L)頸部	単1(R)腹胴	(126)	(237)	87	II-3	
110-6	AN57 P2830	III-C	口・胴上	凹波状。口縁単6A(R)部。単6A(R)頸部。隆部→単1(L)頸部	単1(R)腹胴	(162)	(161)	-	II-3	口縁片み
111-1	AO58-1	III-C	口・胴下	単1(L)R・LR頸部→LR側圧。隆部→LR側圧	RL斜胴	(162)	(197)	-	II-3	口縁上平坦
111-2	AS9-1 P1003	III-C	口・胴上	-	結1?	(140)	(105)	-	II-3	
111-3	AO60-1 P689	III-C	砲丸形	縄1波状。単6A(R)頸部→RL側側圧	単1(R)腹胴	(153)	(257)	86	II-3	隆部?の削がれた痕跡あり
111-4	AO58-1, AO59-1, AN58-2 P688	III-C	砲丸形	隆部→RL側側圧	単1(R)腹胴	-	(306)	(116)	II-3	底。単1(R)頸部文あり
111-5	AO58-1	III-C	口・胴上	単1(L)頸部→LR側側圧	単1(R)腹胴	(244)	(151)	-	II-3	
111-6	AO59-1 P686, AN58-3	III-C	口・胴下	単1(R)頸部。RL側圧→LR側側圧	単1(L)R腹胴	-	(163)	-	II-3	
112-1	AO59-4 P987(887)?	III-B-3	底形	委託。結1(L)R・RL・LR側側圧	単1(L)・(R)	218	300	106	II-4	補修孔あり
112-2	AO60-1 P695-697	III-B-3・S, III-C	口・胴下	縄1凹波状。単1(R)頸部	RL斜胴。結1(R)R・LR頸部	173	311	-	II-4	方形蓋跡
112-3	AO59-1 P689	III-C	底形	縄1波状。単1(R)頸部	RL斜胴→結1(R)R・LR頸部	(140)	(291)	(73)	II-4	胴部上中央に最大径。上付近、口縁外反
112-4	AO59-1 P689	III-C	底形	縄1波状。単1(R)頸部	RL斜胴→結1(L)R・LR頸部	138	226	66	II-4	
113-1	AN59-2 P648	III-C	底形	単1(R)頸部	RL斜胴	(223)	369	(115)	II-4	口縁外反
113-2	AN59-2 P648	III-C	口・胴下	縄1波状。単1(R)頸部	結1(L)R・RL頸部。RL斜胴	(184)	(257)	-	II-4	
113-3	AO59-4 P615	III-C	口・胴上	波状。単1(R)頸部	LR頸部?	(172)	(120)	-	II-4	厚肌薄しい
113-4	AO59-4 P644	III-C	底形	単1(R)頸部。隆部→単1(R)頸部	RL斜胴→結1(R)R・LR頸部	(220)	(295)	(126)	II-5	胴部中央に最大径・自體台寄せ
113-5	AN59-3 P966	III-C	口・胴	RL側側圧。単6A(R)頸部?。隆部 RL側側圧	RL斜胴	-	-	-	II-3	
113-6	AN59-3 P924	III-C	口縁	RL斜胴	-	-	-	-	II-6	
113-7	AO58-4	III-C	口縁	RL側側圧・単1(R)頸部	-	-	-	-	II-5	
113-8	AO59-4 P938	III-C	口縁	RL側側圧・単1(R)頸部	-	-	-	-	II-5	
113-9	AN59-3 P965	III-C	口縁	単6A(R)頸部	-	-	-	-	II-3	
113-10	AN58-2 P926	III-C	口縁	結1R頸部	-	-	-	-	II-3	
114-1	AO58-1 P629	III-C	胴・底	-	RL斜胴	-	-	126	II-7	底。RL側側圧文あり
114-2	AO59-1 P660	III-C	胴・底	-	単1(R)斜胴	-	-	129	II-7	底。RL側側圧文あり
114-3	AN53-2	III-C	胴・底	-	RL斜胴	-	-	102	II-7	底。RL側側圧文あり
114-4	AO59-4	III-C	底形	-	-	-	-	(99)	II-7	底。RL側側圧文あり
114-5	AO58-4 P1023	III-C	底形	-	-	-	-	-	II-7	底。RL側側圧文あり
114-6	AO53P/N 3.5 W WP2885	III-C	胴・底	-	RL斜胴	-	-	81	II-7	底。RL側側圧文あり
114-7	AN59-2	III-C	底形	-	RL側側圧	-	-	(108)	II-7	底。RL側側圧文あり
114-8	AO58-4 P1021	III-C	胴・底	-	蓋前段反折?	-	-	(60)	II-7	底。蓋前段反折?
114-9	AO58-1	III-C	底形	-	-	-	-	-	II-7	底。RL側側圧文あり
114-10	AO58-1	III-C	胴・底	-	蓋前段反折?	-	-	(87)	II-7	底。蓋前段反折?
114-11	AO59-4 P579	III-C	底形	-	-	-	-	(72)	II-7	底。RL側側圧文?
114-12	AO59-2	III-C	口縁	単6A(R)・結1R) 隆部→結1R)	-	-	-	-	II-2	
114-13	AN56 P2887	III-C	砲丸形	単1(R)頸部・腹胴。隆部→単1(R)頸部	RL側側圧	-	(103)	(60)	II-9	小型土器
114-14	AN57 P2898	III-C	砲丸形	単1(R)頸部	RL側側圧	(75)	(72)	42	II-9	小型土器
114-15	AN58-2 P628	III-C	口・胴上	RL斜胴	RL斜胴	(46)	(63)	-	II-9	小型土器
114-16	AN59-2 P1022	III-C	底形	単1(R)頸・腹胴	単1(R)頸・腹胴	82-136	71	74-105	II-9	器種 鉢
114-17	AN57-2	III-C	口・胴下	結1R頸部	RL側側圧	(104)	(102)	(50)	II-9	小型土器
114-18	AO59-4 P997	III-C	砲丸形	結1R頸部	RL側側圧?	(52)	(58)	32	II-9	小型土器
114-19	AN57	III-C	底形	-	-	(32)	(67)	4	II-9	小型土器
115-1	AO60-2 P678	III-B-5	底形	波状。内結部。隆部→内突	RL側側圧	153	232	98	II-3	
115-2	AO60-2 P680-679, AO59-2	III-B-5-C	底形	二波状。単1(R)頸部→RL側側圧	RL斜胴	(172)	255	95	II-3	口縁外反
115-3	AN59-3 P862-905, AN60-2	III-B-4・5	砲丸形	縄1波状。単1(L)頸部	単1(L)R腹胴	(146)	(151)	-	II-3	口縁片み
115-4	AN55, AN54 P2643-2653	III-B	口・胴上	結1R) 頸部。隆部→RL側側圧→RL側側圧	RL斜胴	(184)	(108)	-	II-3	
115-5	AN54 P2655-2880	III-B	口・胴上	RL側側圧→RL側側圧。隆部→RL側側圧	単1(R)腹胴	(194)	(81)	-	II-3	
115-6	AN54 P2853-2867, AN56	III-B-III-C	砲丸形	波状。口唇単1(R)部。単1(R)頸・腹胴	単1(R)腹胴	(132)	(187)	96	II-3	
115-7	AO61-1 P731	III-B-4	口・胴上	単1(L)頸部→RL側側圧。隆部→RL側側圧	RL斜胴	(172)	(141)	-	II-3	補修孔あり
115-8	AN56 P2881, AN54 P2638	III-B-III-C	口・胴上	波状。隆部→単1(L)頸部→RL側側圧	RL斜胴(多角)	(206)	(139)	-	II-3	
116-1	AN59-2 P800	III-B-3	砲丸形	単1(R)頸部→RL側側圧	単1(R)腹胴	(152)	(261)	110	II-3	

土器観察表 3

器種 番号	出土地点	出土層位	部 位	口 唇 ・ 口 縁	胴 部	口径 (mm)	器高 (mm)	底径 (mm)	分類	備 考
116-2	AM55 P2199	ⅢB	口・胴下	単1(R)肩周→LR側圧。隆帯→単1(R)肩周→LR側圧	単1(R)肩周	-	(258)	-	Ⅲ3	
116-3	AN57 P2707・ 2856, AN55 P2677, AN55-4	ⅢB・ⅢC	口・胴下	四波状。単1(R)肩周。単1(L)・結節肩周。隆帯→単1(R)肩周	単1(L)肩周	233	(485)	-	Ⅲ3	
116-4	AN56 P2779 AN57	ⅢB・ⅢC	口・胴下	四波状。口唇単1(R)肩周。隆帯。単1(R)肩周。LR側圧	単1(R)肩周	185	(305)	-	Ⅲ3	
116-5	AO59-1, AN59-3 AO59-1 P686	ⅢB・4, C	口・胴下	口唇上単1(R)肩周。単1(R)肩周→RLR側圧。隆帯→RLR側圧	単1(R)肩周	229	(242)	-	Ⅲ3	口縁・胴部の線条体は真なる
117-1	AN54 P2772	ⅢB	宛形	波状。単4(R)肩周。隆帯→単4(R)肩周	単1(L)肩周	115	188	76	Ⅲ3	
117-2	AN54 P2854, AN55	ⅢB・ⅢC	口・胴上	波状。単6(A)R肩周。RLR側圧。隆帯→RLR側周→RLR側圧	RLR側周→RLR側周	(300)	(176)	-	Ⅲ3	
117-3	AO61-1 P732, AO60-2 P680	ⅢB・4	口・胴上	四波状。単1(R)肩周→単5(R)肩周→RLR側圧	単1(R)肩周	(178)	(172)	-	Ⅲ3	方唇基調。補帯あり
117-4	AN53-3	ⅢB	口・胴上	単6(A)R肩周。隆帯→単6(A)R肩周	直前段反照RLR側周	(114)	(99)	-	Ⅲ3	外蓋状物付着
117-5	AN57 P2361	ⅢB	口・胴上	波状。口唇上単1(R)肩周。単6(A)R肩周→RLR側周。隆帯→RLR側圧	単1(R)肩周	(228)	(116)	-	Ⅲ3	
117-6	AO59-3 P630	ⅢB・5, ⅢC	口・胴下	単6(A)R肩周→RLR側圧。隆帯→RLR側周	RLR側周	(176)	(207)	-	Ⅲ3	
117-7	AN54-1 P2739	ⅢB	口・胴上	波状。単6(R)肩周→RLR側圧。隆帯→RLR側圧	単1(R)肩周→胴周	(172)	(164)	-	Ⅲ3	外蓋状物付着
117-8	AN55 P2668	ⅢB	口・胴上	波状。RLR側周→RL側圧。隆帯→RL側圧。沈線	RL側周	(192)	(113)	-	Ⅲ3	
118-1	AN53-3	ⅢB	口・胴下	RLR側周→浅い沈線	RLR側周	-	(216)	-	Ⅲ6	
118-2	AN57 P2188	ⅢB	(X付添) 胴上	RLR側周→沈線	RLR側周	-	(162)	-	Ⅲ6	
118-3	AN60-1	ⅢB・5	胴	LR側周	RLR側周	-	(112)	-	Ⅲ6	
118-4	AN60-3 P682・ 698	ⅢB・4	口・胴下	単1(R)肩周→LR側圧	直前段反照RLR側周	(270)	(300)	-	Ⅲ3	口縁丸み
118-5	AN61-2 P632	ⅢB・4	口・胴下	単1(R)肩周。LR側圧	直前段反照RLR側周	(216)	(274)	-	Ⅲ3	磨耗しい
119-1	AN61-4, AN61-1	ⅢB・4	口・胴下	縄目波状。単1(R)肩周→LR側圧	直前段反照RLR側周	(296)	(307)	-	Ⅲ3	口縁丸み
119-2	AN59-3	ⅢB・4	口・胴上	縄目波状。LR側周	RLR側周・胴部	(172)	(99)	-	Ⅲ4	
119-3	AN60-3 P658	ⅢB・5	口・胴下	単1(R)肩周	RLR側周。結1(LR・RL)	203	230	-	Ⅲ4	
119-4	AN61-2 P666	ⅢB・5	口・胴下	単1(R)肩周	RLR側周	(232)	(278)	-	Ⅲ4	口縁外反
120-1	AO59-4 P805	ⅢB・3	宛形	縄目四波状。単1(R)肩周	RL側周→結1(LR・RL)肩周	191	(385)	(106)	Ⅲ4	口縁外反。直前段下方所に溝帯形彫の厚丸。やや方形基調
120-2	AO59-4 P804	ⅢB・3	宛形	縄目四波状。単1(R)肩周	結1(LR・RL)肩周。RL側周	200	295	95	Ⅲ4	補帯あり
120-3	AO59-4 P803	ⅢB・3	宛形	縄目波状。単1(R)肩周	RL側周	(174)	(276)	(92)	Ⅲ4	口縁外反。方唇基調
120-4	AO60-1 P646	ⅢB・4	口・胴下	縄目波状。単1(R)肩周	RLR側周	(191)	(223)	-	Ⅲ4	口縁外反
121-1	AO59-4 P817	ⅢB・3	宛形	単1(R)肩周	RL側周→結1(LR・RL)肩周	(218)	(386)	95	Ⅲ4	口縁外反
121-2	AO60-1 P657	ⅢB・4	宛形	縄目四波状。口唇LR側周。単1(R)肩周	結1(LR・RL)肩周	(156)	(205)	(72)	Ⅲ4	方唇基調
121-3	AN59-2	ⅢB・4	口・胴上	縄目波状。単1(R)肩周。RLR側周	RLR側周	(190)	(181)	-	Ⅲ4	口縁外反
121-4	AO59-4 P805	ⅢB・3	口・胴下	縄目波状。口唇LR側周。単1(R)肩周	RL側周。結1(LR・RL)肩周	(195)	(290)	-	Ⅲ4	口縁外反
121-5	AN59-3 P616・ 629	ⅢB・4・5	口・胴下	縄目四波状。単1(R)肩周。口唇RL側周。細隆帯→単1(R)肩周	直前段反照RLR側周	(226)	(283)	-	Ⅲ4	
122-1	AN59-3	ⅢB・4	宛形	単1(R)肩周	結1(LR・RL)肩周。RL側周	194	(309)	(108)	Ⅲ4	
122-2	AO59-4 P814・ 817	ⅢB・3	宛形	単1(R)肩周	RL側周→結1(LR・RL)肩周。RLR側周	166	346	(82)	Ⅲ4	口縁外反結果・直前段。口縁中心は一致しない
122-3	AN59-3 P630 AN60-2	ⅢB・4	宛形	単1(R)肩周	RL側周	(171)	24	90	Ⅲ4	
122-4	AO59-4 P888	ⅢB・3	宛形	縄目波状。LR側周	結1(LR・RL)肩周	(143)	(225)	66	Ⅲ4	
122-5	AN58-3 P799, AN59-3 P806・ 807・902	ⅢB・3	宛形	縄目波状。口唇LR側周。単1(L)肩周	結1(LR・RL)肩周RLR側周。単1(L)肩周	162	206	68	Ⅲ4	方唇基調。胴部縁封
123-1	AO59-4 P803	ⅢB・3	宛形	縄目波状。LR側周	RL側周	(184)	(239)	90	Ⅲ4	
123-2	AO59-4 P818, AO59-3	ⅢB・3・4	口・胴上	縄目波状。単1(R)肩周	RL側周。結1(LR・RL)肩周	(190)	(222)	-	Ⅲ4	
123-3	AN59-3	ⅢB・4	口・胴上	波状。口唇上LR側周。LR側周	結1(LR・RL)肩周。RLR側周	(230)	(172)	-	Ⅲ4	
123-4	AN59-3 P606	ⅢB・4	口・胴上	縄目波状。単1(R)肩周	結1(LR・RL)肩周。RL側周。RL側周	(196)	(142)	-	Ⅲ4	
123-5	AO60-3 P793	ⅢB・3	口・胴上	波状。LR側周	RLR側周	(210)	(90)	-	Ⅲ4	
123-6	AO59-4 P831	ⅢB・3	宛形	縄目四波状。単1(R)肩周	RLR側周→結1(LR・RL)肩周	158	(192)	(68)	Ⅲ4	方唇基調
123-7	AO60-3 P663・ 664	ⅢB・5	口・胴上	波状。単1(R)肩周	直前段反照RLR側周	(156)	(100)	-	Ⅲ4	直線曲帯
124-1	AN59-3 P889	ⅢB・3	口・胴下	単1(R)肩周	結1(LR・RL)肩周	(150)	229	-	Ⅲ4	口縁やや外反
124-2	AO59-4 P814・ 817	ⅢB・3	宛形	縄目四波状。口唇LR側周。LR側周	RLR側周→結1(LR・RL)肩周	(218)	(287)	(110)	Ⅲ4	口縁外反
124-3	AN60-3 P780	ⅢB・3	宛形	単1(R)肩周	結1(LR・RL)肩周。RL側周	(173)	(303)	(90)	Ⅲ4	胴部中央に最大径全体に表化
124-4	AN60-2 P608・ 614	ⅢB・4・5	口・胴下	縄目四波状。単1(R)肩周	RLR側周→結1(LR・RL)肩周	(235)	(307)	-	Ⅲ4	
125-1	AN61-1	ⅢB・4	宛形	縄目波状。結1(LR・RL)肩周→LR側周	RLR側周	(153)	(192)	70	Ⅲ4	断面丸い

土器観察表 4

調査番号	出土地点	出土層位	部位	口 唇 ・ 口 縁	胴 部	口径 (mm)	器高 (mm)	底径 (mm)	分類	備 考
125-2	AO59-4 P895	ⅡB3	宛形	L形側庄	FL形胴部	169	293	80	Ⅱ 4	口縁外反
125-3	AN61-4	ⅡA1・ⅡB4-05	口・胴上	縄文遺状。結1(LR・RL)胴部→LR側庄	FL形胴部	(214)	(92)	-	Ⅱ 4	
125-4	AN61-4	ⅡB4	口・胴上	遺状。口唇LR形。結1(LR・RL)胴部→LR側庄	FL形胴部	(204)	(81)	-	Ⅱ 4	
125-5	AO59-4 P804・805	ⅡB3	宛形	縄文遺状。FL側庄?。結1(LR・RL)胴部→LR側庄	FL形胴部	(182)	256	(88)	Ⅱ 4	
125-6	AN59-3 P630	ⅡB4	宛形	縄文遺状。単純側庄?	結1(LR・RL)胴部	144	220	86	Ⅱ 4	胴部中央最大径
125-7	AO59-4 P839	ⅡB1	宛形	縄文遺状。LR側庄	LR側部。FL形胴部	144	64	173	Ⅱ 4	
126-1	AO59-4 P813	ⅡB3	宛形	結1(LR・RL)胴部	FL形胴部。前々段多形FL形胴部	(189)	(361)	(78)	Ⅱ 4	口縁外反・結果の方向が変わるのが4力所。4・5cm単位で縄文遺状となり、全体で八遺状くらい?一部欠けているため。不明
126-2	AO60-1 P646	ⅡB4	宛形	四遺状。結1(LR・RL)胴部	FL形胴部。結1(LR・RL)胴部	(134)	(262)	(64)	Ⅱ 4	胴部中央に最大径。方形蓋部
126-3	AN59-3	ⅡB4	口・胴上	遺状。結1(LR・RL)胴部	FL形胴部	(148)	(136)	-	Ⅱ 4	
126-4	AN59-3 P616・631	ⅡB4	宛形	結1(LR・RL)胴部	FL形胴部	(208)	(286)	(104)	Ⅱ 4	
127-1	AN60-2 P642・655 P539, AN59-3 P630	ⅡB4・5	宛形	単純側庄。踵部単純側庄	多岐FL側部	(303)	498	147	Ⅱ 5	
127-2	AO60-1 P667	ⅡB4	宛形	単1(R)側庄	FL形胴部→結1(LR・RL)胴部	(174)	(257)	(84)	Ⅱ 5	方形蓋部。胴部に三角形くる
127-3	AN59-3 P617・699	ⅡB5・ⅡC	口・胴下	単1(R)側庄。踵部等→単1(R)側庄	結1(LR・RL)胴部。FL形胴部	(190)	(137)	-	Ⅱ 5	口縁外反
127-4	AN60-2 P647	ⅡB5	口・胴下	縄文遺状。踵部等。単1(R)側庄	結1(LR・RL)胴部。FL形胴部。単1(R)側庄?	(232)	(307)	-	Ⅱ 5	口唇やや外側に開く。口縁。自腹自背?
128-1	AN60-2 P661	ⅡB5	宛形	口唇LR形。FL側庄	結1(LR・RL)胴部。FL形胴部	235	293	(140)	Ⅱ 5	
128-2	AN59-3 P801・802	ⅡB3	宛形	縄文遺状。単1(R)側庄	結1(LR・RL)胴部。FL形胴部	(212)	264	(110)	Ⅱ 5	胴部中央付近の結果を同じ撰文を記入している。
128-3	AO60-1 P651・657	ⅡB4	口・胴下	縄文遺状。口唇LR側部。LR側庄	FL形胴部	(216)	(230)	-	Ⅱ 5	
128-4	AOS2-4, AOS3-1	ⅡB・ⅡC	口・胴上	単1(R)側庄	直前段反腹FL形胴部。結1(LR・RL)胴部	(238)	(216)	-	Ⅱ 5	自腹自背
128-5	AN59-3 P606	ⅡB4	口・胴上	縄文遺状。口唇LR側部。単1(R)側庄	結1(LR・RL)胴部。FL形胴部	(199)	(63)	-	Ⅱ 5	
128-6	AN60-3	ⅡB5	口・胴上	単1(R)側庄	結1(LR・RL)胴部。FL形胴部	182	(136)	-	Ⅱ 5	
128-7	AN61-3 P654	ⅡB5	口・胴上	縄文遺状。単1(R)側庄	結1(LR・RL)胴部。直前段反腹FL形胴部	(226)	(133)	-	Ⅱ 5	
129-1	AN59-3 P628	ⅡB	宛形	単1(R)側庄	単1(L)側部	199	390	112	Ⅱ 5	
129-2	AOS3-1, AOS2-4	ⅡB	宛形	R・L側庄。FL側部	単1(R)側部	(164)	(271)	(100)	Ⅱ 5	
129-3	AN59-3 P606	ⅡB4	口・胴下	R側庄	FL形胴部。結1(LR・RL)胴部	(180)	(187)	-	Ⅱ 5	
129-4	AN60-2 P608・336	ⅡB4	宛形	L形側庄	262	327	140	Ⅱ 5		
129-5	AN59-3 P640	ⅡC	口・胴上	LR側庄。踵部→LR側庄	結1(LR・RL)胴部。FL形胴部	192	(168)	-	Ⅱ 5	口唇三角形
130-1	AO57・P2380・2379	ⅡB・ⅡC	宛形	直前段反腹?	直前段反腹?	114	124	70	Ⅱ 6	底・直前段反腹?
130-2	AO59-4 P816	ⅡB3	口・胴上	縄文遺状。単1(R)側庄	R側部。単1(R)側部	(215)	-	-	Ⅱ 5	
130-3	AN60-1・2	ⅡA1・ⅡB4-4・5	口・胴	LR側庄	結1(LR・RL)胴部。FL形胴部	-	(184)	-	Ⅱ 6	
130-4	AN59-3 P631	ⅡB4	口・胴上	単1(R)側庄?	結1(LR・RL)胴部	(222)	(61)	-	Ⅱ 6	
130-5	AO59-4 P819	ⅡB3	口・胴上	縄文遺状。R側庄→胴部の屈曲点に割欠	直前段反腹FL形胴部	(160)	(139)	-	Ⅱ 5	
130-6	AN58-2 P193, AN59-3 P628・629	ⅡB4	宛形	遺状。L側庄	単1(L)側部	(160)	50	134	Ⅱ 5	胴部下半で屈曲
130-7	AO62-2	ⅡB3	宛形	FL側庄	FL形胴部	(199)	(348)	(97)	Ⅱ 5	断面三角
131-1	AN59-3 P852	ⅡB3	口縁	単6A(R)側部・踵部→FL形側部	-	-	-	-	Ⅱ 3	
131-2	AN59-3 P859	ⅡB1	口・胴	単5(R)側部・単1(R)・踵部→RL形側部?	FL形胴部?	-	-	-	Ⅱ 3	
131-3	AN59-3 P906	ⅡB5	口縁	単5(R)側部・RL形側部	-	-	-	-	Ⅱ 3	
131-4	AO59-4 P856	ⅡB3	口・胴	単5(R)側部	FL形胴部?	-	-	-	Ⅱ 3	
131-5	AN59-3 P901	ⅡB5	口縁	単6A側部	-	-	-	-	Ⅱ 3	
131-6	AN59-3 P857	ⅡB3	口・胴	単6A側部	FL形胴部	-	-	-	Ⅱ 3	
131-7	AO59-4 P912	ⅡB5	口・胴	単6A側部	FL形胴部	-	-	-	Ⅱ 3	
131-8	AO59-3 P988	ⅡB3	口・胴	踵部RL側部?	FL形胴部	-	-	-	Ⅱ 3	
131-9	AO59-4 P894	ⅡB1	胴	-	FL形胴部?	-	-	-	Ⅱ 7	
131-10	AN59-3 P833	ⅡB1	口・胴	単6A(R)側部 踵部→FL形側部?	FL形胴部	-	-	-	Ⅱ 3	
131-11	AN59-3 P840	ⅡB3	口・胴	単6A(R)側部 踵部→FL形側部?	FL形胴部	-	-	-	Ⅱ 3	
131-12	AN59-3 P862	ⅡB3	口縁	単1(L)側部?	-	-	-	-	Ⅱ 3	
131-13	AO59-3 P797	ⅡB2	口・胴	FL形側部・LR側部	FL形胴部	-	-	-	Ⅱ 4	

土器観察表 5

器種番号	出土地点	出土層位	部位	口 唇 ・ 口 縁	胴 部	口径 (mm)	器高 (mm)	底径 (mm)	分類	備 考
131-14	AO59-4 P836	ⅡB-1	口-胴	結1(LR・RL) 踵部・単1側圧	FLR斜部?	-	-	-	Ⅱ-4	
131-15	AO59-4 P830	ⅡB-1	口-胴	LR側圧	結1(LR・RL) 踵部・FLR斜部	-	-	-	Ⅱ-4	
131-16	AN59-3 P851	ⅡB-3	口-胴	単1(R) 側圧	結1(LR・RL) 踵部・FLR斜部	-	-	-	Ⅱ-4	
131-17	AO59-4 P830	ⅡB-1	口-胴	単1側圧?	結1(LR・RL) 踵部	-	-	-	Ⅱ-4	
131-18	AO59-4 P817	ⅡB-1	口-胴	単1側圧?	結1(LR・RL) 踵部・FLR斜部	-	-	-	Ⅱ-4	
131-19	AO59-4 P894	ⅡB-1	口-胴	RL側圧	結1(LR・RL) 踵部・FLR斜部	-	-	-	Ⅱ-4	
131-20	AO58-3 P795	ⅡB-3	胴-底	-	?	-	(75)	67	Ⅱ-7	
131-21	AN57 P2583	ⅡB	兜形	単1(R) 踵部	単1(R) 踵部	73	82	53	Ⅱ-9	小型土器
131-22	AO59-2 P835	ⅡB-6	砲壳形	単1(R) 踵部	単1(LR・RL) 踵部・FLR斜部	83	102	50	Ⅱ-9	小型土器
131-23	AO59-4 P814	ⅡB-1	口-胴	LR側圧	結1(LR・RL) 踵部・FLR斜部	-	-	-	Ⅱ-4	
131-24	AO57 P2382	ⅡB	兜形	LR側圧	FLR斜部	86	83	54	Ⅱ-9	小型土器
131-25	AN59-3 P605	ⅡB-4	口-胴	RL側圧	単1(L) 踵部	72	84	-	Ⅱ-9	小型土器
132-1	AO61-1, AO59-3 P837	ⅡA 2, B 6	口-胴下	結軟LR 踵部, 踵部→浅い内形のくぼみ	直前段反照PR斜部・踵部	(168)	(214)	-	Ⅱ-3	
132-2	AM54 P2489	ⅡA	口-胴	単1(R) 踵部→LR側圧	FLR斜部	216	294	105	Ⅱ-3	
132-3	AO60-2	ⅡA-1	口-胴下	波状, 単6(A)R 踵部→RLR側圧	単1(L) 踵部	(168)	(138)	-	Ⅱ-3	
132-4	AP59-4 P823	ⅡA-2・1	口-胴下	波状, 単5(R) 踵部→LR側圧, 踵部→LR側圧	単1(R) 踵部	187	(308)	-	Ⅱ-3	
132-5	AN58-3 P1031, AO59-4 P855, AP61-1	ⅡA 2, ⅡB 4, ⅡC	口-胴上	四波状? 単1(R) 踵部→単5(R) R 踵部→波状, 踵部→単1(R) 踵部→波状	単1(R) 踵部	(218)	(97)	-	Ⅱ-3	口縁平直
132-6	AN55P2738	ⅡA-ⅡB	口-胴上	波状, 単5(R) 踵部→RLR側圧, 踵部→RLR側圧	FLR斜部	(168)	(106)	-	Ⅱ-3	口縁凹凸
132-7	AN55 P2482-2523, 2441	ⅡA-ⅡB	口-胴上	単6(R) 踵部→RLR側圧	単1(LR) 踵部	(162)	(97)	-	Ⅱ-3	
133-1	AN59-3 P763	ⅡA-2	砲壳形	縷い波状, R側圧	FLR斜部	(151)	230	100	Ⅱ-3	断面三角形
133-2	AM5 P240-2541-2536-2479-2533-2584-2582-2583-2582-2584-2583	ⅡA-ⅡB	口-胴	踵部→RLR側圧	FLR斜部	-	148	-	Ⅱ-3	
133-3	AP60-4 P646, AO61-1	ⅡB-3, A 1	口-胴下	単1(R) 側圧	FLR斜部, 直前段反照PR斜部? 斜部, 結1(LR・RL) 踵部	(206)	(280)	-	Ⅱ-4	口縁外反・口縁曲背
133-4	AN552500-2778-2619	ⅡA-ⅡB	口-胴上	縷い波状, 単1(R) 踵部→LR側圧	単1(L) 踵部	(222)	(194)	-	Ⅱ-3	
133-5	AN61-2 P779	ⅡA-2	砲壳形	RLR側圧?	FLR斜部	(176)	230	-	Ⅱ-3	
133-6	AO59-4 P765	ⅡA-2	口-胴上	単1(R) 側圧	結1(LR・RL)	(158)	(106)	-	Ⅱ-5	
133-7	AO60-1 P630	ⅡA	口-胴下	単1(R) 側圧	FLR斜部, 結1(LR・RL)	-	(201)	-	Ⅱ-4	口縁外反
134-1	AN61-1 P453-454-457-467-491	ⅡA	口-胴下	単1(R) 側圧	FLR斜部	(200)	(351)	-	Ⅱ-4	口縁外反
134-2	AN54 P2811-2813	ⅡA	兜形	縷い四波状, LR側圧	直前段反照PR斜部	268	403	141	Ⅱ-4	
134-3	AP60-4 P656	ⅡA-1	口-胴下	波状, LR側圧	直前段反照PR斜部	196	(355)	-	Ⅱ-4	
134-4	AO60-2 P630	ⅡA-2	口-胴上	縷い波状, 単1(R) 側圧	FLR斜部, 結1(LR・RL) 踵部	(200)	(131)	-	Ⅱ-4	
135-1	AN60-2 P642, AO60-2	ⅡA 1, B 6	砲壳形	単1(R) 側圧, 口唇LR側部	結1(LR・RL) 踵部, FLR斜部	(202)	274	85	Ⅱ-4	
135-2	AO62-1	ⅡA	口-胴上	縷い四波状, 単1(R) 側圧	FLR斜部, 結1(LR・RL) 踵部	(190)	(136)	-	Ⅱ-4	
135-3	AO59-3 P523-319	ⅡA	口-胴上	縷い波状, 単1(R) 側圧	FLR斜部, 結1(LR・RL) 踵部	(196)	(163)	-	Ⅱ-4	方形基調
135-4	AO61-2, AP61-1 P63	ⅡA-2	口-胴上	縷い四波状, 単1(R) 側圧	結1(LR・RL) 踵部	(150)	(104)	-	Ⅱ-4	
135-5	AN59-3 P763	ⅡA-2	砲壳形	縷い波状, 口唇LR側部, LR側圧	結1(LR・RL) 踵部, FLR斜部	(212)	(263)	(112)	Ⅱ-4	
135-6	AP59-4 P393	ⅡA	口-胴上	縷い波状, LR側圧	R側部?, FLR斜部	(234)	(80)	-	Ⅱ-4	
135-7	AO60-2 P394	ⅡA	砲壳形	単1(R) 側圧	FLR斜部	(203)	311	(99)	Ⅱ-4	口縁外反
136-1	AO61-4 P607	ⅡA	兜形	縷い四波状, 結1(LR・RL) 踵部→LR側圧	FLR斜部	179	262	85	Ⅱ-4	口縁外反やや方形基調
136-2	AN58-4 P94-95-56	ⅡA	口-胴下	縷い波状, 結1(LR・RL) 踵部	直前段反照PR斜部	(158)	(159)	-	Ⅱ-4	
136-3	AN59-3 P722	ⅡA-2	口-胴下	縷い波状, 結1(LR・RL) 踵部	直前段反照PR斜部	(150)	179	-	Ⅱ-6	厚片調し
136-4	AO59-4 P765	ⅡA-2	口-胴上	縷い四波状, 結1(LR・RL) 踵部	FLR斜部	206	(226)	-	Ⅱ-4	口縁外反
136-5	AN60-3 P730	ⅡA-2	口-胴下	結1(LR・RL) 踵部	FLR斜部	(206)	(178)	-	Ⅱ-6	口縁外反
136-6	AO59-4 P764	ⅡA-2	口-胴上	LR側部→結1(LR・RL) 踵部	直前段反照PR斜部	(174)	(230)	-	Ⅱ-6	
137-1	AM57 P2000-2005 P2163, AM57 P2004, AM59	ⅡA・ⅡB・ⅡC	兜形	口唇LR側?, FLR側圧	結1(LR・RL) 踵部, FLR斜部	244	300	140	Ⅱ-5	
137-2	AN59-3 P399	ⅡA	口-胴下	R側圧, 微隆部	結1(LR・RL) 踵部, FLR斜部	230	(313)	-	Ⅱ-5	口縁部断面三角
137-3	AP60-4 P656	ⅡA-2	口-胴上	縷い波状, 単1(R) 側圧, 微隆部→単1(R) 側圧	R側部, 結1(LR・RL) 踵部, FLR斜部	(214)	(160)	-	Ⅱ-5	
137-4	AN59-3 P399-400	ⅡA	口-胴下	LR側圧, 微隆部→LR側圧	FLR斜部→結軟R 踵部	(240)	(297)	-	Ⅱ-5	

土器観察表6

調査 番号	出土地点	出土層位	部位	口 唇 ・ 口 縁	胴 部	口径 (mm)	器高 (mm)	底径 (mm)	分類	備 考
137-5	AN54 P2815- 2798	ⅢA	口・胴下	FL側圧	結1(LR・RL)側面、FL斜面	-	186	183	-	Ⅱ 5 断面縮くなる
138-1	AN59-2 P551	ⅢA	先形	LR側圧	結1(LR・RL)側面、単1(R)側面	209	361	123	Ⅱ 5	
138-2	AO60-2 P528	ⅢA	先形	単1(R)側圧、側縁等→単1(R)側圧	FL斜面→結1(LR・RL)側面、FL斜面	(221)	352	(128)	Ⅱ 5	口縁厚1
138-3	AO60-2	ⅢA 1	先形	結1(R)側圧、単1(R)側圧	FLR斜面→結1(LR・LR)側面	(228)	(325)	(110)	Ⅱ 5	
138-4	AO59-4 P736	ⅢA 2	口・胴下	縄1波状、LR側圧	FLR斜面、結1(LR・RL)側面	(202)	(275)	-	Ⅱ 5	
139-1	AP60-4 P656	ⅢA 2	口・胴下	FL側面、R・L側圧	単1(L)側面と結1(LR・RL)側面が交互に縄文	(176)	(190)	-	Ⅱ 5	口縁部肥厚、段になる
139-2	AP60-4 P656	ⅢA 2	口・胴下	波状、L片側圧	FL斜面、結1(LR・RL)側面	(156)	(212)	-	Ⅱ 5	
139-3	AP60-4 P656	ⅢA 2	口・胴上	縄1波状、LR側圧、側縁等→LR側圧	FL斜面	(240)	(225)	-	Ⅱ 5	
139-4	AN54 P2532	ⅢA	口・胴上	縄1波状、単1(R)側圧	結1(LR・RL)側面	190	(66)	-	Ⅱ 5	
139-5	AN59-4 P400	ⅢA	先形	口唇RL側面、LR側圧、側縁等→LR側圧	結取R側面、FL斜面	(217)	(357)	(128)	Ⅱ 5	
139-6	A Y46	Ⅲ	口・胴上	LR側面、R・L側圧	FL側面、単1(R)側面	(200)	(77)	-	Ⅱ 5	
139-7	AP60-4 P656	ⅢA 2	口・胴上	単1(R)側圧、口唇FL側面	FL斜面、結1(LR・RL)側面	(230)	(225)	-	Ⅱ 5	
140-1	AN55 P2421	ⅢA	口・胴下	縄1波状、単1側圧、側縁等→側圧	FL斜面→結1(LR・RL)側面	(306)	(212)	-	Ⅱ 5	自縄自巻
140-2	AN53 P2756- 2793	ⅢA・ⅢB	口・胴上	単1(R)側圧、RL側圧・LR側圧	FL斜面	(245)	(148)	-	Ⅱ 5	
140-3	AO59-4 P724	ⅢA 2	先形	単1(R)側圧	FL斜面、結1(LR・RL)側面	(198)	(210)	(114)	Ⅱ 5	
140-4	AP60-4 P646	ⅢA 2	口・胴上	縄1波状、単1(R)側圧	FL斜面、結1(LR・RL)側面	(180)	(81)	-	Ⅱ 5	
140-5	AN54 P2072	ⅢA	口・胴上	縄1波状、口唇FL側面、R側圧	結1(LR・RL)側面、FL斜面	(164)	(103)	-	Ⅱ 5	
140-6	AN58-59 P125- 82-129-6-183- 190-231-400-121- 399(逆歩)	ⅢA	口・胴下	口唇RL側面、RL側圧、胴部との境界に 段あり	結1(LR・RL)側面、単1(L)側面	(156)	(204)	-	Ⅱ 5	
140-7	AO60-3	ⅢA 2	口・胴上	縄1波状、単1(R)側圧、口唇RL側面	FLR斜面、結1(LR・RL)側面	(208)	(209)	-	Ⅱ 5	
141-1	AN54 P2074- 2671-2075	ⅢA	口・胴下	R・L側圧と単5(R)側圧を交互に縄文	単1(R)側面	300	(334)	-	Ⅱ 5	胴部左巻き
141-2	AO60-1 P669	ⅢA	口・胴上	縄1波状、単1(R)側圧	結1(LR・RL)側面	(174)	(133)	-	Ⅱ 5	
141-3	AO60-2 P630	ⅢB 2	口・胴下	結1(LR・RL)側面、RL側圧	L片側面	(144)	(152)	-	Ⅱ 5	
141-4	AO59-1 P541	ⅢA	口・胴上	縄1波状、LR側圧	FL斜面→結1(LR・RL)側面	(200)	(116)	-	Ⅱ 5	
141-5	AN54 P2788	ⅢA	口・胴上	縄1波状、口唇内側圧、LR側圧	単1(R)側面、結1(LR・RL)側面	(168)	(106)	-	Ⅱ 5	
141-6	AN60-3 P600- 710	ⅢA 2・ B 5	先形	結1(LR・RL)側面→RL側面	結1(LR・RL)側面、裏面段 反側FL斜面	166	220	92	Ⅱ 5	補修孔あり。 方形蓋蓋
141-7	AN59-4 P400 AN59-2 P556	ⅢA	先形	結1(LR・RL)側面	FL斜面	138	234	84	Ⅱ 5	
142-1	AN54 P2074	ⅢA	口・胴	結1(LR・RL)側面	FL斜面	(226)	(164)	-	Ⅱ 5	
142-2	AN56 P2380- 2351-2350-2348	ⅢA	口・胴上	口唇上FL側面、結1(LR・RL)側面	単1(LR)側面	(172)	(162)	-	Ⅱ 5	
142-3	AP60-4	ⅢA	底部	-	結1側面?	-	-	-	Ⅱ 7	
142-4	AN54 P2798- 2814	ⅢA	口・胴上	R・L側圧、沈線	単1A R・L側面、縄の結部 あり	-	60	-	Ⅱ 5	
142-5	AN54 P2798	ⅢA	胴・底	-	単1A R・L側面、縄の結部 あり	-	136	96	Ⅱ 5	胴部上半はめぬい 器蓋
142-6	AO60-2 P636	ⅢA	底部	-	-	-	-	96	Ⅱ 5	底→結1(LR・RL) 側面
142-6	AO54P N 2 S W VIP2789	ⅢA	胴・底	-	単1(L)側面	-	35	50	Ⅱ 9	小型土器
142-7	AO58-4	ⅢC	口縁	単6A(B)側面・RLR側圧	-	-	-	-	Ⅱ 4	
142-8	AN59-3 P723	ⅢA	口・胴	単1(R)側面	結1(LR・RL)側面?	-	-	-	Ⅱ 5	
142-9	AO59-4 P754	ⅢA	口・胴	単1(R)側圧	FLR側面	-	-	-	Ⅱ 5	
142-10	AO59-3 P798	ⅢA	口・胴	単1(R)側圧	結取R側面	-	-	-	Ⅱ 5	
142-11	AN54P N 2 S W VIP2796	ⅢA	胴	-	単5(R)側面を交互に縄文、 単1(R)側側圧、結取L側 面	-	-	-	Ⅱ 5	
142-12		Ⅲ	胴	-	?	-	-	-	Ⅱ 7	赤色顔料塗布
142-13	AO58-1 P829- AO58-4 AN59-2	ⅢC	先形	RLR側面	FLR側面	(151- 112)	(94)	(74- 71)	Ⅱ 9	2力所穿孔あり、口 縁平直
143-1	AN62-3 P622	Ⅱ	塊先形	単1(R)側圧	FLR側面	(220)	(348)	(108)	Ⅱ 4	口唇やや平直
143-2	AN59-4 P400	Ⅱ	口・胴下	単1(R)側圧、側縁等→単1(R)側圧	単1(L)側面、結1(LR・RL) 側面	(210)	(200)	(110)	Ⅱ 5	口縁中やや内
143-3	AO60-3 P652	Ⅱ	口・胴下	縄1波状、口唇RL側面、単1(R)側圧	裏面段反側FLR側面、結1 (LR・RL)側面	(202)	(235)	-	Ⅱ 5	口縁肥厚
143-4	A T55	Ⅲ	口・胴下	波状、単1(R)側面→L片側圧、口唇上単 1(R)側	FLR多象側面	(100)	(178)	-	Ⅱ 3	
143-5	AR50	Ⅱ	底部	-	FLR側面	-	-	-	Ⅱ 7	
143-6	AN62-1	Ⅱ	口・胴上	L片側圧	結1(LR・RL)側面	(204)	(60)	-	Ⅱ 5	
143-7	AK56	Ⅲ	口縁	FL側圧、結取R側面・側面、結1(LR- RL)	-	-	-	-	Ⅱ 5	
144-1	AO61-2 P672, AP61-1 P653	Ⅱ	口・胴下	粘土結輪付→L側圧	結1(R)側多象LR・RL側面	267	(240)	-	Ⅱ 4	

土器観察表 7

図録番号	出土地点	出土層位	部位	口蓋・口縁	胴部	口径 (mm)	器高 (mm)	底径 (mm)	分類	備考
144-2	AN59-2 P 308, AN60-1, AN58-2 P 108・179	ⅢB 4	口・胴下	粘土結核り付け→L側圧、刺突列	肩 1(LR・RL) 横面	(264)	250	-	Ⅲ3	
145-1	AM54 P2311・2301・2308 AL54 P2360	ⅢA	口・胴上	LR側圧?	肩 1(R) 横面	(168)	(118)	-	Ⅲ1	
145-2	AN54	I	胴部	-	LR 2 側側圧, LR 胴部縦に押圧, これら垂直面に無文	-	-	-	Ⅲ1	
145-3	AM54 P2306	ⅢA	口	把持手付, LR側圧, 文様帯の境界・把手に竹管状刺突	円形粘土貼付け→L側圧	-	-	-	Ⅲ1	
145-4	AM54 P2113	ⅢA	口・胴	円形粘土貼付け→L側圧, RL側圧, 文様帯の境界に円形刺突	肩 1(LR) L 横面	-	-	-	Ⅲ1	
145-5	AN62-2 P517	ⅢA	口	波状, 粘土結核付→L側圧、斜めに刺突	-	-	-	-	Ⅲ3	
145-6	AN54 P2300	ⅢA	口	粘土結核付→削み→刺突文	-	-	-	-	Ⅲ3	
145-7	AN54 P2414	ⅢA	口	粘土結核付→L側圧?, 刺突文	-	-	-	-	Ⅲ3	
145-8	AN57 P2202	ⅢB	胴部	-	粘土結核付→削み→刺突文	-	-	-	Ⅲ3	
145-9	AN55 P2424	ⅢA	口	多条RL横面→粘土結核付	-	-	-	-	Ⅲ4	
145-10	AN56	ⅢA	口	穿孔部に横文押圧, 口縁に横位沈線一条, 粘土結核付	-	-	-	-	Ⅲ4	
145-11	AO58-2 P30	ⅢA	口	?	-	-	-	-	Ⅲ5	
145-12	AP59-2, AO58-2 P30	ⅢA	口	口縁上部断面三角形, 円形刺突あり, LR横面	-	-	-	-	Ⅲ5	
145-13	AN58-2 P39	ⅢA	口	波状, RL横面→ナデ	-	-	-	-	Ⅲ9	
145-14	AO50-2 P363・402	ⅢA	口	波状, 中央穿孔, 肩帯 1(多条RL・LR) 横面→粘土結核付→L側圧	-	-	-	-	Ⅲ4	
145-15	AL59	Ⅲ	口	波状, 多条RL横面→ナデ, 波部くぼみあり	-	-	-	-	Ⅲ9	
145-16	AN59-1	ⅢB 4	口	RLR横面	-	-	-	-	Ⅲ9	
145-17	AN59-2	ⅢB 6	口	波状?, 多条RLR横面	-	-	-	-	Ⅲ9	
145-18	AL60	I	口	口縁下部に段あり, 横文, 口縁はやや外反する。	-	-	-	-	Ⅲ3	
145-19	AL60	I	口	口縁下部に段あり, 横文, 口縁はやや外反する。	-	-	-	-	Ⅲ3	
145-20	AN62-1 P507	ⅢA	胴		横文, ナデ	-	-	-	Ⅲ3	内面に幅15cmのハケズ
145-21	AN57	ⅢA	胴	-	一条RLR横面→沈線	-	-	-	Ⅲ3	
145-22	AM56 P2355	ⅢA	口	口縁上部先端, 横文	-	-	-	-	Ⅲ3	
145-23	AM60	I	胴		LR斜面→横位沈線 3 条	-	-	-	Ⅲ3	
145-24	AO58-4 P11	ⅢA	口	口縁上部平坦, 口縁外面に粘土結核付→LR横位	-	-	-	-	Ⅲ3	横位沈線
145-25	AN57	ⅢA	胴	-	LR斜面→沈線による幾何学文	-	-	-	Ⅲ3	
145-26	AN56	ⅢA	口・胴		LR斜面→沈線による幾何学文	-	-	-	Ⅲ3	
145-27	AL61	I	口	両面で縦線, 口縁部外側に横く, 上部に横位沈線あり。	LR横面	-	-	-	V	器種 鉢
145-28	AL61	I	胴		L斜面	-	-	-	V	器種 鉢
145-29	AN57	ⅢA	胴	外蓋ケズりあり	内蓋ナデ?	-	-	-	VI	器種 甕

石器観察表

八例 器種：半円打；半円状扁平打製石器 採入層：採入層平層製石器 石質：北道産玉石  
 石質：瑠璃岩 玉珥；玉珥質瑠璃岩 石英；石英安山岩 採入層；安山岩質瑠璃岩 輝綠岩；輝綠岩質  
 輝石；輝石質 緑泥岩；緑泥岩質 緑色石；緑色石質 緑泥岩；緑色輝綠岩質

剥片石器観察表

図番	出土地	層位	器種	分類	石種	加工の 種類	刃部 の加工 の種類	無刃部 の加工 の種類	石の 特徴	素材 技術	素材 形態	素材の 打痕	残存 率	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考	整理 番号	
14P-1	AN60-2	ⅢC	石鏝	Aa	瑠璃岩	片打	SP	なし	適用外	不明	剥片	不明	剥片	42.7	13.3	4.2	1.7	S-114、B-6。	470	
14P-2	AO99-2	ⅢC	石鏝	Ab	瑠璃岩	片打	SP	なし	適用外	不明	剥片	不明	剥片	40.8	18.1	5.2	2.8	S-150、平層。	571	
14P-3	AN58-4	Ⅲ	石鏝	Da	瑠璃岩	片打	SP	I+SP	I+P	D	剥片	不明	剥片	101.7	31.2	14.4	28.6	S-22。裏面に使用痕光沢あり。	570	
14P-4	AN61-1	ⅢB4	石鏝	Da	瑠璃岩	片打	SP	D	適用外	HD	剥片	不明	剥片	97.8	47.9	15.3	56.5		573	
14P-5	AN57	ⅢC	石鏝	Da	瑠璃岩	片打	SP	I+SP	I+P	D	剥片	不明	剥片	66.7	24.2	9.2	9.7	S-29。裏面右側に割れ光沢僅	488	
14P-6	AN58-3	Ⅲ	石鏝	Da	瑠璃岩	片打	SP	I+SP	I+P	D	剥片	不明	剥片	66.6	28.1	15.6	18.1	S-30。裏面左側に使用痕光沢あり	784	
14P-7	AN58-3	Ⅲ	石鏝	Da	瑠璃岩	片打	SP	I+P	I+P	D	剥片	不明	剥片	65.9	18.2	9.4	9.6	S-92。裏面に使用痕光沢あり	565	
14P-8	AN58-3	Ⅲ	石鏝	Da	瑠璃岩	片打	SP	I+P	I+P	D	剥片	不明	剥片	94.4	22.0	15.5	22.5	S-89。裏面に使用痕光沢あり	507	
14P-9	AN57	ⅢA	石鏝	Da	瑠璃岩	片打	SP	なし	適用外	HD	剥片	不明	剥片	57.5	25.0	7.0	9.2	表面ハジケ。	819	
14P-10	AN54-2	ⅢB	石鏝	Da	瑠璃岩	片打	SP	なし	適用外	HP	剥片	不明	剥片	78.1	30.1	16.9	31.3	裏面に使用痕光沢あり。	898	
14P-11	AN55-2	ⅢC	石鏝	Da	瑠璃岩	片打	SP	I+SP	I+P	D	剥片	不明	剥片	84.5	33.3	7.2	24.9	裏面に光沢。	894	
14P-12	AN59-1	ⅢC	石鏝	Da	瑠璃岩	片打	SP	I+P	I+P	D	剥片	不明	剥片	71.8	30.9	9.5	16.2	裏面に使用痕光沢あり。	513	
14P-13	AN59-1	ⅢC	石鏝	Da	瑠璃岩	片打	SP	I+SP	I+P	D	剥片	不明	剥片	64.3	31.0	10.3	7.3	S-36。裏面に割れ光沢。	792	
14P-14	AM55	ⅢA	石鏝	Da	瑠璃岩	片打	SP	I+SP	I+P	D	剥片	不明	剥片	58.2	33.6	12.3	16.5	S-25。	572	
14P-1	AN59-1	ⅢB4	石鏝	Da	瑠璃岩	片打	SP	I+P	HD	剥片	不明	剥片	58.2	40.3	9.0	13.9	接り部を付け替えた。	251		
14P-2	AN54	ⅢA	石鏝	Da	瑠璃岩	片打	SP	I+SP	I+P	D	剥片	不明	剥片	79.5	26.5	11.9	15.8	S-30。裏面に使用痕光沢あり	784	
14P-3	AN61-1	ⅢB4	石鏝	Da	瑠璃岩	片打	SP	I+P	I+P	D	剥片	不明	剥片	71.7	37.6	11.3	23.3	裏面に使用痕光沢あり	512	
14P-4	AN57	ⅢC	石鏝	Da	瑠璃岩	片打	SP	I+SP	I+P	D	剥片	不明	剥片	61.0	30.1	9.0	16.6	S-26。裏面に光沢。	754	
14P-5	AN55	ⅢC	石鏝	Da	瑠璃岩	片打	SP	I+SP	I+P	D	剥片	不明	剥片	55.2	39.7	7.0	14.2	G-139。	800	
14P-6	AN54	ⅢA	石鏝	Da	瑠璃岩	片打	SP	I+SP	I+P	D	剥片	不明	剥片	64.3	25.3	10.5	18.2	S-36。表面部は加工した。	802	
14P-7	AO99-4	ⅢB3	石鏝	Da	瑠璃岩	片打	SP	なし	適用外	不明	剥片	不明	剥片	72.2	54.1	11.3	28.4	S-94。裏面に光沢。	489	
14P-8	AO99-2	ⅢC	石鏝	Da	瑠璃岩	片打	SP				剥片	不明	剥片	(49)	(34)	(8)	(16.7)	表面部に光沢。	491	
14P-9	AO9D-3	ⅢB5	石鏝	Da	瑠璃岩	片打	SP	適用外	D	剥片	不明	剥片	59.3	25.0	10.9	13.0	裏面に使用痕光沢あり。	614		
14P-10	AN53-3	ⅢA	石鏝	Da	瑠璃岩	片打	SP	I+SP	I+P	D	剥片	不明	剥片	85.6	50.9	9.1	25.6	裏面に使用痕光沢あり。	808	
14P-11	AN59-1	ⅢB4	石鏝	Da	瑠璃岩	片打	SP	なし	適用外	D	剥片	不明	剥片	51.5	35.9	9.7	10.3		506	
14P-12	AN59-2	ⅢB4	石鏝?	Da	瑠璃岩	片打	SP	不明	D	剥片	不明	剥片	46.3	38.5	9.2	15.6		500		
14P-13	AO99-4	ⅢB3	石鏝	Da1	瑠璃岩	片打	SP				剥片	不明	剥片	44.0	47.0	9.6	(13.1)	S-100。	514	
14P-14	AO99-3	Ⅲ	石鏝	Da2	瑠璃岩	片打	SP	I+P	D	剥片	不明	剥片	65.3	54.8	11.6	29.2	S-31。裏面に光沢。	501		
14P-1	AN59-2	ⅢB4	石鏝	Da	瑠璃岩	片打	SP	I+P	D	剥片	不明	剥片	32.6	54.0	8.3	8.6		503		
14P-2	AN59-1	ⅢB4	石鏝	Da	瑠璃岩	片打	SP	HP+H	HP	I+P	D	剥片	不明	剥片	43.4	52.3	11.3	15.1	刃部は再加工されている。	502
14P-3	AN59-3	ⅢB4	石鏝	Da	瑠璃岩	片打	SP	I+P	D	剥片	不明	剥片	50.5	59.7	14.5	31.4	裏面下部に光沢	509		
14P-4	AO99-3	Ⅲ	石鏝	Da	瑠璃岩	片打	SP	HP	I+P	D	剥片	不明	剥片	41.6	61.5	(8.5)	(12.5)	S-117。表面部光沢	508	
14P-5	AN59-2	ⅢB4	石鏝	Da	瑠璃岩	片打	SP	I+P	HP	D	剥片	不明	剥片	44.8	43.8	8.5	9.7	刃部に使用痕あり。	480	
14P-6	AO99	Ⅲ	石鏝	Da	瑠璃岩	片打	SP	なし	HD	D	剥片	不明	剥片	63.1	21.2	13.8	16.7	刃部は使用痕あり。	831	
14P-7	AN57-3	ⅢC	石鏝	E	瑠璃岩	片打	SP	HD	適用外	D	剥片	不明	剥片	61.9	31.4	15.0	25.6	一面「イ」が入れ、再加工品で 表面打痕がある。	822	
14P-8	AN61-2	ⅢB4	石鏝	E	瑠璃岩	片打	P+D				剥片	不明	剥片	78.2	36.8	14.0	45.5		471	
14P-9	AN56	ⅢC	石鏝	E	瑠璃岩	片打	SP	なし	適用外	不明	剥片	不明	剥片	71.5	42.6	16.5	46.0	S-39。未製型。	804	
14P-10	AN60-1	ⅢB4	石鏝	Ga	瑠璃岩	片打	SP	なし	適用外	不明	剥片	不明	剥片	67.6	49.8	13.4	22.2	剥片。裏面に使用痕あり。	483	
14P-11	AN59-1	ⅢB3	22%G	Ga	瑠璃岩	片打	SP	なし	適用外	D	剥片	不明	剥片	68.0	54.9	17.7	64.0	S-102。剥片。	696	
14P-12	AP60-4	ⅢA1	22%G	Ga	瑠璃岩	片打	SP	剥片	適用外	D	剥片	不明	剥片	56.8	33.2	9.4	10.5	剥片。裏面下部に光沢。	478	
14P-13	AN53-3	ⅢA	22%G	Ga	瑠璃岩	片打	SP				剥片	不明	剥片	32.0	40.6	10.4	10.0	裏面下部に光沢。	787	
14P-14	AN57	ⅢA	22%G	Ga	瑠璃岩	片打	SP	なし	適用外	SD	剥片	不明	剥片	47.3	26.5	8.4	5.8	S-22。剥片。	809	
14P-15	AN57	ⅢA	22%G	Ga	瑠璃岩	片打	SP	D	適用外	不明	剥片	不明	剥片	42.0	25.7	7.2	7.5	S-72。剥片。	476	
15P-1	AN99-2	Ⅲ	22%G	Ga	瑠璃岩	片打	SP	なし	適用外	不明	剥片	不明	剥片	63.5	39.2	15.2	24.8	S-99。剥片。裏面に打痕あり。	474	
15P-2	沢原	Ⅲ	22%G	Ga	瑠璃岩	片打	SP	なし	適用外	不明	剥片	不明	剥片	52.7	38.9	10.9	16.9	剥片。	472	
15P-3	AN54-2	ⅢA	22%G	Ga	瑠璃岩	片打	SP				剥片	不明	剥片	49.9	22.4	7.0	8.6	裏面に使用痕あり。	812	
15P-4	AN59-1	ⅢA1	22%G	Ga	瑠璃岩	片打	SP	なし	適用外	D	剥片	不明	剥片	63.9	54.6	12.0	30.0	S-60。剥片。	633	
15P-5	AO99-4	ⅢB3	22%G	Ga	瑠璃岩	片打	SP	なし	適用外	D	剥片	不明	剥片	53.2	44.5	11.0	13.5	S-93。剥片。	494	
15P-6	AP58-1	Ⅲ	22%G	Ga	瑠璃岩	片打	SP	なし	HD	適用外	剥片	不明	剥片	46.7	16.8	9.7	5.8	S-21。石質の剥片を再加工した。	495	
15P-7	AO61-1	ⅢB3	22%G	Ga	瑠璃岩	片打	SP	I+SP	適用外	D	剥片	不明	剥片	43.1	42.0	9.1	20.1	剥片。	492	
15P-8	AN56-3	ⅢA	22%G	Ga	瑠璃岩	片打	SP				剥片	不明	剥片	49.2	37.7	15.6	31.0	刃部は使用痕から剥片加工	810	
15P-9	AN53-3	ⅢA	22%G	Ga	瑠璃岩	片打	SP	SP	適用外	D	剥片	不明	剥片	62.3	24.7	12.9	12.1	剥片。刃部は剥片加工	815	
15P-10	AN99-2	ⅢC	22%G	Ga	瑠璃岩	片打	SP	なし	適用外	D	剥片	不明	剥片	60.9	41.8	8.5	10.6	S-151。剥片。裏面に右側打痕	567	
15P-11	AP56-1	Ⅲ	22%G	Ga	瑠璃岩	片打	P+D				剥片	不明	剥片	36.7	39.9	11.3	18.5	S-2。剥片	472	
15P-12	AN60-2	ⅢB5	22%G	Ga	瑠璃岩	片打	SP	なし	適用外	不明	剥片	不明	剥片	59.4	27.0	7.4	11.9	剥片。	480	
15P-13	AN59-4	Ⅲ	22%G	Ga	瑠璃岩	片打	D+P	適用外	D	剥片	不明	剥片	53.5	45.1	15.5	32.6	S-27。剥片。裏面に使用痕あり。	491		
15P-14	AN59-2	Ⅲ	22%G	Ga	瑠璃岩	片打	SP	なし	適用外	D	剥片	不明	剥片	35.0	42.2	11.5	23.0	S-15。剥片。	493	
15P-15	AN59-3	ⅢB4	22%G	Ga	瑠璃岩	片打	SP	なし			剥片	不明	剥片	48.1	37.2	7.0	8.3	剥片。	479	
15P-16	AN60-3	ⅢC	22%G	Ga	瑠璃岩	片打	SP	SP	HI	D	剥片	不明	剥片	24.4	46.1	(8.5)	(7.9)	石質の剥片?	475	
15P-1	A.R.50	Ⅲ	22%G	Ga	瑠璃岩	片打	SP				剥片	不明	剥片	38.7	49.9	14.4	28.8	剥片。刃部剥片。	878	
15P-2	AO99-2	ⅢC	22%G	Ga	瑠璃岩	片打	SP	不明	D	剥片	不明	剥片	45.2	33.0	10.4	11.5	裏面に使用痕光沢あり	484		
15P-3	AP59-2	ⅢA1	22%G	Ga	瑠璃岩	片打	SP	HD	適用外	HD	剥片	不明	剥片	87.7	70.1	26.8	131.7	剥片。	496	
15P-4	AO59-4	ⅢA	22%G	Ga	瑠璃岩	片打	SP	SP	適用外	D	剥片	不明	剥片	39.2	57.1	8.0	12.2	剥片。石質の本製型?	877	
15P-5	AO99-3	ⅢA1	22%G	Ga	瑠璃岩	片打	SP	D	適用外	HD	剥片	不明	剥片	64.1	48.2	14.5	39.2	剥片。刃部には使用痕あり	492	
15P-6	AO99	Ⅲ	22%G	Ga	瑠璃岩	片打	SP													

礫石器観察表 1

図番号	出土地	層位	器種	分類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	備 考	数量
152-2	AO60-I	ⅢC	磨製石棒	Ja	(11.1)	(5.3)	(3.6)	346	緑凝岩	S-75, 刃部欠損。	307
152-3	AP61-I	ⅢA1	磨製石棒	Ja	(9.6)	5.2	3.1	256	石英岩	基部欠損。	311
152-4	AP58-I	Ⅲ	磨製石棒	Ja	(8.0)	(4.4)	(2.5)	139	緑凝岩	S-2, 刃部片。	312
152-5	AO60-I	ⅢC	磨製石棒	Ja	(11.2)	(5.0)	2.9	(279)	緑凝岩	S-73, 刃部欠損。	309
152-6	AO64-I	ⅢB3	磨製器	Kb2	9.4	4.6	2.2	184	緑凝岩	磨製石棒を欠損。側面に磨け痕あり。	370
152-7	AN54-4	ⅢC	磨製器	Ka1	14.2	8.4	3.2	404	凝灰岩	磨石・凹孔。スリ幅10mm, 溝1凹孔。	412
152-8	AO58-1	Ⅲ	磨製器	Ka2	6.6	6.5	5.0	172	凝灰岩	球状磨石の類。磨面はざらつく。	194
152-9	AO58-2	ⅢC	磨製器	Ka2	7.5	6.1	5.4	348	安山岩	球状磨石の類。	192
152-10	AO58-2	Ⅲ	磨製器	Ka2	7.8	7.4	6.3	438	流紋岩	S-20, 球状磨石の類。	466
152-11	PN48WV1	ⅢB	磨製器	Ka1	10.9	5.5	4.1	340	流紋岩	S-384, 磨石・凹孔。磨部に強いスリ。	191
152-12	AN55	ⅢA	磨製器	Ka2	11.1	6.4	2.4	276	凝灰岩	S-255, 扁平磨石, スリ幅10mm。	504
152-13	AM56-3	ⅢA	磨製器	Ka2	15.4	8.5	3.5	599	流紋岩	平断面に磨け痕。スリ幅6-13mm。	438
152-14	AN57-4	ⅢC	磨製器	Ka2	16.4	10.0	3.6	627	凝灰岩	平断面に磨け痕。スリ幅5-10mm。	458
152-15	AO58-4	Ⅲ	磨製器	Ka2	8.4	8.1	2.5	276	石英岩	S-12, 破断面に強い磨痕。スリ幅4mmと広いことから磨石に分類。	202
152-16	AN57	ⅢA	磨製器	Ka2	(7.0)	(5.6)	5.5	(385)	石英岩	S-293, 三角状磨石の破片, スリ幅12mm。	433
152-17	AN55	ⅢA	磨製器	Ka2	(6.9)	(7.0)	(3.1)	(227)	石英岩	扁平磨石, 欠損。スリ幅11mm, 磨部に磨け痕。	494
152-18	AO52	Ⅲ	磨製器	Ka2	14.8	5.1	1.4	192	ヒン岩	ほとんど無加工。磨部は削り付。	525
152-19	AN55	ⅢA	磨製器	Kb1	11.7	5.7	3.5	324	石英岩	S-311, 磨石・凹孔。磨面はざら。スリ幅20mm。	542
152-9	AO60-I	ⅢB5	磨製器	Kb1	9.2	8.4	3.9	525	輝綠岩	磨石・凹孔。周縁に磨け痕が走る。	249
154-1	AN54	ⅢB	磨製器	Kb1	(10.7)	5.5	2.5	(198)	流紋岩	S-375, 588と接合。磨石・凹孔。石片が剥離。削り付あり。	402・588
154-2	AN55	ⅢC	磨製器	Kb1	(12.2)	4.9	3.6	(309)	流紋岩	S-382, 棒状磨の破断に削り付。他の面に凹孔。磨面に磨痕顕著。	545
154-3	AG59	Ⅲ	磨製器	Kb1	12.4	6.5	3.6	280	凝灰岩	磨石・凹孔。	469
154-4	AO59-4	ⅢB3	磨製器	Kb1	16.9	5.7	4.1	596	流紋岩	S-321, 磨石・凹孔。磨面は平ら。	239
154-5	AN57	ⅢA	磨製器	Kb1	13.8	5.4	3.3	356	凝灰岩	S-434, 磨石・凹孔。	429
154-6	AN56-3	ⅢC	磨製器	Kb1	13.6	4.7	2.8	222	凝灰岩	磨石・凹孔。両面に削り付。磨面は平ら。	467
154-7	AN55	ⅢB	磨製器	Kb1	15.8	7.1	5.1	810	流紋岩	S-333, 木柄み濃痕。磨石・凹孔。磨面は平ら。	553
154-8	AN55	ⅢB	磨製器	Kb1	18.6	6.7	5.5	1030	石英岩	S-367, 磨石・凹孔・磨痕。	408
154-9	AP58-2	ⅢA1	磨製器	Kb2	15.6	7.7	6.4	1076	石英岩	磨石。下部部が欠け1凹孔。磨面は平ら。	277
155-1	AP40-I	ⅢB5	磨製器	Kb2	13.1	7.3	6.3	818	流紋岩	磨石。両面に削り付。磨面は平ら。	248
155-2	AO50	Ⅲ	磨製器	Kb2	13.7	4.9	3.0	226	凝灰岩	磨石。棒状磨の破断に削り付。磨面は平ら。	467
155-3	AN59-2	ⅢB3	磨製器	Kb2	13.3	7.6	2.1	330	安山岩	S-135, 磨石。形状は扁平磨石。	201
155-4	AO58-1	ⅢC	磨製器	Kb2	10.8	8.3	3.2	440	輝綠岩	磨石。S-136, 扁平磨石の破断に削り付。	242
155-5	AO59-4	ⅢB3	磨製器	Kb2	11.5	8.5	5.6	682	頁岩	磨石。S-125, ハンマー?	256
155-6	AN56	ⅢB	磨製器	Kb2	18.6	7.6	3.0	604	凝灰岩	S-231, 磨石。扁平磨の破断に削り付。平断面に磨け痕のキズと打痕。	194
155-7	AP58-1	Ⅲ	磨製器	Kb2	10.6	7.4	3.5	349	凝灰岩	S-3090, 扁平磨の破断に削り付。平断面に磨け痕のキズと打痕。	447
155-8	AN56	ⅢA	磨製器	Kc1	11.4	6.5	3.7	295	凝灰岩	S-254, 凹石。平断面は平ら。凹孔はすり鉢状で深い。	409
155-9	AO59-1	ⅢC	磨製器	Kc1	11.5	8.1	3.9	441	緑色凝岩	凹石。磨面は平ら。平らに磨かれた凹孔。	241
155-10	AO59-3	ⅢB6	磨製器	Kc1	11.0	5.4	3.9	298	流紋岩	S-118, 凹石。磨面は平ら。平らに磨かれた凹孔。	225
155-11	AN55	ⅢB	磨製器	Kc1	15.8	7.0	4.2	575	凝灰岩	S-371, 凹石。凹孔は削り付の磨石。	468
156-1	AO58-1	ⅢC	磨製器	Kc1	17.4	5.2	4.8	669	流紋岩	凹石。2面に凹孔。磨面は平ら。	233
156-2	AO62-1	ⅢC	磨製器	Kc1	13.5	6.1	4.0	436	流紋岩	凹石。磨面平断面はとくに平ら。	240
156-3	AN56-4	ⅢA	磨製器	Kc1	8.9	8.7	5.4	550	安山岩	広く浅い凹孔。台石として利用か。	557
156-4	AN53-3	ⅢA	磨製器	Kc2	10.1	6.5	5.0	296	凝灰岩	凹石。石面が利用か。磨いた石片。凹孔はすり鉢状で深い。	404
156-5	AN53	ⅢA	半円状	L	(13.0)	9.0	4.5	(585)	ヒン岩	破断面欠損。尖鋭部or未製器の可能性大。	414
156-6	AN59-2	ⅢC	半円状	L	13.3	9.1	2.3	386	輝綠岩	S-131, 尖鋭部の可能性大。平断面に凹孔と溝状のキズ。	220
156-7	AO59-1-2	ⅢC・ⅢB6	半円状	L	14.3	6.1	1.8	239	安山岩	204(S-116)と接合。破断面に磨いたスリ。スリ幅0-8mm。	203
156-8	AP57・AM56	ⅢA	半円状	L	12.0	7.4	1.5	144	凝灰岩	N-429(S-258)と接合。破断面に磨痕。扁平磨製石器の可能性あり。	132・429
156-9	AO57	ⅢC	半円状	L	(11.5)	8.2	1.7	(246)	安山岩	S-291, 磨面に強いスリ磨痕。スリ幅0-5mm。	516
157-1	AM56	ⅢA	半円状	L	17.2	6.8	2.5	382	ヒン岩	S-352, 欠損。磨面は平ら。スリ幅0-7mm。	500
157-2	AO57	ⅢC	半円状	L	18.5	7.5	2.6	486	流紋岩	S-248, 欠損。磨面に強いスリ磨痕。スリ幅0-5mm。	443
157-3	AN55	ⅢA	半円状	L	15.7	7.3	1.7	338	ヒン岩	板状。亮。磨面はざらつく。スリ幅0-8mm。	485
157-4	AN59-1	ⅢB4	半円状	L	12.9	5.3	2.1	187	凝灰岩	板状。亮。	215
157-5	AN57	ⅢA	半円状	L	11.0	6.1	2.0	201	流紋岩	S-204, 磨面にスリ磨痕。スリ幅0-7mm。	523
157-6	AO59-4	ⅢC	半円状	L	(10.5)	(6.8)	(3.0)	(230)	流紋岩	S-62, 1/2, 板状。スリ幅12mm。	206
157-7	AO59-4	ⅢB3	半円状	L	13.0	6.5	2.3	328	凝灰岩	S-112, 欠損?。板状。磨面スリ磨痕。	213
157-8	AN59-3	ⅢB4	半円状	L	17.0	8.1	2.5	464	凝灰岩	S-122, 578(北区A4)と接合。破断面に磨痕。ほぼ完全に焼元。	214・578
158-1	AO61-1	ⅢB3	投入磨	M	18.8	9.3	1.6	414	凝灰岩	S-75, ほぼ全磨面。	220
158-2	AO59-3	Ⅲ	投入磨	M	(11.3)	(6.8)	(2.2)	(247)	凝灰岩	S-37, 先端部破片。全体をスリ磨痕。	222
158-3	AN59-3	ⅢC	投入磨	M	(8.5)	(7.0)	(2.2)	(182)	安山岩	S-69, 刃部片。片側は短欠。	227
158-4	AN55	ⅢA	投入磨	M	(9.8)	(5.8)	(2.4)	(190)	ヒン岩	S-296, 先端部破片。左側縁は平直。	493
158-5	AP49	Ⅲ	投入磨	M	(6.7)	(11.0)	(0.9)	(96)	凝灰岩	体部破片	480
158-6	AN57	ⅢC	投入磨	M	(8.2)	(8.2)	(2.3)	(154)	凝灰岩	S-203, 破片。	466
158-7	AO52-4	Ⅲ	投入磨	M	(8.5)	(7.6)	(2.8)	(236)	凝灰岩	破片。磨面に磨面硬化された塊の痕。丁字状スリ磨痕。	427
158-8	AN58-4	ⅢC	投入磨	M	(10.2)	7.8	2.1	(289)	凝灰岩	先端部欠損。投入部は打たれ欠。	226
158-9	AN55	ⅢA	投入磨	M	(8.3)	(8.5)	(2.6)	(296)	流紋岩	S-284, 基部片。投入部は削り付による。	486
159-1	AO54	ⅢA	投入磨	M	(12.7)	7.0	1.3	(166)	凝灰岩	S-293, 先端欠。刃部V字状。	513
159-2	AO58-4	ⅢC	投入磨	M	(11.3)	(13.1)	(1.3)	(221)	凝灰岩	S-152, 基部破片。全体をスリ磨痕。機能面に2-3mmの平断面。	313
159-3	AO58-1	ⅢC	投入磨	M	(8.8)	(9.5)	10.4	(199)	凝灰岩	投入部へスリ。	225
159-4	AN59-2	ⅢB5	投入磨	M	(11.0)	(8.5)	2.1	(292)	安山岩	基部破片と思われるが。投入部は作出来ていない。磨削具?	229
159-5	AN59-3	ⅢC	投入磨	M	(10.6)	10.2	1.6	(295)	凝灰岩	S-12, 基部片。	220
159-6	AN56	ⅢB1	投入磨	M	(7.4)	(8.7)	(1.5)	(173)	凝灰岩	S-276, 基部破片。投入部は平ら。	457
159-7	AN55	ⅢA	投入磨	M	11.0	7.9	1.6	219	凝灰岩	S-315, やや磨面なスリ磨痕。未製器か。	390

礫石器観察表 2

図番号	出土地	層位	器種	分類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石質	備 考	整理番号
159-8	AN54	ⅢA	石錠	N	14.0	9.9	8.6	1.269	凝灰岩	S-305, 全体磨削打痕跡, 広いスリ痕 (10mm)	393
160-1	AN57 + AO57	ⅢB + ⅢC	磨切具	S	21.1	12.7	1.5	586	流紋岩	S-311, 4辺が滑面。炭化物付着。磨面に磨痕なすり磨形。	396 + 550
160-2	AO51	ⅢC	磨切具	S	18.2	12.5	1.2	538	石炭安	板状礫, 半円形に磨形。磨面には粗粒なすり磨形。	492
160-3	AO59-2 + AN57-4	ⅢC	磨切具	S	18.2	(15.0)	2.5	(836)	安山岩	S-641, 465, 534と結合。板状礫, 上下磨削に刃状。加工は粗礫。	397
160-4	AN60-3	ⅢB5	磨切具	S	(12.9)	11.2	1.4	(320)	凝灰岩	S-773, 一部欠損。	319
160-5	AN59-2	ⅢB3	磨切具	S	(8.2)	(10.4)	1.3	(152)	凝灰岩	S-266, 破片。刃部磨面V字状。	299
160-6	AO58-1	ⅢC	磨切具	S	10.0	12.0	2.3	(194)	安山岩	破片。板状礫, 刀部は刃みを持つ。	297
161-1	AN56	ⅢB	石錠	On	34.5	30.0	11.8	12,100	石炭安	S-341, 木組み遺構。穿孔。両面利用。裏状の痕跡。	417
161-2	AN53	ⅢA	石皿	On	23.4	14.6	4.6	(1,884)	凝灰岩	S-376, 木組み遺構。欠損。両面利用	420
161-3		Ⅲ	石皿	On	32.5	(20.0)	6.8	(4,760)	安山岩	No 354 (85号埋設土器出土) と結合。両面利用。表面は磨片窪む。No 354 の裏面には浅い溝の痕跡が見られる。	604
161-4	AN57	ⅢC	石皿	On	(21.0)	(18.2)	2.7	(1,280)	凝灰岩	S-273, 板状礫。裏面は磨削加工。欠損。	454
161-5	AN55	ⅢB	石皿	On	20.2	18.6	6.1	2,809	石炭安	S-338, 木組み遺構。穿孔。両面利用	559
161-6	AO59-2 + PNSSWV	ⅢC	石皿	On	20.4	(12.6)	3.6	(1,082)	石炭安	609 (P-383) と結合。欠損。磨削。表面やや窪む。表面磨に打痕。	260 + 609
161-7	AN59-3	Ⅲ	石皿	On	17.0	13.4	4.2	1,338	凝灰岩	S-24, 穿孔?。片面利用	265
161-8	AO54	ⅢA	石皿	On	(22.0)	(18.5)	(9.8)	(3,243)	安山岩	S-294, 破片。片面利用	419
162-1	AN57	ⅢC	台石	Ob	35.1	9.2	7.2	4,010	石炭安	S-401, 2片が結合。大型の礫石の可能性もある。両面使用。	564
162-2	AN56	ⅢB	台石	Ob	19.2	16.2	10.1	2,881	凝灰岩	S-368, 木組み遺構。穿孔。平坦面に溝を形成する磨痕あり。	416
162-3	AN59-3	ⅢB5	台石	Ob	21.5	8.0	5.9	1,601	流紋岩	縁部近くに打痕。磨面滑らか。	286
162-4	AN57	ⅢA	台石	Ob	15.7	15.4	5.9	1,342	凝灰岩	S-206, 磨面滑らか。広い打痕。	538
162-5	AO53	ⅢC	台石	Ob	13.9	7.1	5.1	936	流紋岩	S-296, 角柱状。表面面に溝状の小さなキズ。	566
162-6	AO58-1 + AO52-4	ⅢC + ⅢB	砥石	R	14.5	8.8	6.2	1,268	流紋岩	570と結合。片面に縁磨痕。	289
162-7	AO60-1 + AN50-4	ⅢB5 + ⅢB4	砥石	R	28.4	6.1	3.5	(485)	凝灰岩	328と結合。石皿片を再利用か。上部に溝状の研磨痕。	271 + 328
162-8	AN54	ⅢA	石錠	Q	8.6	7.3	3.3	292	凝灰岩	S-216, 右側縁部を打凸文意。	432
163-1	AO53-1	ⅢC	石棒	Pa	34.1	11.5	9.8	5,900	石炭安	磨面全体に鋭いスリ。	535
163-2	AN55	ⅢB	石棒	Pa	33.3	12.0	8.2	5,100	石炭安	S-370, 表面面は平坦面で、滑らか。	537
163-3	PNSSWV	ⅢC	石棒	Pa	31.4	11.3	8.7	5,300	石炭安	S-381, 表面面は特に滑らか。	565
163-4	AO58-1	ⅢC	石棒	Pa	26.4	11.5	10.7	4,992	石炭安	磨面全体が滑らか。	275
163-5	AN60-2	ⅢB5	その他	Ta	10.5	7.0	6.0	818	緑泥質	磨削石炭安。磨切面あり。	298
163-6	AM56	ⅢB	その他	Ta	8.3	5.7	2.5	196	流紋岩	P-2151。右側縁に磨切痕。半円状入歯の可能性もある。	607
163-7	AN54	ⅢA	その他	Ta	9.8	3.0	2.7	106	凝灰岩	S-248, 磨石?。片面が滑りに滑。	562
163-8	AN56	ⅢB	その他	Ta	10.0	10.3	4.4	612	凝灰岩	S-238, 扁平な円錐。磨面全体にすり磨形。滑らか。磨石の類?。	438
163-9	AN57	ⅢA	その他	Ta	12.1	7.3	6.2	746	安山岩	S-276, 破片を再利用?。磨面は平滑。	509
163-10	AN59-3	ⅢB3	その他	Ta	18.8	6.5	5.9	1,196	流紋岩	S-98, 磨面は滑らか。磨石の可能性あり。	281

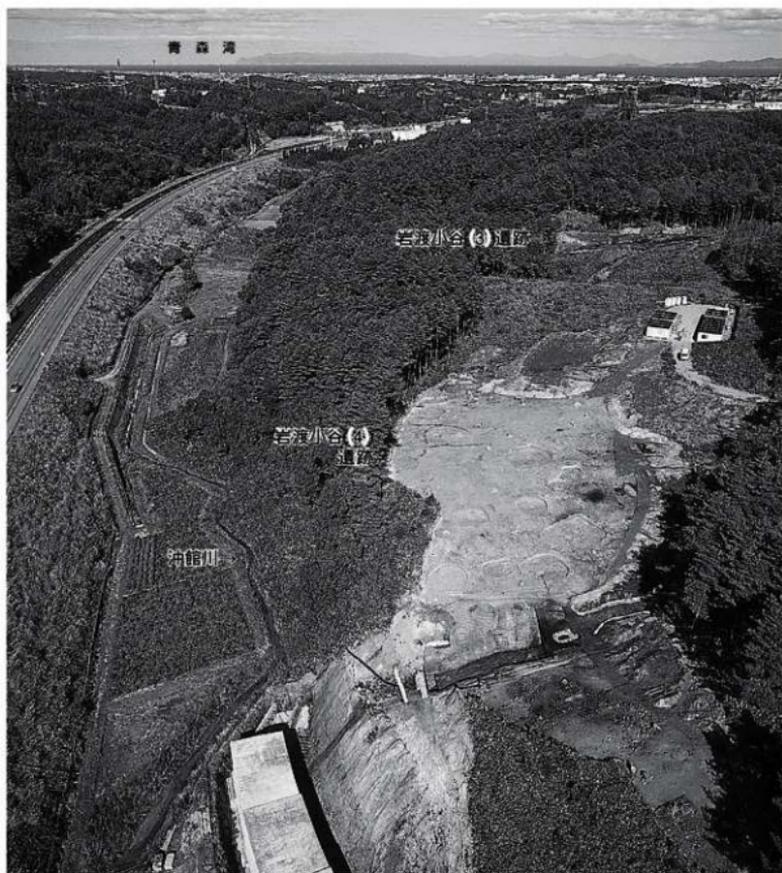
土製品一覧表

図番号	器 種	出土地	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石質	備 考	整理番号
164-1	円盤状土製品	沢	AO53	ⅢB	(50)	(23)	10	(9.8)	土器片利用の円盤。破片。P-2701。	961
164-2	円盤状土製品	沢		Ⅲ	46.0	42.0	12.7	25.1	土器片利用の円盤。穿孔。周縁の大部分スリ。P-270。	5
164-3	円盤状土製品	沢 9	AN59-3	ⅢC	50.4	42	7.9	19	土器片利用の円盤。穿孔。周縁スリ。P-639。	7
164-4	円盤状土製品	沢	AO60-1	ⅢC	(51)	51.0	8.6	(18.6)	土器片利用の円盤。破損。方形。P-689。	768
164-5	円盤状土製品	沢 5ベルト		ⅢC	51.3	50.3	8.4	24.1	土器片利用の円盤。	801
164-6	円盤状土製品	沢		ⅢC	48.6	44.0	11.0	15.5	土器片利用の円盤。穿孔。	805
164-7	円盤状土製品	沢	AN61-2	ⅢB4	57.7	57.3	8.4	33.1	土器片利用の円盤。穿孔。P-630。	8
164-8	円盤状土製品	沢	AP61-1		(53)	(52)	15	(35.9)	円盤状土製品。表面面に横文意。破片 Ⅳ/4。	2

石製品一覧表

図番号	器 種	出土地	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石質	備 考	整理番号	
161-1	石塊	沢	AN58-3	ⅢC	(90.3)	(63)	(41.4)	(203.1)	粗粒凝灰岩	磨削。	1
161-2	磨石	沢 Yベルト	AN58-2	ⅢC	47.0	41.0	11.0	14.2	粗粒凝灰岩	一部破損。	12
161-3	不磨	沢	AN56-1	ⅢB	56.4	54.6	35.0	22.1	緑石	中央に凹み。5-クマシ。	6
161-4	浮き?	沢	AP61-1	ⅢA1	81.0	55.0	51.0	49.5	緑石	穿孔。三角形状。貫通孔あり。	7
161-5	不磨	沢		ⅢC	60.6	45.5	24.1	30.3	粗粒凝灰岩	中央に凹み。5-351。	2
161-6	浮き	沢		ⅢC	60.5	52.6	37.0	20.4	緑石	縁部穿孔。十字状の刻み。S-68。	8
161-7	不磨	沢	AN58-3	ⅢC	128.6	136.2	58.2	471.5	緑石	四角形。裏材?	9
161-8	不磨	沢	AO53-1	ⅢA1	20.0	52.2	31.4	48.5	緑石	長方形状。裏材?	10
161-9	長條円	沢	AO60-1	ⅢC	20.0	33.0	25.8	20.4	緑石	棒状	5
161-10	不磨	沢	AN59-1	ⅢB	105.5	41.8	47.2	80.0	緑石	棒状。	11

# 写真図版



遺跡遠景 南から

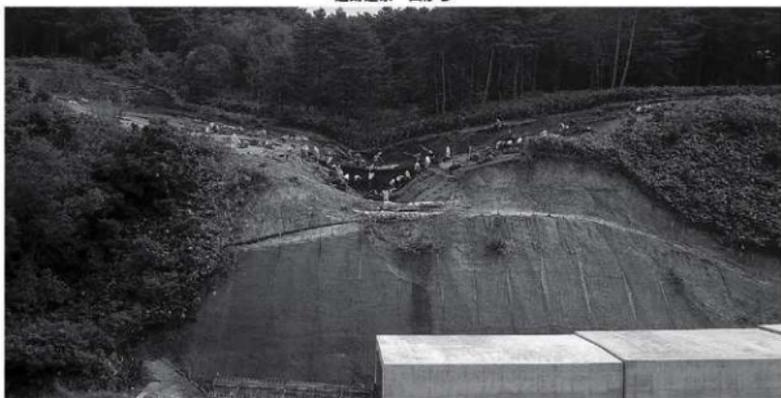


遺跡遠景

写真1 遺跡遠景1



遺跡近景 西から

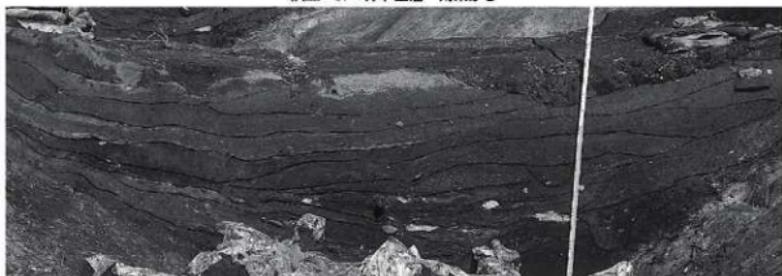


遺跡遠景 西から

写真2 遺跡遠景2



沢Ⅲ・Ⅳベルト土層 南東から



沢Ⅴベルト土層(アップ) 西から



沢Ⅵベルト土層 西から



沢Ⅴベルト土層中央 西から

写真3 層序1



調査区境界土層 西から



調査区境界土層(アップ)



支流VII~IXベルト土層 南から



AN57基盤土層 西から



VIベルト土層付けたし 西から



AN55・54付近基盤土層 西から



検出状況1 西から



検出状況2 南東から



東側からの検出状況 東から

写真5 第1号木組遺構(全体1)



全体検出状況 南から



全体検出状況 北から



全体検出状況 南から(アッパ)

写真6 第1号木組遺構(全体2)



導水部検出状況 北から



導水部検出状況 西から



導水部検出状況 東から

写真7 第1号木組遺構（導水・貯水部1）



貯水部東側・木杵部分 南西から



杭検出状況  
(30-4)他  
東から



杭検出状況(40-3)他 東から



貯水部東側検出状況 北から



杭検出状況 南から



貯水部木組部分 南から

写真8 第1号木組遺構(貯水部2)



貯水部内 東から



貯水部分検出状況 北から



44-1 先端部(北側) 南から

土器出土状況 南から

石斧柄未製品出土状況 北から



貯水部北枠外側検出状況 北から

写真9 第1号木組遺構(貯水部3)



堰部検出状況 東から



堰部南側(アップ) 南から



堰部側面 南から

写真10 第1号木組遺構(堰部1)



埋部(第3・4列)と底板検出状況 北から



埋部(第4列)と底板検出状況 南から

写真11 第1号木組遺構(埋部2)



堰部(第4列)側面 南から



權転用杭(31-3)検出状況 東から



堰部(第4列)後方杭検出状況 東から

写真12 第1号木組遺構(堰部3)